明治書院

PL
758
.21
G6
1932

Goshirakawa, Emperor of
Japan
Ryōjin hishō Rev. ed.

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2010 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/ryojinhisho00gosh

文學博士和田英松序説
文學博士常盤大定序説
文學博士佐佐木信綱解説並校

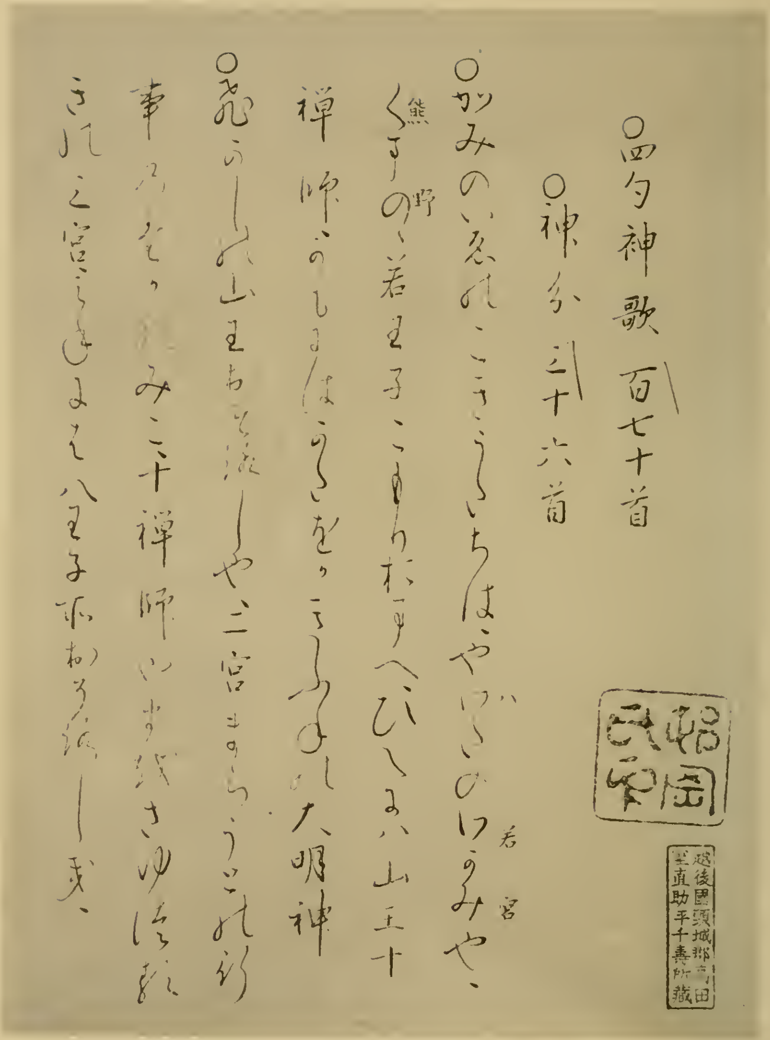
改訂版

梁塵秘抄

東京
株式會社明治書院

PL
758
.21
G6
1932

LIBRARY
FEB 14 1957
UNIVERSITY OF TORONTO



○四句神歌　百七十首

○神分　三十六首

○かみのいゑのこきむたちは、やはたのわかみや、

くまのゝ若王子こもりおまへひえには山王十

禅師かもにはかたをかきふねの大明神

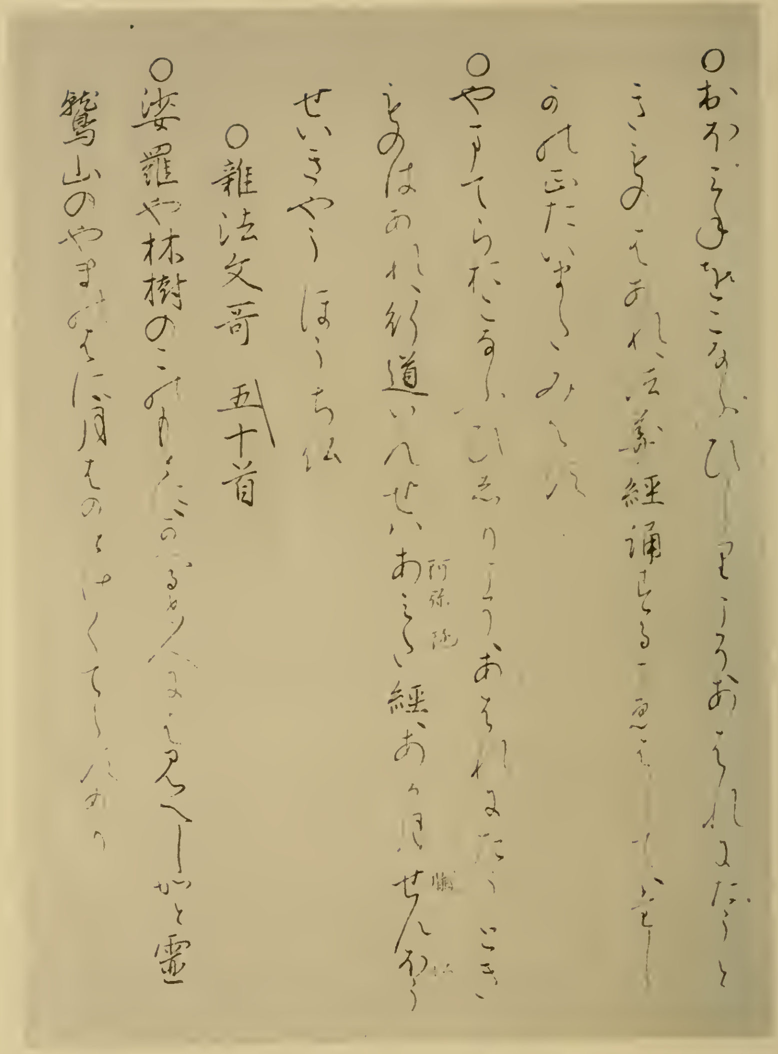
○あつまのしん山王おそろしや二宮まらうとの行

事のたかのみこ十禅師山なかいするき

さんの宮みねには八王子そおそろしき

越後國頸城郡高田□直助手千壽所藏

梁塵秘抄　巻二（巻頭乙）



○おほみねをこなふひしりこそあはれにたうときことそあれ法華經誦するこゑはしてたしかのしやうたいまたみえす

○やまてらをこなふひしりこそあはれにたうときものはあれ行道いんせいあみた經あかつきせんほうせいきやうほうち仏

○雑法文哥　五十首

○婆羅や林樹のこのしたにかへるとひとにはみえしかと霊鷲山のやまのはに月はのとけくてらすなり

梁　塵　秘　抄　　巻二（甲）

梁塵秘抄〔改訂版〕緒言

わが國の歌謠史上、大いなる價値を有する梁塵秘抄は、さきに和田英松博士が發見せられ、予これを學界に紹介したことである。しかも、それは卷二の零本であるので、完本の世に出づることあらばと、多年搜索をつづけてをるが、すでに刊行した卷二と卷一の斷簡以外には、五辻家本も、寂蓮筆本も、正韵書寫本も、その轉寫本も、未だ見ることを得ぬ。

それで、初版本及び增訂本を更に訂正し、版を新たにせるこの改訂本を世に公にすることとした。增訂本の附錄に揭げた山田孝雄博士等の論文は、遺憾ながら割愛して、初版本に附した和田、常盤二博士の解說に訂正を請うたものを卷頭に揭げた。

本文は、讀みやすからむが爲に漢字を多くまじへたが、假字遣は原本のままにした。初版本の序言にも述べたごとく、原本の字體は極めて曖昧なので、まさしく原本の誤とおぼしきものは改めて、脚註に「點」原「轉」とやうに記した。また諸家の說

は脚註に略記し、略附號を以てして、この難讀の書に對する諸家の苦心を永く傳へることとした。卽ち和田博士(和)、常盤博士(常)、高楠順次郎博士(高)、山田博士(山)、高野辰之博士(野)、志田義秀君(志)、筑土鈴寛君(筑)、小野玄妙君(小)、豐田八十代君(豐)、源豐宗君(源)、藤田德太郎君(藤)、志田延義君(田)等である。

今や文獻學的研究の盛んな機運が到來して、從つて、學界に知られなかつた古鈔本のたぐひの出現したものが尠くない。梁塵秘抄の完本の、いづこよりか發見せられむことを、切望してやまぬものである。

昭和七年五月

佐佐木信綱

增訂版本序言

幾百年間學界に埋もれ居し梁塵秘抄の世に出でつることは、明治の末期に於ける國文學界の驚異ともいひつべきことなりき。しかしてこれを刊行してより、既に十年を過ぐ。その間、をりにふれて搜索を怠らざりしかど、もとの寫本だに出づること無かりしが故に、研究者にとりて、この書はなほ唯一のよりどころたらざるを得ず。しかもこの書、今や市上にその影を見ざるにいたれり。よりて改版を發行せむとするに、書肆の希望によりて、全部もとの紙型を用ゐることとなしつ。附錄として、和田、山田、志田、武田、高楠氏の新たに執筆せられし文、新村氏の藝文に揭げられし文、Waley 氏の Journal of the Royal Asiatic Society に揭げられし文（本書の歐洲の學界に紹介せられたる最初のもの）並に余の文を載することとせり。諸氏の文詞は、とりどりに後の學者を裨益するところ多く、本書の爲に、はた學界のために、深く謝するところなり。ことに、山田、志田二氏の精緻なる研究よりなれ

る長篇は、本書中の幾多の疑問を解決し得、隨つて本書の面目を一層眞實に世に示すを得るに至れること、感謝に堪へず。なほ刊本の原書は、さきに和田氏より贈られて、余が珍襲するところとなれり。併せてここにこれを謝す。また宮內省圖書寮所藏にして唯一の寫本なる唯心房集、及、希世の珍寶と稱すべき金剛寺所藏の嘉應二年書寫今樣、大報恩寺所藏の佛體內所現和讃を、新たに玻璃版として掲ぐることを得たるは、本書のためによろこびとするところなり。

大正十二年五月

佐佐木信綱識

初版本序言

梁塵秘抄の名は、徒然草に、「梁塵秘抄の郢曲のことばこそ、またあはれなる事は多かめれ」とあるによりて、知らざる人なかるべし。しかもその書は從來またく湮滅せりき。さるを去年の秋、學友和田英松君、書肆より梁塵秘抄卷二と題せる二冊の書を贖はれしが、歌謠に關する書なればとて、直ちに余に貸されぬ。研究の結果、その後白河院勅撰の梁塵秘抄の零本なることを確かめ得、かつ我が國文學史上、貴重なる資料たる事を知り得つるにより、十月の末、文科大學國文談話會に於いて、本書に就きて談り、その筆記は、今年一月の日本及日本人に掲げぬ。然るに、こたび本書を刊行して、世に公けにせむとするにのぞみ、和田君が再び其の書を貸與せられ、また精細なる考證一篇を草せられしは、余の深く感謝するところなり。なほ本書中の佛語に就きて、一わたりそを塡充せしのち、常盤大定君を煩らはししに、君は短時日中にその事に當られ、かつ一文を物せられぬ。はた鷲尾順敬君は上卷、

關根正直博士は下卷に就きて、有益なる助言を與へられしは、とりどりに感謝に堪へず。

原書はその筆寫極めて良からず。うづなく誤字とおぼしきものあれど、猥りに改めず。假字遣ももとのままにせり。句讀は、原藏者が朱にて施ししものを改めただし、濁點は新たに加へ、また旁註を施しつ。元來原書にはたま〳〵漢字をあてたれど、殆ど假字のみにて、加ふるに、一字か二字かのわきがたきもの、字體の、或はいくともゝともしとも、或はえともしともミとも、或はつともへともりともわとも讀み得らるる類多きをもて、その文字を塡つる爲に、尠からざる日數を費しつ。しかも歌謠の性質上、當時の流行語、隱語とおぼしきものあり、また風俗世相のわきがたきもの等ありて、なほ明らかならざるふし尠なからず。そは見む人の考に讓り、かつ完本の發見によりて訂正せられむを俟つ。

なほ本文の校正をなし居し際、綾小路子爵家より、梁塵秘抄卷第一同口傳集卷第一の斷簡一卷、發見せられつれば、その本文は卷末に添へ、その全部三葉を寫眞版

にものして、和田君所藏のとともに卷のはじめに載せつ。また妙法院所藏の後白河院御影、神護寺所藏の後白河院宸翰は、妙法院及び神護寺の快諾を得て、東京帝國大學文科大學史料編纂掛に於いて蒐集撮影せられしものを請ひ、複寫して卷頭に掲ぐる事となしつ。

明治四十五年七月

佐佐木信綱識

梁塵秘抄〔改訂版〕目次

改訂版緒言……佐佐木信綱……一
增訂版序言……佐佐木信綱……三
初版序言……佐佐木信綱……五
梁塵秘抄に就いて……和田英松……一
梁塵秘抄中の佛教……常盤大定……二四
梁塵秘抄卷二解說……佐佐木信綱……四六
梁塵秘抄卷二目次……一
梁塵秘抄卷二……一

梁塵秘抄卷一同口傳集卷一斷簡解說……佐佐木信綱……一二一

梁塵秘抄卷一同口傳集卷一斷簡……一二七

玻璃版

梁塵秘抄卷二……卷頭

梁塵秘抄に就いて

和田英松

梁塵秘抄は、後白河法皇の御撰で、皇子守覺法親王の右記に「所謂神樂者、神世之妙曲、人代之節歌也、中略則梁塵秘抄有此事、彼抄御製作云々」と記され、御曾孫順德天皇の八雲御抄に「後白河院の梁塵秘抄といふものに、今樣の上手のやうをかゝせ給へる」と見え、徒然草に、「梁塵秘抄の郢曲の言葉こそ、またあはれなる事は多かめれ」とかいてある。これによれば、神樂今樣などの諸物に關する事をかゝせられたるものゝやうで、卷數は本朝書籍目錄に二十卷と記してある。また文永中、隆圓法師のかいた文机談といふものには、梁塵秘抄を納れられた御手筥は、六條殿なる御文庫に納められたものゝやうにかいてある。六條殿は法皇の御所で、有名な長講堂は、此御所の中にあつた。六條殿、及び長講堂は、後鳥羽天皇の文治四年以來、屢火災があつたから、宸筆の梁塵秘抄も、定めし燒失したものと見えるが、徒然草にも引いて居るのを見ると、その寫しは已に傳はつてゐたものらしい。橘經亮の橘窓自語には、伏見宮家に傳へられた世になき梁塵

秘抄のうたひものゝ部にも、催馬樂の事がかいてあると記して居るが、今日にては、殆ど散逸して、唯梁塵秘抄口傳集と稱ふるものが世に傳はつて居るのみである。予は先年歷朝御撰の御書籍を調べて見た事があるので、この梁塵秘抄の事も、常に心がけてゐたのであるが、古本屋などで、時々梁塵秘抄と題するものを見たけれど、いづれも、一條兼良の梁塵愚案抄の表題をかへたもののみであつた。然るに、昨年秋の頃、下谷の文行堂で、梁塵秘抄とかいてあるものを見つけた。また例のかと思ひつゝ手にとつて披いて見ると、これは梁塵愚案抄ではない。和讃今樣體のもので、神佛に關する歌をあつめたものである。中には、源平盛衰記や、古今著聞集などに見えて居る今樣もあつて、後世のものではないやうであるから、とにかく購うたのである。

まづ此書の傳來は、卷の始に、「越後國頸城郡高田室直助平千壽所藏」及び「郁岡氏印」の印を踏してある。寫しは新しいけれど、奧書に、寂蓮手寫の本を徹書記の門弟正韵が相傳したものによつて、謄寫した事が書いてある。これによると原本は餘程ふるかつたものゝやうである。甲乙二卷あつて、外題には、卷一卷二と記してあるが、甲の始めには、梁塵秘抄卷第二として、乙の方には、卷數も書名も揭げてないのを見ると、もとは一卷であつたのを、分本としたものらしい。甲には、法文歌二百二十首、乙には四句神歌百七十首、二句神歌百十八首(中に揭げてある歌の數さはあはぬ)を載せて

ある。即ち歌謠の中なる法文歌、神歌を撰集したもので、いづれも、平安時代に行はれた歌謠である。まづ法文とは、源氏物語、狹衣、榮華物語などにも見えて居る詞で、多くは、經文などの意に用ひられてある。但、此の書の法文歌の目錄によつて見ると、花嚴、阿含、方等、般若、無量義、普賢、法華經を始め、懺法、涅槃、極樂、佛歌、僧歌、雜法文等、泛く佛敎に關するものを詠じたものである。體源抄に、

續敎訓抄所載ノ音曲ノ中ニ、一體ナルコト見エタリ、法文歌習アマタアリ、イハユル、沙羅林ノヤウト云、常ノ今樣ヨリハ、少シフリノベテ、オウヤウニアワレナルテイニ歌フベシトアリ、只ノ今樣ノヤウニ歌ヒテ、此事ヲワクモノナシ、オホヤウナリナド云ヒテ、ニクミテ、今ハ沙羅林カヤウハウタハズ、アルマジキ事也

とあるが、之を以て考ふれば、法文歌と娑羅林とは同じきものゝやうである。なほ梁塵秘抄口傳集、拾芥抄等の諸書に、法文歌と娑羅林とを一ところに倂記して居らぬのを見ても、別の物でない事が推測せられる。娑羅林とは、釋迦が涅槃に入るの時、娑羅双樹の下で入滅した故事によつて、法語に屬する今樣の名目となつた事が、歌儛品目に記してあるが、この書の雜法文歌の始に

娑羅や林樹のこのもとに、かへると人には見えしかど、靈鷲山の山のはに、月はのどけくて

　娑羅林にたつけぶり、のぼると見しはそらめなり、釋迦はつねにましまして、靈鷲山にての
　りぞとく、

とある歌などによつたものであらうか。
　次に神歌は、四句が今樣、二句が普通の和歌である。まづ神歌の名目は、大江匡房の傀儡子記にも、田歌、神歌、棹歌、辻歌と見え、歌儛品目にも、「神祇ノ辭アル者ヲ神歌トシ」とあつて、法文歌に對して、神祇に關する事を詠じた歌謠のみのやうに思はれる。されど、此書に收めた神歌の中には、佛歌、經歌、僧歌、靈驗歌、雜歌等の品目があつて、法文歌に入るべきものは勿論、神祇に關係なき歌の少からざるは、蓋し神歌も、もとは神祇の事を詠じた歌謠のみで、謠ひかたの曲節も異つて居つたのを、後には、歌詞は佛教に關するものでも、謠ひかたが神歌の曲節で謠ふべきものをば、すべて神歌と稱したものと見える。其證は、侍從大納言成通卿が、雲林院で蹴鞠をして居つた時、俄に雨が降つたから、晴れるのを待つ間に、

　雨ふれば軒のたま水つぶ〳〵といはゞやものをこゝろゆくまで

らすめり、
法華經壽量品の歌に

といふ戀の歌を神歌に謠うた事が、古今著聞集、體源抄に見え、また八幡の袈裟といふものが、若宮の御前で、

奥山にしをるしをりは誰がため身をかきわけてうめる子のため

といふ歌を泣々神歌にうたうて、一女の病を祈つた話が、今物語にかいてあるのを見ても明である。されば、後には歌詞でなく、一の曲節の名目となつたのである。この雨ふればの歌や、奥山にの歌が、卽ち二句の神歌といふべきもので、四句の歌の事は、今鏡に、

いづれの齋の宮とかへ、人のまゐりて、今樣うたひなどせられけるに、まつかたに、四句の神歌うたふとて、「植木をせしやうは鶯すませんとにもあらず」とうたはれければ、心とき人聞て、はゞかりある事などやいでこんと思ひける程に、「くつ〳〵かうなるなめすゑて、染紙よませんとなりけり」とぞうたはれたりける。

と見えて居る。なほ神歌の謠ひ方は、前句の末歌を纔に籠めざまに、次句を出すのだといひ、古くはつゞめて、短かく謠うたものであるが、後には長くなつたと、體源抄に記してある。此の如く、法文歌神歌は、平安時代の頃、行はれた歌謠である事は明瞭である。殊に神歌の中なる雜歌には、平安時代の末に於ける風俗世態を窺ひ見るべき、面白い材料が頗る多い。且つ、此書に載

せてある歌で、他の書に見えて居るのは、概ね鎌倉時代以前のもので、其以後の歌は、殆ど見當らぬのである。されば、後白河法皇の御撰とすべき徴證はなけれど、時代も相當して居る上に、また別に否定すべき點も未だ見出さないから、御撰としても差支へはあるまい。但、此零本が卷二で、法文歌、神歌を載せてあるから、卷一は、定めて神樂、催馬樂、風俗などを收めてあつたものゝやうに考へられる。ところが、此頃佐佐木博士が綾小路子爵家より借覽せられた梁塵秘抄の卷一の目錄に、長歌、古柳、今樣を載せてあるのを見ると、神樂催馬樂は三四以下の卷に收めたものと見える。さてその一卷はもと綴ぢてあつたのを、裏打して卷物としたものであるが、全部ではなく、書き拔きしたものゝやうに見え、末の方には、梁塵秘抄口傳集といふもののさへそへてある。されど、文書の裏にかいたもので、寫しは頗る古く、室町時代より下る事はあるまい。二三載せてある今樣の中、和歌の集を詠んだものには、公任卿の金玉集、朗詠集、及び前後十五番歌合より以後のものはなく、歌人をよんだものには、道命、和泉式部までを擧げて、それより以後の人なきを以ても、後世のものでない事が知られ、卷二と同書なることは明である。且つこれによつて、長歌は、卽ち普通の和歌である事も、古柳の名稱は、歌詞から出た事も、其歌體のかはつて居る事も知るを得た。世にも珍らしく、卷二と共に、中世の歌謠を研究するには、實に

貴重な資料である。なほ、其内容等に就いては、同博士の委しい解説があるから、予はこれより、梁塵秘抄口傳集についての考證を試み、夫によつて、この梁塵秘抄の御撰なりや否やを、判定する考である。

梁塵秘抄口傳集は、世に傳はつて居るのは、卷十が一卷であるが、此度綾小路子爵家から出たのは、卷一の殘闕である。先づ卷十は、群書類從三百五十二にも收めて、奥書に、

此本は、妙音院入道殿御本歟、而法性寺禪定殿下御邊、年來御日記に相具して、被取置之由傳承者也、而二條中將經定預置之間、彼羽林依爲雜曲之弟子、密々借寄て書寫之也、

寛元四年八月廿一日送給之、同廿二日書寫之、

此草子、自入道中納言經資遺跡、所尋取也、

康曆元年長月十七日書了、此奥之御奥書者、伏見院宸筆也、御所御本、自當家文書出來之間、當道雖不相應、猶依因緣以老眼書之、頗以枝葉歟、

(御花押)

とかいてある。妙音院入道は、惡左府賴長の子師長で、法性寺禪定殿下は九條兼實、二條中將經定は、水無瀨親定の子である。入道中納言經資は、郢曲の家元なる綾小路有資の子で、經定は有

資の門弟である。寛元の奥書は有資、次に此草子云々は、伏見上皇の宸翰である。康曆の奥書は、伏見宮榮仁親王のかゝせられたもので、親王御筆の本は伏見宮家に傳へられてある。是によると、此書は、もと師長の所藏であつたのを、兼實の手許に取寄せて、子孫に傳へたものらしい。それを二條經定が保管して居つたのを、師弟の緣を以て、内々綾小路有資に寫させたものと見える。有資の子經資が歿してから、之を伏見上皇に獻じたので、其本によつて、康曆元年、榮仁親王が御寫しになつたものである。なほ本書最終に、師長は、今樣の弟子であつた事が見えて居るから、其關係で、特に此書を寫したものと思はれる。此の如く、來歷は正しく、康曆の寫本も、其まゝ今日まで傳はつて居る。されど、是も十の卷一册のみで、其内容は殆ど類從本と同樣である。さて、此書は卷の始に、

神樂、催馬樂、風俗、今樣の事のおこりより始めて、娑羅林、只の今樣、片下、早歌うたふべきやう、初積、大曲、足柄、長歌を始として、やうやうの聲かはるやうの歌、田歌に至るまでしるしおはりぬ、かやうの事、一樣ならねば、後にそしること多からむか、それをしらず、故事をしるし終りて、九卷は撰び終りぬ、よむ歌には、髓腦打聞などいひて、多くありげなり、今樣には、未ださる事なければ、俊賴が髓腦をまねびて、是を撰ところ也、

とあつて、神樂、催馬樂、風俗、今樣等の起原、及び娑羅林以下の歌ひかた等を九巻に記されたもので、卷尾に、

大方詩を作り、和歌をよみ、手をかくともがらは、かきとめつれば、末の世までもつくる事なし、此わざの悲しき事は、我身かくれぬる後、とゞまる事のなきなり、其故に、なからんあとに、人見よとて、未だ世になき今樣の口傳をつくりおく所なり。

とあつて、此の十卷には、和歌の髓腦にならひて、今樣の口傳を記されたのである。大日本史禮樂志には、この口傳集を後白河法皇御撰として引いてあるが、なる程、御撰なる事は疑ひないやうである。まづ其内容は、十歲の御時より今樣を好ませられた事、其頃今樣の名人の事、遊女の中から名匠を召して、今樣を習學せられた事、今樣合の事、今樣を謠ふ音聲などの事を詳細に記されたものである。其紀事について見れば、

我永曆元年十月十七日より、精進を始めて、法印覺讃を先達にして、二十三日進發しき、

とあるのは、百練抄に、「永曆元年十月二十三日上皇始御幸熊野山」とあるに符合し、また、

仁安四年正月九日より、精進を始めて、同十四日進發二十六日奉幣也、今度第十二度に當りて、

出家のいとまを申に參る

とあるのは、兵範記に、「仁安四年正月九日丙寅、上皇入御熊野精進屋、中略十四日辛未、去曉上皇御進發」と見えたるにあひ、且つ是年六月十七日御出家あらせられたのであるから、出家のいとまを申にとかゝせられたのである。また、

同じとしの二月七八日（廿カ）頃、おほ雪降たりし日、さまをかへむいとま申に、賀茂へ參りき、○中略次第の事みかぐら果てゝ其後、法華經一部、千手經一卷を轉讀し奉り、終りて後に、成親卿平調に笛をならす、催ばらを資賢いたす、青柳更衣いかにせんなり、其後われ今様をいたす、

とあるのは、愚昧記、兵範記に、二月廿九日としてあるが、この書は後日に記されたるもので、日時に多少の相違はないともいはれぬ。愚昧記に、「朝間雨降」と見えて、大雪とあるにはあはぬやうであるが、雨は雪の誤ではあるまいか。同書に、下社にての事を記して、次に「有御讀經事、御經二部、次有郢曲事」とありて、此書に、法華千手二經御讀誦の事、催馬樂今様の事見えたるに符合して居る。また、

あきの嚴島へ、建春門院に相ぐして參る事ありき、彌生の十六日京を出て、同じ月廿六日參りつけり、

とあるが、これは、百練抄に、「承安四年三月十六日、上皇建春門院臨幸安藝嚴島」と見えたるに

あひ、

我八幡に參りて、十ケ日籠りて、千部經を始めてよみしに、九月廿日より籠りたりしに、廿五日の程、經はてゝ今樣を御前にして、よもすがら歌ひき、治承二年九月廿四日の事なるべし、とかゝせられたのは、北院御室日次記壽永元年十二月條に、「治承二年九月廿日庚辰、一院始自今日限十箇日令參籠八幡宮、毎日有御經供養」とあるに符合して居る。其外、遊女乙前について、今樣を御習學あらせられた事があるが、禁秘御抄にも、「後白河院今樣遊女乙前」と記され、源資賢に今樣を受け給ひし事の見えたるは、郢曲相承次第に、「大納言資賢後白河院御師匠也」とかいてある。また資賢の子資時に、今樣娑羅林以下、田歌に至るまで御傳授あらせられたが、治承二年三月より、二年間に皆傳せられた事を記されてあるが、是も、同次第資時の下に、「今樣者、家說憶受庭訓之上、爲後白河院勅弟、被下奧書、十三年に習ひたる事を、只二年にならひとりぬる、以外事也」とかいてある。また始に「其かみ十餘歲の時より、今に至るまで今樣を好みて怠る事なし」と見え、下に「おほよそ今樣を好む事四十餘年の功を致す」とかゝせられ、次に、「我身五十餘年をすごし」とあるが、法皇の降誕あらせられし大治二年より推算して見ると、此書に見えたる治承二年は、五十三の御年にあたらせられたのである。然るに、此書の始には、「かくの如く好みて、

六十の春秋を過しにき」とあつて、御年齢があはぬのである。或は六十は、五十の誤寫ではあるまいか、但此書を撰ばれたのは、治承以後で、五十有餘の御年齢でいらせられたから、たゞ其大よそを記されたものと見てよろしからう。また終の方に、

嘉應元年三月中旬のころ、これ等をしるしをはりぬ、やう〳〵えらびしかば、初けん程はおぼえず、

とあるが、嘉應元年にては、四十三歳の御時であるから、六十の春秋にては尙更あはぬのである。されど、此御奥書には、前の嘉應より十年後なる、治承二年九月、嚴島御幸の記事を載せられてあるから、此御奥書は、こゝにあるべきものでなく、恐くは、十巻より前に撰ばれたいづれの巻かに副へさせられたのが、攙入したものではあるまいか。かやうに、所載の記事の上にては、御撰とするに殆ど疑ふべき點もなく、且つ其文章詞づかひのさまにても、臣下の撰んだものでない事は明瞭である。なほ高松宮御所藏手鑑に收められたる伏見天皇宸筆に、後白河法皇の雜藝の事をかゝせられて、その次に、「御口傳三十餘歳の頃と云云」とあるのは、この口傳集の事なるべく、伏見天皇も、これを後白河天皇の御撰とせられたものと拜察するのである。

次に綾小路子爵家所藏の梁塵秘抄口傳集は、巻一である。これは、神樂催馬樂風俗今様等の起

原より、書き始められたものであるが、始の方ばかりで、唯其一部分に過ぎないのは惜しい事である。これを前揭の巻十と參照するに、同巻の始に、「神樂催馬樂風俗今樣の事のおこりより始めて、中略故事をしるしをはりて、九巻は撰び終りぬ」とあるのは、卽ち此巻の始に、神樂以下の起原を記された事をさゝれたもので、巻十と同じ書なるを證するに足るべく、其御撰なる事は疑もないのである。且つこの口傳集は、巻十の始終の文によつて見ると、十巻で完結して居るものゝやうに考へられる。之れを大成なされたのはいつの頃であるか、詳なる事は知られないけれども、巻十に治承より二年間に、源資時が、今樣の傳授を受けた事を記されてあるから、治承四年以後、早くも養和元年の頃には、撰ばせられたものと見える。養和元年から、法皇の崩御あらせられた建久三年までは、十二年になるが、同じ年に薨じた妙音院師長の所藏本のあつた事が、奥書にかいてあるのを見ると、此書は法皇の御在世中より、世に出されたものである事が推測せられる。かくの如く、口傳集は十巻のものであるのに、予は此外、梁塵秘抄口傳集と題するものを、巻十一より十四まで四册所藏して居る。これは藏書印もなく、奥書もないから、其傳來は知られないが、あまり後のものではあるまい。まづ、

其一は、外題に梁塵秘抄口傳集第十一とありて、巻末に「右梁塵秘抄に出郢曲部也」と記してあ

る。綾小路子爵家にも之を藏せられて、寫も古く卷物となつて居るが奥書はない。是は、群書類從三百五十に收めたる郢曲抄と同じもので、始に、「夫唱物音聲のことを末世の爲めに書きのこすものなり」とあつて、神樂、催馬樂、今様等歌謠の音聲について記したるものである。中に松殿殿下基房公仰にはと見え、妙音院相國びはの御譜と記してあるによると、帝王の御筆づかひとは思はれない。

其二は、表題に梁塵秘抄口傳集第十二とあつて、双調、黄鐘、二調についての音律、紙屋川の畔に住める人、朗詠を双調に謠ひ、和琴を彈じて、催馬樂を謠ひし事、今様會の事、清盛六波羅亭管絃の事どもを載せてある。開卷第一に「絲管抄被遊候北院大室」とある。北院守覺法親王は、後白河法皇の皇子でいらせられ、且つ終の方に、「松殿殿下御宅」などあれば、これも御撰ではあるまい。

其三も、梁塵秘抄口傳集第十二とあつて、卷數は前のと同じであるが、内容は異つて居る。これは、敦實親王の御譜、及び和琴のしらべ、神樂、催馬樂、樂前張、菅掻等の譜、催馬樂などの謠ひやう、音律の三差、五音圖說、五音名義等の事をかいてある。また治承二年四月下旬の頃今樣の會ありし事、治承二年九月上旬、東山法性寺經供養に參詣の事を記してあるが、これも北院

御室の絲管抄の事が載せてあるから、御撰ではない。

其四は、表題に梁塵秘抄口傳集巻十四と記してある。始に崇德天皇より賜はりし催馬樂、今樣の譜の事を記し、次に、五臓之音及び平調以下の音調の事、僧徒の加陀音、錫杖節の事、仁安元年の頃、今樣會の事、同じ頃、左女牛の盲者今樣講のまねをしたる事、承安四年の春の頃、旱によりて、今樣を謠ひて雨を祈る事、應保三年の正月の頃、今樣式講の時東遊歌の事、石淸水臨時祭の歌の事、久壽元年三月の頃、紫野社神遊歌行はれし事、及び一條天皇の頃より、疫神祭行はれし事、神遊の歌拍子等の事、同人長の事、六月祓、鎭魂祭の事、和琴と神樂催馬樂等の事、和琴の起原、及び同名器の事、管琴の名器と練習の事、敦光改元勘文を朗詠にせし事や、資賢卿の話どもをのせてある。これも、北院の絲管抄を引き、また、承安四年春旱のところには、

みかど淸涼殿にして御祈ありと聞ぬ、同時にして、澄兼（賢）坊のてがらといへども、われもまた、松殿の仰にて、岩龍神に、今樣足柄、黑鳥子、あら河など謠ひぬ、結願はてぬに、大雨ふりぬ、かやうの事にて、澄兼坊に坊官あり、われは何の沙汰もなし、それとても今樣秘歌のとくを思ひてかきつくるなり、

とあるので、御撰でない事を證せられる。然らば、是等の書は假托して作つたものであるか、別

人の著書であるのを、御撰の梁塵秘抄口傳集に似て居るから、後人が、殊更に此書名と卷數とを付したものであるか、いづれにしても、御撰の書とは別のものである事は明確である。

かゝれば、梁塵秘抄口傳集と題するものには、御撰のものと、別のものとの二種あつて、御撰のものは十卷であるが、前掲の梁塵秘抄の一二の兩卷も亦、果して御撰であるか、この口傳集とは別のものであるか、秘抄にも、口傳集にも、卷一があるのを見れば、同じものでない事が知れ、且つ一は歌謠に關する事ども何くれと記され、一は歌謠の集と見るべきものであるから、其體裁もかはつて居る。然らば、法皇は梁塵秘抄の外に、同口傳集をも撰ばせられたものであらうか。或は前掲の梁塵秘抄一二の兩卷は、別に御撰とすべき明徵がないから、同名異書で、御撰の梁塵秘抄とすべきものは、口傳集の外にはないのであらうか。さりながら、御撰の梁塵秘抄は廿卷なる事が、本朝書籍目錄に記してあるのに、口傳集は十卷で完結になつて居るから、卷數があはぬ。また八雲御抄以下に引いてあるものは、梁塵秘抄とあつて、口傳集の三字をそへたものゝないのも不審である。全體、此書名は、梁塵秘抄がもとで、口傳集はそれに對してそへられたものと見なければならぬ。然るに、廿卷の中、十卷が、此の如く口傳集の三字を付してあるのを見ると、他の十卷は、原名のまゝであつたものと思はれる。丁度、前掲の梁塵秘抄一二の兩卷は、

書名も同じく、時代も相當し、また別に否定すべき點もないから、此十卷の零本と見ても差支はあるまい。且つ、徒然草によると、梁塵秘抄は、郢曲を集めたものゝやうにも考へられて、此零本に、長歌、古柳、今樣、法文歌、神歌を載せてあるのと符合して居る。また、口傳集の方も、神樂、催馬樂、今樣等の起原、及び口傳、何くれの事を記されて、八雲御抄、北院御室の右記等に、神樂、催馬樂今樣などの事をかゝせられた事の見えたのと一致して居るが、倚歌謠を集められた十卷と區別するために、後人が卷末に「なからんあとに、人見よとて、未だ世になき今樣の口傳をつくりおくところなり」とあるのによつて、殊更に、口傳集の三字を付し、卷數をも改めたものと考へられる。併しながら、これは一部分に過ぎない零本によつて臆測したものであるから、若しも全部が世に出たならば、甚しく誤つて居るかも知れない。

さても、梁塵秘抄を御著述なされた後白河法皇の謠ひ物にも御堪能の事は、禁秘御抄に、「鳥羽、後白河御催馬樂雖不究其曲、已晴御所作云々、又後白河今樣無比類御事也、何も只可在御心」と見え、院中にて、屢今樣合を行はせられた事が、吉記、百練抄にかいてある。中にも、承安四年九月十三日今樣合の時には、「次今樣、法皇於簾中令歌之御、御遊之趣、旁入幽玄、且是得境之故也、堂上堂下上下群集、依仰不可拂雜人」と吉記に評して居る。殊に此口傳集卷中には、今樣に關す

る御事蹟がくはしく記されてあるから、今その大様を摘錄して見よう。

法皇の今樣を好ませられたのは、十餘歳の御時で、爾來寒暑を厭はせられず、晝夜の別なく御練習あらせられた。或時は多くの人を集められて、舞樂を催され、その序に諸人をして今樣を謠はせられたり、或は、今樣の會を御催しになつたのである。又常に、雜藝集といふ謠ひ物の本を披きて、今樣、法文、早歌等を練習なされた事が三千度に及び、爲に御喉が腫れて、湯水を聞し食すだに堪へ難き御有樣であつた。されど撓ませ給ふ事もなく、百日の歌から、遂に千日の歌を謠はせられたと申す事である。また資賢、季兼などいふ其道の名匠は勿論、京の男女の、少し今樣を謠ふものや、江口神崎あたりの遊女、國々の傀儡子など召しよせて、今樣を御聽聞あらせられて、種々御研究なされたのである。ところが、久壽二年近衞天皇の崩御によりて、俄に踐祚あらせられ、まもなく鳥羽法皇が崩御あらせられ、つゞいて、保元亂が起つた爲に、今樣も暫時御中絕の有樣であつた。保元二年、五條の乙前といふ遊女が、今樣の傳統正しく、名匠比ぶものゝないといふ事を聞し召され、少納言信西に命じて、之を高松殿に召させられ、別に乙前の局を宮中に置かせられて、日夜御習學あらせられ、十餘年の間に多くの歌曲を御皆傳なされたのである。この時、乙前は八十四歲の高齡で病氣にかゝつたが、重態の趣を叡聞に達したから、直に病室に

臨ませられた。法皇は乙前の爲に、法華經一卷を御讀誦あらせられ、「像法轉じては」といふ今様を謠はせられたから、乙前は感泣して、君恩を拜謝したといふ事である。乙前が歿してから、五十日の間、懺法と、阿彌陀經を朝夕に分ちて讀誦あらせられ、尙一年間、法華經一千部をよませられ、次の年の忌月には、法華經御讀誦の後、今様の中のおもなるもの數曲を謠はせられて、乙前の菩提を弔はせられたのである。此の如く、法皇が乙前に就いて御習學あらせられたのは、十餘年で、終に其秘法を究めさせられたのであるが、御幼年より通算すると、四十餘年の間常に練磨あらせられたものであるから、遂に其妙技に達せられて、古今獨歩といふ御有様である。されば石淸水、加茂、熊野等御幸のをり、神前にて今様を謠はせられて、神明の示現を蒙らせられた事が度々あつたといふ事である。御弟子には、藤原師長、成親、源雅賢、資時、平康賴、知康、高階業房以下男女の輩が多かつたけれど、秘決奧義を傳へ給ふべきものなきを深く御歎きあらせられたのであるが、其中でも、師長、資時のみは、叡慮にかなうた樣子であつた。また、成親、康賴、知康、業房が君寵の厚かつたのも、一は今様の御弟子であつた故で、成親は終に君寵を恃んで事を起し、自滅を招いたのである。業房の妻丹後局が、後に君寵を專らにして、宮廷で勢力を振ふやうになつたのも、一は夫が今様の御弟子であつた故とも思はれる。

此の如く、後白河法皇が、今樣に堪能であらせられた爲に、同時代には、今樣が盛に行はれたけれども、後には、漸く衰へたものか、古今著聞集、增鏡などに、今樣の事が二三見え、年々行はるゝ五節殿上淵醉などに、今樣を謠ふばかりで、あまり聞えないのである。されば、今樣以下の謠ひ物を集めた雜藝集は、いつしか散逸して、世に傳本なく、御撰の梁塵秘抄すら、全部二十卷の中、存つて居るのは僅ばかりである。全體、和歌は概ね上流にのみ行はれて、思想も高尙で用語も野卑でないが、今樣以下の謠物は、上下を通じて行はれたものであるから、中には、隨分鄙俗のものも交つて居る。されど、虛飾もなく、反つて人情世態をよくあらはして居るから、其時代の言語風俗等を研究するには、きはめて重要な材料が多い。然るに、世に傳つて居るものは、上代の催馬樂の外、今樣は源平盛衰記以下の諸書に散見して居るばかりで、甚だ少いのは遺憾である。こたび、梁塵秘抄の中なる長歌、古柳、法文歌、神歌の世にあらはれたのは、實に喜ばしい事である。併し、法文神歌は、古本屋の店頭で、偶然見出したもので寫も新しく、且つ誤脫もあるから、讀み難き處が少くない。その、原本となつてゐる正韵相傳の本は、既に湮滅したものであるか、未だ現存して居るのであるか、もしも原本を一覽する事が出來たならば、嘸かし訂正すべき處も多く、意義も滯りなく了解せらるるであらう。此法文神歌が出たのによつて、佐佐木

博士が熱心に探訪せられて、遂に長歌古柳等を發見せられたのであるから、いつか、梁塵秘抄全部の寫本が、名門舊家等の秘庫に襲藏せらるゝ古書の中よりあらはれるかも知れない。豈たゞに梁塵秘抄のみではない、歴史上文學上に於ける貴重なる材料の未だ世に知られないものが、隨分多い事であらう。之を提供せられたならば、いかばかりか學界を益する事であらうと思ふ。

追記　梁塵秘抄卷二の卷末に附してある奥書に、「此一帖、不慮相傳」とあつて別行に「秘本事也正韵(花押)」とあるのを以て考へると、卷二は一帖のみで、卷一、及び其他はなかつたものらしい。この正韵相傳の本は、正韵の奥書の次に、「右一册以寂蓮筆跡、徹書記門弟正韵奥書判形有之本、書寫畢」とあつて、寂蓮の書寫したものであつた事が見えて居る。これは、何人が記したものであるか、その奥書の筆者は明でないが、別に寂蓮が書寫したといふ確實なる徴證でもあつたものであるか、それとも、唯寂蓮の筆蹟と鑑定したのであるか、正韵相傳の原本によつて考究しなければ、寂蓮の正筆であるや否やは明でない。但し寂蓮は、後白河法皇と時代を同じうして居るから、差さはりはないが、果して其筆跡であつたとすると、宸筆の御本によつて、書寫したものと見てもよろしからう。また梁塵秘抄口傳集の奥書によれ

ば、妙音院相國師長が、法皇御在世の頃、一本を書寫したものであるから、或は師長の本によつて、寫したものとしても、不可はないであらう。

この書の事は、北院御室の右記をはじめ、二三の書に散見して、早くより世に名高くなつて居るが、徒然草以後のものには、見えないのを以て推考すると、餘程古くから散逸したらしい。其の一部分ではあるが、正韵相傳本、及び佐佐木博士の發見せられた綾小路子爵家本の如きは、頗る珍とすべきであらう。元祿の頃、今井似閑は、梁塵秘抄を百方捜索した事が、其の書翰に見えて居るが、終に手に入るる事を得なかつたものとみえて、其の著萬葉緯にも收めて居らぬ。似閑がもしも、この正韵相傳本や、綾小路子爵家本を一覽したならば、其のよろこびの程は、想像するに足るのである。

次に正韵の事は、奥書に、徹書記門弟と記し、名傳類纂にも、正徹門人として居るが、實隆公記には、

大永五年五月二十一日、正韵法師、號松月、自能州一昨日上洛、同六年三月十六日、松月來、先師正廣三十三回品經和歌勸進之

と記してある。先師正廣とあるのを以て見れば、正廣に就いて學んだのである。正廣の正徹

の門弟である事は周知の事であるが、正韵は、この奧書や、名傳類纂によつて見ると、正徹、正廣の二人に教を受けたやうである。されど、正徹は、長祿二年に逝去したので、實隆公記に見えて居る大永六年まで六十九年になるものである。この時、正韵の年齢は明でないけれども、假にこの大永六年を八十歳の高齢としても、正徹逝去の頃は、十一歳であるから、正徹の直弟とする時は、きはめて幼少の頃であることは言ふまでもない。されば、正廣の門人であるのを、名傳類纂に誤り傳へ、それを受けて何人か、徹書記門弟と奧書に記したものではあるまいか。

梁塵秘抄中の佛教

常盤大定

それの年ゆくりなくも、今は故人となられた芳賀博士の中介によりて、梁塵秘抄といふ珍書を一覧するの榮を得た。この書の歌謠史上に於ける位置、及びその眞價等につきては、專門の佐佐木博士の叙述中に見ゆるところで、予が如き門外の者の一辭を加ふべきでない。予の役目は、中に見ゆる佛語に關するので、敢て之に當り得るといふ次第でもないが、性來斯かるものにも、幾分の趣味を感ずるところから、進んで借覽し、大いに得る所があつた。その一端を佐佐木博士に述べた所が、之について一言を加へよとの事である。辭すべきでもないから、さきに一應の感想を述べた事であつた。博士は其後幾多の學者の說や考やを加へて、尨大な書とせられたのが、去る大正十二年の大震火災に際して、悉皆烏有に歸し、今度更に再板せらるるとの事で、予に幾分の加筆を需められた。博士の斯道に對する努力は、予に對する鞭韃である。乃ち少しく加筆して敬意を表する事としたのである。

予の屬する淨土眞宗には、改めて申すまでもなく、開祖親鸞聖人の三帖和讃といふものがある。全體、淨土教は仰いで佛陀を讃し、俯して祖師を嘆ずる事、他宗に越え、一面から見れば讃嘆宗ともいふべき歴史を有する。梁塵秘抄の撰者にましませる後白河法皇の崩去せられたるは、親鸞聖人の二十歳の時であるから、此書の撰は、恐くは聖人の生れて後であらう。聖人は實に此抄中に保存せらるゝ叡山佛教の空氣を呼吸せられたものである。その晩年の作たる三帖和讃の中に、時に同巧異曲とも思はれるまでの歌詞の存するは、素より當然である。三帖和讃を研究するものは、今後是非とも此抄を一覽して、これから和讃への經路を辿るべきである。試みに、此抄劈頭の佛歌に掲げられたる次の一首

釋迦の正覺成ることは、このたびはじめとおもひしに、五百塵點劫よりも、あなたにほとけとみえたまふ。

を以て、淨土和讃の第五首

彌陀成佛のこのかたは、いまに十劫とときたれど、塵點久遠劫よりも、久しき佛とみえたまふ。

及び諸經和讃の第二首

久遠實成阿彌陀佛、五濁の凡愚をあはれみて、釋迦牟尼佛としめしてぞ、迦耶城には應現する。

に對照して見よ。彌陀一佛に徹底せる聖人は、釋尊を通して彌陀如來に接せられたが、その思想といひ、句調といひ、實に相一致するものがあり、彼の一首が、此の二首と變形したと言つても差支へない程である。而も彌陀の信仰は、聖人に來りて新に加はれるものでは無い。此抄の佛歌の中に、次の樣な二首までもある。

あみだ佛の誓願ぞ、かへすぐ〵もたのもしき、ひとたび御名をとなふれば、佛になるとぞといたまふ。

みだの誓ぞたのもしき、十惡五逆の人なれど、ひとたび御名をとなふれば、來迎引接うたがはず。

叡山の佛敎は法華中心である。隨つて釋迦を主とし、彌陀を客とするが、叡山を出でたる聖人にあつては、無量壽經が中心であるから、彌陀が主となり、釋迦は客となつたの差異があるのみである。また觀音品の第二首

觀音ふかくたのむべし、弘誓の海に船うかべ、しづめる衆生をひきのせて、菩提のきしまでこぎわたる。

雜法文歌の第二十首

生死の大海ほとりなし、佛性眞如きし遠し、妙法蓮華は船いかだ、來世の衆生わたすべし。

この二首を以て、高僧和讃中の龍樹和讃の第七首

生死の苦海ほとりなし、ひさしくしづめるわれらをば、彌陀弘誓の船のみぞ、のせてかならず

わたしける。

に對照せんか、これはまた前例に反して、抄の二首が一首にまとめられたものである。さて又、

この抄雜法文歌の第四首に

釋迦の月はかくれにき、慈氏のあさ日はまだはるかなり、そのほど長夜のくらきをば、法華經

のみこそ照らい給へ。

抄の時代にあつては、釋迦滅後彌勒出世以前の無佛世界の闇黑が、法華經によつて照破せらるゝとのおほらかな信仰によつて、僅に慰藉して居たが、然し深き自己反省の靈力に驅られて、罪惡生死の闇黑に泣くものは、このおほらかな信仰には、到底堪へ得られなんだ。是に於てか法然上人あり、この無佛世界の光明は、彌陀如來の外にあるべからざるを、身と口とを以て說きに說きて、遂に身命を顧みぬに至つた。親鸞聖人の正像末和讃は、實に一方にこの無佛世界の暗黑を痛歎し、他方に彌陀如來の恩德を讃嘆したものである。その劈頭の第一首は、やがて抄の「釋迦の月は

かくれにき」の悲泣にある。その和讃は、左の如くである。

釋迦如來かくれまし〳〵て、二千余年になりたまふ、正像の二時は終りにき、如來の遺弟悲泣せよ。

此抄と三帖和讃との間には、斯の如き一致と同調とがある。

斯くの如く和讃といふものに特殊の關係を有する自分は、折があつたならば、その起原や發達を辿れるだけ辿つて見たいといふ希望を有しながら、今猶そのまゝになつて居るので、此秘抄は少からず予を引きつけた。これについては、空也讃とか、天台讃とか、少くも源平時代以前のものを出來得る限り涉獵して、著實に取り調べねばならぬと思ふが、今日の自分には、遺憾ながらその研究を爲す暇がない。隨つてこゝに述べる事は、單にこの書を一覽しての上である事を、豫じめ御斷りしておく。

初に歌數をいへば、此抄の中には、法文歌二百二十首、四句神歌百七十首、二句神歌百十八首(總計五〇八首)とあるが、實際に數へて見ると、法文歌は重出(佛中のものが雜法文中にも出づ)が一つあるので二百十九。四句神歌は二百四あれど、重出が一つあるので、二百三首。二句神歌は百二十二首。總計五百四十四首ある。是等の中、直接に佛教に關係を有するものは、法文歌の

全部。四句神歌中の佛・經・僧・靈驗所の三十六首及雜中の十五首許。二句神歌中の九首許。總計二百八十首内外である。大體、佛敎が思想界の先導を成す時代に成り、且つ山王一實神道や、兩部習合神道に屬するものも多いから、其他にも間接に佛敎に關するものが少くない。

こゝに豫じめ猶一言を加へたいのは、誤謬の多い事である。天下一品といふ程に珍らしい書物だけに、展轉せる誤謬が殆ど毎紙にあつて、到底讀み下しのつかぬのみか、何の意味やら見當のつかぬ所が數々ある。他に比較すべき材料もないから、この抄のみで、何とか工夫をつけねばならぬので、隨分工夫もしたが、猶以て、如何樣にも片づかぬ所が多い。これらは長日月の間に、種種の材料から何等かの暗示を得ての後にあらざれば、決擇する事が出來ぬ。其後、幾多の研究を經て幾分發明せられたが、猶不十分であるけれど、今日の所にては、殘念ながら不明の個所をそのまゝ差し措かねばならぬ。誤謬が如何なる有樣にまで及んで居るかを示さんが爲に、決擇の出來たものゝ中から、少しく適例を取り出して、參考に供へよう。

釋迦牟尼ほとけは薩埵王子、彌勒文殊は、十二の子。淨飯王之(はの誤)最初の王、摩耶は昔の夫人なり。(佛歌)

釋迦の本生談としての薩埵王子の因緣は、種々の經典に出て居るが、これは金光明經捨身品に據

れるものに相違ない。同經を見るに、彌勒文殊の前身は、第一第二の王子で、薩埵は第三の王子であつたから、「十二の子」は「一二の子」の誤であらうと思ふ。一が如何にして十となつたか、その理由は分らぬ。

まゆの間の白毫は、いつゝのしなをぞあつめたる、眼の間の青蓮は、四大海をぞたゝへたる。

（佛歌）

この歌は、觀無量壽經の眉間白毫、右旋婉轉、如五須彌山、佛眼如四大海水、青白分明を、そのまま譯したものであるから、しなは勿論すみの誤でなければならぬ。次の歌に

眉の間の白毫の、一つの相を思ふべし、須彌の量を尋ぬれば、縱横八萬由旬なり。

といつて、須彌山に言及するよりかへりみても、しなでは、都合がよくない事がわかる。

女人はいつゝの障あり、無垢のうへとはうとけれど、蓮花し濁に開くれば、龍女も佛になりにけり（法華經提婆品）

こは五障を有する而も八歳の龍女が、佛前に於て神變を現じ、南方無垢の世界に至りて、變成男子、成佛說法せる事を、歌つたものであるが、第二句が不明である。うへとは上とで、必ず淨土の誤りでなけねばならぬ。うとけれどは、或はとうけれど卽ち遠けれどでもなからうかと思はるゝ。

然し外に工夫もあらば、あながちに執着はせぬ。

かうせん大すさんならが、るりのことには摩訶迦葉や、三會の袂したがひて、草木も四方にぞなびきける(雜法文)

到底見當のつかぬ歌が、幾つもあり、これもその一つであつたが、これは幸にも讀めた。さんならはきんならでないかと氣がつくや、否や、「香山大樹緊那羅が、瑠璃の琴には」であると知り得たのである。

白道いうこふるき室、わうしゝんが本の跡、いち／＼に廻りて見給ふに、昔の夢に異らず(同)

これも困難なものゝ一つであつたが、こは惠心作と傳ふる「天台和讃」中に出るもので、「白道猷が古き室、王子晉が本の跡」、であつた。

われらは何してたいぬらん、思へばいとこそあはれなれ、今は西方極樂の、彌陀の誓を念ずべし(同)

たいぬらんは意味を爲さぬ。こはおいぬらんの誤りである。この歌は正安三年に、本願寺第三世の覺如上人が著はせる「拾遺古德傳」といふ、法然聖人の傳記の七卷第六段に出て居る。これはこの抄の成立時代を定むる一材料にもならうと思はれるから、特にそこの文句を抜き出さう。

室のとまりにつきたまひければ、遊君どもまいりあつまりて、往生極樂のみち、われも〳〵とたづねまふしけり。むかし小松の天皇(光孝天皇これなり)、八人の姫宮を七道につかはしけるより、遊君いまにたえず。或時天王寺の別當僧正(行尊)、拜堂の爲にくだられける日、江口神崎の遊女、舟をちかくさしよせければ、僧の御舟にみぐるしくといひければ、神樂をぞうたひはんべりける。有漏地より無漏地にかよふ釋迦だにも、羅睺羅が母はありとこそきけ。僧正めで、さま〴〵の纏頭したまひけり。中比のことにや、少將の上人(中河本願實範)ときこえし人、かの泊りをこぎすぎたまふことありけるに、遊女舟をさしうかべて、くらきよりくらきみちにぞ入りぬべき、はるかに照せ山の端の月と、くりかへし〳〵三遍うたひて、こぎかへりけるこそ、あはれにおぼえはんべれ。また同じき泊りの長者とねくろやまひにしづみけるとき、最後のいまやうに、

何しにわが身の老にけん、思へばいとこそかなしけれ、いまは西方極樂の、彌陀のちかひをたのむべし。

とうたひければ、紫雲うみにひき、音樂松にこたへて、往生をとげけり。

文句の上に少々の差はあるが、同一のものに相違ない。こは長者の自作のやうに見えるが、或は

人口に噲炙せるものを唱ひ出たのかも知れぬ。兎も角法然上人以前の事たる事は明白である。

この外、「塵點劫」（佛歌・五百弟子品）を「塵轉劫」と作し、「衆病悉除」「一經其耳」（佛歌）を「衆病患除」「一經々に」と作し、「法門」（方等經）を「法文」と作し、「迦旃延」（授記品）を「こせんゑん」と作し、「陸地」（法師品）を「六地」と作し、「鐵圍」（寶塔品）を「てちぬ」と作し、「滅期」（涅槃歌）を「滅後」と作し、「引聲」「りう花ゑ」（僧歌）を「いんせい」「わう花ゑ」と作し、「自我偈」「齋念」（乙卷佛歌）を「目我偈」「朝念」と作し、「白鷺の池」（經歌）を「はくらかいけ」と作すが如き、數へ來れば、限りもなき誤謬がある。これらの誤謬の外に、音の同じき爲に、あらぬ文字を當てはめたものが、また頗る多い。「淨土」を「上と」、「猛火」を「明火」、「善神」を「禪神」、「牛頭」を「五つ」、「精舍」を「正座」、「常樂我淨」を「上らくか上」、「恭敬」を「苦行」と作すが如き、これまた限りもない。

學問の衰へた時代に、あまり文字のない人によつて轉寫せられたと見え、斯くの如く、誤謬もあり、あて字もあるから、之を完全に讀みこなす事は、容易な事ではない、意味さへ分れば、何とか片もつくと思ふが、何の意味やら分らぬ所が數多くある。これは多くの人の工夫に待つより外に、致し方がないと思ふ。

甲乙二卷に亘りて、引證せられたる、又引證せらるべき經典の數頗る多數に上るが、その中に於て、法華經の中心たる事は、一目瞭然である。北嶺佛教の精神が、如何に大宮人の間に浸漸せしかを想像するに足る。甲の卷二百十九首の中、百十四は法華廿八品の和譯、又は取意なるが上に、法華の序及結といはるゝ無量義經普賢經に各一首があり、僧歌中の一首、雜法文中の十首も、法華に關係を有するから、百二十七となる。なほ法華以外の花嚴に二首（中の一首は、法華經隨喜品中にまぎれて居る）、阿含に二首、方等に二首、般若に三首、涅槃に三首あるが、これとても、天台大師の五時教判より來たもので、この順序にあるのが、却つて法華中心の證明を爲すに過ぎぬ。乙の卷の經歌六首も、全部悉く法華主趣より成り、其外にも法華關係のものが諸所に散在し、佛教關係の二百八十首の中、過半は直接間接に法華經を中心として居る。全體二卷中に集めらるゝ歌の作者は、一人や二人でなく、多數の僧俗の手に成つたものであらうが、大體上是等の人々が法華經に對して如何なる信念を有せるかといふに、佛陀が末後の利益として說ける悲智の結晶、究竟の眞實たるこの經それ自身の中に、無明長夜の闇を破り、出離得脫の益を與ふる靈能が潛むといふにあつた。

釋迦の月は隱れにき、慈氏の朝日はまだ遙なり、そのほど長夜の闇きをば、法華經のみこそ照

らいたまへ(雜法文)

といひ、又、

生死の大海ほとりなし、佛性眞如岸遠し、妙法蓮華は船筏、來世の衆生渡すべし(雜法文)

といふが如きは、最もよくこの信仰をあらはして居る。かゝる靈能ある經典であるから、これを讀誦し、又は聽聞する時は、一人として成佛疑なしといふものは、

法華經八卷は一部なり、廿八品いづれをも、須臾の間も聞く人の、佛にならぬは無かりけり(法師品)

法華經たもてばおのづから、戒香すゞしく身ににほひ、經には是名持戒行頭陀者と說いたれば、佛の道に障あらじ(乙卷經歌)

かくて法華經に對して、究竟のたのみをかく。

法華のみのりぞたのもしき、生死の海は深けれど、諸經くりい(よ?)むたとひにて、終に我等も浮びなん(雜法文)

進んで五障の女人より、禽獸に至るまでも、成佛すべしと觀じては、

龍女は佛になりにけり、などか我等も成らざらん、五障の雲こそあつくとも、如來月輪かくさ

れじ(雜)

峰に起き伏す鹿だにも、佛になることいと易し、おのれが上毛をとゝのへ、筆に結ひ、一乘妙法かいたんなる功德に(雜法文)

是に於てか、あひがたきこの經に遇ひ、これを聞くことの難きと、その喜びを述べては、

阿私仙の洞のうち、千歲の春秋つかへてぞ、逢ふこと、聞くこと、たもつこと、難き法をば我は聞く(提婆品)

ゆづりし菩薩のいたゞきを、返す〴〵ぞかいなでし、得がたきみ法の末の世の、うしろめたなく覺ゆれば(囑累品)

我等ぞおもへば賴もしき、きけむ(ときけむならむ)經を聞きしゆへ、三昧總持を得てこそは、佛に多くはつかへしか(同)

現に法華讀誦の法筵に列して、喜びを唱ふ狀況目前にあるが如くなるは、

法華經八卷は一部なり、廿八品その中に、あの讀まれたまふ說かれたまふ壽量品ばかり、あはれにたうときものはなし(壽量品)

かくて來世もまた受けがたき人界の生を受けて、この經に遇はんことを希ひては、

娑婆にしばしもやどれるは(に?)、一乘きくこそあはれなれ、うれしや人身ふたたび受けがたし、法華經にいま一度、いかでかまいりあはん(乙卷經歌)

經典に對して、斯の如く出離得脱のたのみをかくるは、卽ち經の裏面に悲智の佛陀を拜するが爲で、經力によるは結局佛力によるのである。次の一首の如きは、稍其意を伺はしむるに足る。

我等は白地の梵夫(薄地の凡夫ならん)なり、善根つとむる道しらず、一味の雨にうるほひて、などか佛にならざらん(藥草喩品)

法華經と表裏して、渴仰せられたものは、觀無量壽經であつた事も、注意せねばならぬ。次の一首の如きは、法華に加ふるに觀經を以てし、明らかに慈悲の人格をあらはし來りて、法華と念佛とを以て同一目的の上に立てるものとする。

法華經八卷は網なれや、無量義經(無量壽經?)をうけとして、觀音勢至を綱子(あむこ)とし、救ひ給へ罪人を(雜法文)

法華の利益に二つの形がある。靈山に往生すると、極樂に往生するとで、その中、靈山界會の友となるといふ思想の見えて居るのが、僅に二首に過ぎぬ。而も共に法華經歌以外の場所に見えるものゝみである。

蓮の花をばいたとふみ、たなしき(?)莖をば杖とついて、これらに遊ばむ人は皆、靈山界會の友とせん(雜法文)

大宮權現は、思へば敎主の釋迦ぞかし、一度もこの地をふむ人は、靈山界會の友とせん(四句神歌)

法華經歌中に、四たびまで淨土の蓮に登るといふ事が見えて居るが、これは靈山淨土の意ではなくて、極樂淨土の意味であるらしい。

四大聲聞つぎ〳〵に、數多の佛にあひ〳〵て、八十瑞相具へてぞ、淨土の蓮に上るべき(授記品)

大通智勝の王子ども、各々淨土に生るれど、第十六の釋迦のみぞ、娑婆に佛になりたまふ(化城喩品)

法華を行ふ人は皆、忍辱鎧を身に着つゝ、露の命を愛せずて、蓮の上に昇るべし(勸持品)

淨土の蓮に上るといふ樣な意味は、一向經文中に見えぬ所で、これは當時の信仰を反映せしむるものである。當時の一般の思想は、上下共に此經の功德によりて、西方往生を願つたに相違ない。法華中心の甲卷に、極樂歌といふのが、六首までも特に載せられてあるのでも、之を知る事が出來

る。その淨土は、時に唯心的の意味にも見られた。

よろづを有漏と知りぬれば、阿鼻の炎も心から、極樂淨土の池水も、心すみては隔なし（雜法文）

極樂淨土は一所、つとめなければ程遠し、我等が心の愚にて、近きを遠しと思ふなり（極樂歌）

極樂は遙けき程と聞きしかど、つとめて到るところなりけり（二句神歌）

然し二卷に行きわたりて見えるのは、阿彌陀佛の誓願により、念佛によりて西方淨土に迎へらるるといふのである。

阿彌陀佛の誓願ぞ、返す〲もたのもしき、一度み名を稱ふれば、佛になるとぞ說いたまふ（佛歌）

彌陀の誓ぞたのもしき、十惡五逆の人なれど、一度み名を稱ふれば、來迎引接うたがはず（佛歌、雜法文）

有漏のこの身をすてうてゝ、無漏の身にこそならむずれ、阿彌陀佛の誓あれば、彌陀に近づきぬるぞかし（雜法文）

南無阿彌陀ほとけのみ手にかくる糸の、終り亂れぬこゝろともがな（二句神歌）

阿彌陀佛と申さぬ人は淵の石、劫はふれども浮ぶ世ぞなき(同)

以上の諸歌は、時に法華の歌と前後して、彼が利益を擧るが如き風に載せられてあるから、彼此の間の信仰に、衝突がないと見ねばならぬ。彌陀を說くは、多く觀無量壽經に基づくので、同經の九品往生に言及するものが、二首ある。

十方佛土の中には、西方をこそは望むなれ、九品蓮臺の間には、下品なりとも足ぬべし(極樂歌)

淨土は數多あんなれど、彌陀の淨土ぞ勝れたる、九の品なんなれば、下品下にても有ぬべし(同)

これは極樂歌として別に分類せられてあるのだが、然し法華經の後に、懺法、涅槃をのせ、次に極樂と來るのであるから、法華經に關係なしと見る事は出來ぬ。二卷の間に彌漫せる精神より推究する時は、當時法華を行ふ目的は、淨土往生にあつたと見るを至當とする。一言にいへば、法華と念佛とは、まことによく調和せられて居たのである。これは敢て珍らしい事ではなく、支那以來の歷史的關係であるから、日本に始まつたものでない。但、これが法華經の經意に添ふものか否かは、大なる疑問の存する所である。日蓮上人が、經意を發揮せんとて、法華から念佛を分離して、殊に觀經を手いたく排斥したのは、一面の眞理があるに相違ない。然し法華に念佛が不

離の關係を有するは、天台宗以來の事、なほ遡れば法華經翻譯當時からの事であるから、之を分離せん事は容易でない。これ日蓮が天台以來の祖師を全く排し去つて、直に經典そのものに肉薄し、釋迦より上行菩薩を經て、直に日蓮に來れりとした所以である。日蓮は斯くの如くして、始めて能く經の眞意を發揮し得べしと信じたのである。

信仰の對象たる佛菩薩は、釋迦、彌陀、藥師、大日、普賢、文殊、觀音、勢至、地藏、不動、龍樹であつた。斯く多數に有るから、釋迦中心の法華經に離るゝ様に思はるゝけれど、皆是北嶺佛教の尊信する所で、實に山王一實神道が二十一社の本佛と仰ぐ中の有力なものであつた。中に於ても最初の三尊が最も渴仰せられた。四句神歌の中から、山王神道の隆盛であつた事が頗る能く見らるゝし、猶又兩部神道の至る所の山間に行はれた事が十分に見らるゝ。山伏修行の苦しき事、從つて修業者を尊信する精神も至る所に見ゆるが、此事につきては、述るもくだくだしければ、之を略する。山伏修行は自力難行で、淨土往生は他力易行の道である。他力易行の念佛往生の盛な當時にあつて、神佛も本は人なりといふ思想は、珍らしい。勿論その佛といふは、應身についていふのであるけれど、他に比較する時は、頗る色彩を異にするものとして、次の二首の存することだけを、一言して置く。

佛も昔は人なりき、我等も終には佛なり、三身佛性具せる身と、知らざりけるこそあはれなれ（雜法文）

千早振神々にましますものならば、あはれとおぼしめせ、神も昔は人ぞかし（二句神歌）

宗教に必然的の關係を有する罪惡觀、生死觀は、二卷に通じて頗る少い。こは王朝時代の人心を知らしむるに足るもので、萬事に亘りて、齷齪として切迫を感ずる現代より見れば、一面には羨しいが、一面には頗る羨しからぬ所である。悠々たる風尙甚だ欣すべきではあるが、これが爲に、宗教意識が深刻でない。罪惡觀とも見るべきは、次の三首に過ぎぬ。

我身は罪業重くして、終には泥犁に入りなんず、入りぬべし、佉羅陀山なる地藏こそ、毎日の曉に、必ず來りて訪ふたまへ（乙卷佛歌）

我等が心に隙もなく、彌陀の淨土を願ふかな、輪廻の罪こそ重くとも、最後に必らず迎へたまへ（雜法文）

はかなき此世を過すとて、海山かせぐとせし程に、萬の佛にうとまれて、後生のわが身をいかにせん（同）

生死觀の方も、また同樣に多くない。その意味は處々に見えぬでないが、宗教方面より取り出し

ていふべきは、次の二首ぐらゐのものである。

我等は何して老いぬらん、思へばいとこそあはれなれ、今は西方極樂の、彌陀の誓を念ずべし（雜法文）

あかつき靜にねざめして、思へば涙ぞ押へあへぬ、はかなく此世を過しても、いつかは淨土へまゐるべき（同）

痛切なる感じを唱へるものは少くて、却つて次の樣な洒脫な樂天的のものがある。かゝる風尚は現代人に到底望むべからざるもので、現代人に取りて羨しいのは、この方面にある。

極樂淨土の東門に、はた織る蟲こそけたにすめ、西方淨土の燈火に、念佛の衣ぞ急ぎ織る（乙卷佛歌）

忉利の都の鶯は、とぐら定めてさぞ遊ぶ、淨土のうゑ木となりぬれば、花さき實なるぞあはれなる（雜法文）

これらは蓋し修辭上よりいへば、傑作たるを失はぬ。猶又滑稽にして、奇想天外より落つとも評すべきものがある。

觀音勢至の遺水は、阿耨多羅とぞ流れいづる、ながれたる、育王（ゆくわう）太子の前の池の波はや、唵縛

日羅とぞ立ち渡る（四句神歌）

拘尸那城の後より、十の菩薩ぞ出でたまふ、博打の願をみてんとて、一六三とぞ現じたる（同）

山伏の腰につけたる法螺貝の、丁と落ち、ていとわれ、くだけてものを思ふ頃かな（二句神歌）

これらもまた、その方面に於て傑作たるを失はぬ。

眞摯な作にして、修辭の上から價値の認むべきものも數々ある。その中に、次の諸首を數へたい。

大品般若は春の水、罪障氷のとけぬれば、萬法空寂の浪立ちて、眞如の岸にぞよせかくる（般若經）

忍辱衣を身にきれば、戒香すゞしく身に匂ひ、弘誓の瓔珞かけつれば、五智の光ぞ輝ける（法師品）

妙法つとむるしるしには、昔まだ見ぬ夢ぞ見る、それより生死の眠覺め、覺後の月をぞもてあそぶ（安樂行品）

毘盧の身土のいやしきを（尊きもの誤？）凡下の一念こえずとか、阿鼻の依正のいやしきも、聖の心に任せたり（雜法文）

夜ふけて長夜にいたるほど、洲鶴眠りて春の水、娑婆のふるき里におなじ、塞鴻なきては秋の風、閻浮の昔の日に似たり(同)

迦葉尊者の石の室、入るにつけてぞ恥かしき、緣執つきざる身にしあれば、袂に花こそとまるなれ(僧歌)

まだ數へたいものがあるが、既に前に出せるものもあるし、佐佐木博士の取出されたものもあるから、この六首に止むる。これらの中、「忍辱衣」の今樣は榮花物語玉の臺の中にあるものであり、また最後の「迦葉尊者」といふのは、結集の際、阿難一人のみ五百人の中に入るを得ざるを言つたもので、袂に花の散るといふのは、維摩經の天女品より得て來た構想である。法文歌の中では、雜法文の中に殊に傑作が多い樣である。それは何等の制限もなく、諸經の說相を縱横に詠みこみ、且つ日本の事をも直に經典に連結せしむる自由があるからである。これ和讚の多くが、經典翻譯の性質を帶ぶると異り、歌謠の面白き點であらう。但法華經の歌とても、必ずしも經の當相にのみ屈托し、翻譯流にやつたのではない。大體は經意を汲んで居るけれど、隨分經の文面に見えぬ事を自由に詠みこんであることを、最後に附言して置く。

梁塵秘抄卷二解説

佐佐木信綱

一

王朝時代末期の謠物を輯錄した梁塵秘抄の名は、古く、右記、八雲御抄、夫木和歌鈔、本朝書籍目錄等に出で、特に徒然草によつて世に知られたるにも拘はらず、其の書は全く湮滅して世に傳はらず、博覽なる類聚名物考の著者山岡明阿彌も、「今おもふに、梁塵秘抄は今は絕えて傳はらず」といひ、中世の歌謠を蒐輯した中古雜唱集の編者伴信友、中古國風の編者黑川春村も見ず、歌舞音樂略史にも、「今傳はらぬは遺憾なり」とある。（同名の書の寫本はここかしこにあるが、そは一條禪閤の梁塵愚案抄の外題をかへたるものに過ぎぬ。また萬葉略解卷十に「古寫の梁塵秘抄」といふ句があるが、神樂譜又は愚案抄を指したらしい。また黑川氏藏書に、天文の東山左府眞筆本の模本梁塵秘抄があり、其の轉寫本は、內閣文庫をはじめ、架藏にもあるが、これ亦同名異書で、後のものである。）ここに此の度刊行するに至つた本書は、實に數百年間學者の目に觸れなか

つた梁塵秘抄の零本である。こは和田英松博士の發見にかかり、越後高田の人で鐸屋門なる室千壽の舊藏書で、後村岡良弼の有に歸したものである。そは奥に、徹書記門弟正韵が、寂蓮の手跡を以て寫したといふ本を轉寫したものであるが、其の轉寫の時代に至つては古くはない。

この零本が、果して後白河院勅撰の梁塵秘抄の一部分であるか如何。卽ち、此の書は果して信ずべきものであるかといふに、和田博士より借覽して研究したに、吾人は本書に就いて、その信ずべき理由を少なからず見出だし得るのである。

大體から見て、歌體も古く、取材も用語も十分當時のものとして考へらるるものがあることは疑はれぬ。しかのみならず、當時以前の書に載つてゐる謠物、もしくは以前の作とせらるるものにして、本書所載のものと或は全く一致し、或は相似てゐるものが尠くない。例へば、

十方佛土の中には、西方をこそは望むなれ、九品蓮臺の間には、下品なりとも足んぬべし、

は、和漢朗詠集佛事部なる慶滋保胤の、十方佛土之中以西方爲望九品蓮臺之間雖下品應足の句で、榮花物語の玉の臺鶴の林、續世繼の鳥羽の御賀、朗詠要集等に出て居る。

南宮の御前に朝日さし、兒(ちご)の御前に夕日さし、松原如來の御前には、つかさまさりのしき波ぞ立つ、

お前よりうちあげうちおろしこす波は、つかさまさりのしき浪ぞ立つ、

の二首は、枕草子に五節の事の條に、「扇や何やと拍子にして、つかさまされとしき波ぞ立つといふ歌をうたひて」といへる歌の類歌であらう。

こひしくはとう／＼おはせ我が宿は、大和なる三輪の山もと杉立てる門、

は、古今集なる「我がいほは」云々の歌をうたひかへたのであるが、枕草子に、「歌は」の條に、「杉たてる門」とあるは、古今の原歌では無くて、斯かる謠物であつたであらう。

忍辱衣を身に着れば、戒香涼しく身に匂ひ、弘誓瓔珞懸けつれば、五智の光ぞ輝やける、

は、榮花物語の玉の臺の巻に、「忍辱の衣を身に着つれば、戒香の匂しみ薫りて、弘誓の瓔絡身に懸けつれば、五智の光輝やけり」とある句を謠物にしたもの。

茨(うばら)こきの下にこそ、鼬が笛ふき猿かなで、かいかなで、いなご麿めて拍子つく、たてきり／＼すは、鉦鼓の／＼のよき上手、

は、狹衣に載つて居る歌と同じものであらう。體源抄には、風俗の部に雜藝として「うばらこきの下には、鼬(いたち)笛ふく猿かなづ蚱蜢(いなごまろ)は拍子うつ、きりぎりすは鉦鼓うつ」とある。

此の頃都にはやるもの、肩當腰當烏帽子(えばうし)とどめ、襟のたつかた錆(さび)烏帽子、布打の下の袴、四幅(よの)

の指貫、

は、今鏡花のあるじの條に、花園左大臣有仁の事を叙して、「此のごろこそさび烏帽子きらめき烏帽子など折々變りて侍るめれ。……烏羽院、この花園の大臣、こまかに沙汰せさせて、世のさがになりて、肩當腰當烏帽子とどめ、冠とどめなどせぬ人なし。」とあるに全く符合する。殊にかの建武年間記に載つて居る「此の頃都にはやるもの、夜討强盜謀綸旨、召人早馬虚騷動、」云々といふ二條河原落書の口遊は誰も知つて居るが、冒頭の句は夙く行はれた句であつたのである。（なほ後にも、一休の、「はやるものなに〳〵猿樂田樂うたひもの」云々の唄もある）

太子の身投げし夕暮に、衣は掛けてき竹の葉に、王子の宮を出しより、杳はあれども主も無し、は、體源抄に、「白河院の時、近藤といふ者御前に召されて謠ひたる歌」として、三四句を「鷲のみ山を出でしより、杳はあれども主は無し」とある。

白道猷が古き室、王子晋がもとの跡、一々に廻りて見給ふに、昔の夢に異ならず、

天台大師は能化の主、眉は八字に生ひわかれ、法の使に世に出でて、ほと〳〵佛に近かりき、

柴のいほりに聖おはす、天魔は樣々になやませど、明星漸くいづるほど、終には從ひ奉る、

の三首は、惠心僧都の作と傳ふる天台大師和讃の中に出て居て、始の一首はさながら用ゐ、次の

二首は句を用ゐたのである。

よろづの佛の願よりも、千手の誓ぞ頼もしき、枯れたる草木も忽ちに、花咲き實なると說い給ふ、

は、古今著聞集、源平盛衰記、體源抄等に出て居る。(終を「とこそきけ」とある。)

藥師の十二の大願は、衆病悉除ぞ賴もしき、一經其耳はさて置きつ、皆令滿足すぐれたり、

は、古今著聞集に出てゐる。

釋迦の御法はしな〳〵に……

は、續世繼雁がねの卷にある。

佛も昔は人なりき、我らも終には佛なり、三身佛性具せる身と、知らざりけるこそあはれなれ、

は、平家物語、源平盛衰記等に出て居る。(句々に異同がある)

我らは何して老いぬらむ、思へばいとこそあはれなれ、今は西方極樂の、彌陀の誓を念ずべし、

は、寶物集、十訓抄、拾遺古德傳等に出て居る。

池の涼しき汀には、夏のかげこそ無かりけれ、こだかき松を吹く風の、聲も秋とぞ聞えぬる、

は、唯心房集中の一首で、寂然の作である。(寂然は大原三寂の一人で、その家集には、五十首の

今樣の作がある。）

大宮權現は、思へば敎主の釋迦ぞかし、一度も此地をふむ人は、靈山界會の友とせむ、

は、日吉山王利生記に、陰陽堂の僧慶增の作として載つて居る。

龍女は佛になりにけり、などか我等も成らざらむ、五障の雲こそ厚くとも、如來月輪かくされじ、

は、聲明集の終に出て居る。

像法轉じては、藥師の誓ぞ頼もしき、ひとたび御名を聞く人は、萬の病なしとぞいふ、

四大聲聞いかばかり、喜び身よりも餘るらむ、我等は後世の佛ぞと、確かに聞きつる今日なればゝ

熊野の權現は、名草の濱にこそおり給へ、若の浦にしましませば、年はゆけども若王子、

ちはやぶる、神神にましますものならば、あはれとおぼしめせ、神も昔は人ぞかし、

この四首及び前に擧げた「今は西方極樂の」といへる句、「法華經八卷」「聖德太子」の歌は、梁塵秘抄口傳集第十に引用してある。（この口傳集に就いては、群書類從所收の零本が、後白河院の御製作なるよしは、夙く伊庭時言の群書備考廿八に、右記本朝書目等を引いて述べて居る。かつ本書

の初めに揭げた和田博士の考證に詳らかである。)

なみも聞け小磯も語れ松も見よ、我を我といふ方の風吹いたらば、いづれの浦へも靡きなむ、は、八雲御抄に、「なだと云ふも磯なり。今樣に、松もきけこいそもかたれと云」と引用してある。初句はいづれも「なだもきけ」の誤である。

短歌の中には、古人の歌としてわかつて居るものが三十餘首あるが、煩はしきを厭うて省く。以上諸書と同じきものを擧げたが、これらは、明らかに本書が當時の信ずべきものであることを證明して居る。

なほこの梁塵秘抄は、前に述べた如く、寂蓮の手跡を轉寫したものと傳へられて居る。この所傳は、しか信じ得る理由が無いではない。如何となれば、紫野今宮鎭花祭歌も、筑紫田歌、尾張田歌等もみな寂蓮の筆と傳へ、其の他にも、彼の田歌切が、古筆鑑賞家のもとに藏せられて居るからである。(或はこの數種の田切歌も、梁塵秘抄の一部であつたかも知れぬ。かつ焦尾琴に、「白拍子靜が朗詠は、俊惠法師の作りてうたはしめ給ふとかや、自筆の軸を百餘章とり揃へて傳へ持たる人あり。」とあるが、此の俊惠も、或は寂蓮の傳へ誤りで、これまた梁塵秘抄の一部ではなかつたらうかとも考へられる。)

二

本書は、梁塵秘抄巻二と巻首にあつて、甲乙の二册に分けてあるが、もとは一軸、もしくは一册であつたと思はれる。しかして其の巻二に收めた所の歌は、法文歌と神歌との二種である。法文歌は又の名を娑羅林と呼ばれて、和讃から轉じて謠物になつたもの、凡て佛敎に關するものである。神歌はもとは神祇に關した歌によつての名であらうが、後には一の曲の名と成つたものとおぼしく、神祇を歌つたもの、法文歌と同種のもの、催馬樂と同種のもの等を含んで居る。(これを歌體の分類に照して見ると、法文歌は主として今樣體、神歌は四句の今樣體と二句の短歌體とがもとで、多くの雜體と、少數の六句體を合せ有して居るのである。)

本書に就いて其の歌數を調べると、法文歌二百廿首、四句神歌二百四首、二句神歌百廿二首で、うち二首の重出を省くと、總數五百四十四首である。

今この法文歌、神歌といふ原書の名を離れて、本書に含む歌の全部を**歌體**といふ點から觀察して見ると、多くを占めてゐるものは、今樣體と催馬樂風の雜體との二つで、その外に、六句體と、純然たる短歌體とがある。

今樣體とは、いふ迄もなく七五四句の體である。これに附屬して、或は一句を交へたり、或は

變體の句を有したりして居るものがある。例へば、

近江の湖（みづうみ）はうみならず、天台藥師の池ぞかし、なぞのうみ、常樂我淨の風吹けば、七寶蓮華の波ぞ立つ、

これは「なぞのうみ」の一句を間に入れて、問答の體にしてある。

嶺に起きふす鹿だにも、佛になる事いと易し、おのれが上毛をとゝのへ、筆にゆひ、一乘妙法かいたんなる功德に、

「筆にゆひ」の一句を入れ、しかも終の一句の字數は變つて居る。

雜體といふのは、大概十句以內で、(長いのは十數句のがある)奇偶さまざまで、又其の一句の字數も長短あり、同音句の連續あり、略ぼ催馬樂と同じい。唯其の同音句の連續といへども、催馬樂に多く見るやうな同句の反覆では無い。此の體は歌として催馬樂に比して內容に富んでゐる。その例は後に擧げるところで明らかであると思ふ。

六句體とは、短歌よりも一句おほいものである。

これから、まづ今樣體及び雜體に屬するものに就いて、內容上の分類から、修辭形式等の稍や細かい說明を試み、次に他の二體に及ぼさうと思ふ。

法文歌及び其の種の**佛教思想**を歌つた歌は、和讃の一種とみなすべきものであるが、今日傳はつてゐる和讃の中で、比較的古いと思はれるものと讀み比べて見ると、彼の經文直譯的、もしくは訓誡的なのに比して、此は遙に詩趣の豐かなものを多く含んでゐる事が注意される。例へば、

佛は常にいませども、現ならぬぞあはれなる、人の音せぬ曉に、ほのかに夢に見え給ふ、

氷をたゝきて水むすび、霜を拂ひて薪とり、千年（ちとせ）の春秋を過ぐしてぞ、一乘妙法聞き初めし、

曉靜かに寢覺して、思へば涙ぞおさへあへぬ、はかなく此の世を過ぐしても、いつかは淨土へ參るべき、

寂莫おとせぬ山寺に、法華經誦して僧ゐたり、普賢かうべを撫で給ひ、釋迦は常に身を護る、

極樂淨土の東門に、はた織る蟲こそ桁に住め、西方淨土の燈火に、念佛のころもぞ急ぎ織る、

阿私仙のほらの内、千とせの春秋仕へてぞ、あふこと聽くこと持（たる）つこと、かたき法をばわれは聽く、

娑羅林に立つけぶり、のぼると見しはそら目なり、釋迦はつねにまし〱て、靈鷲山にて法ぞ說く、

大品般若は春の水、罪障氷のとけぬれば、萬法空寂（くさく）の波立ちて、眞如の岸にぞ寄せかくる、

一心敬禮聲すみて、十方浄土にへだてなし、第二第三數ごとに、六根罪障罪滅す、
忉利の都の鶯は、とぐら定めてさぞ遊ぶ、浄土の植木となりぬれば、花さき實なるぞあはれなる、

我が身は罪業おもくして、終には泥犂へ入りなむず、入りぬべし、佉羅陀山なる地藏こそ、毎日の曉に、必ず來りて訪う給へ、

のごとき、いづれも和讃の比では無い。「佛は常に」「曉しづかに」「極樂浄土の東門に」等は殊にすぐれてゐる。「婆羅林に」は、斯かる歌が行はれて、婆羅林といふ名をも負んだのであらう。「我が身は罪業」の一首は形が變つて居る。

神祇に關するものは、神樂歌に比すると、やや趣向も複雜である。

なん〳〵の宮には泉出でゝ、ざう井の御前は潤ふらむ、にごるらむ、なかのこさいその竹の節は、一夜に五尺ぞ生ひのぼる、

一夜に五尺生ひのぼるとは、傳說を歌つたものであらうか、おもしろい。

鈴はさやふる藤太みこ、目より上にぞ鈴はふる、ゆら〳〵とふりあげて、目より下にて鈴ふれば、懈怠なりとてゆゆし神はらだち給ふ、

金の御岳にある巫女の、打つ鼓、打ち上げ打ちおろし面白や、我等も參らばや、ていとんとん
とうとも響き鳴れ、／＼、打つ鼓、いかに打てばか、此の音の絶えせざるらむ、

この二首とも、いかにも輕快で、當時の庶民の心持が躍如として伺はれる趣がある。

祝賀の意を述べたものに、

萬劫年ふる龜山の、下は泉の深ければ、苔蒸す岩屋に松生ひて、梢に鶴こそ遊ぶなれ、

は、祝の歌としてやすらかな作で、かの興福寺の延年唱歌にも用ゐて居る。それには「萬歳としふる」とある。

萬劫龜の背中をば、沖の浪こそ洗ふらめ、いかなる塵のつもり居て、蓬萊山と高からむ、

構想が奇抜である。

海には萬劫龜遊ぶ、蓬萊方丈瀛洲、この三つの山をぞいただける、巖に練ずる龜の齢をば、ゆ
づるゆづる、君に皆ゆづる、

終の二句は、殊に面白い。

海には萬ごう龜遊ぶ、蓬萊山をやいただける、仙人わらはを鶴に乘せて、太子を迎へて遊ばば
や、

彼の盛衰記にある、祇王祇女が淸盛入道の前で謠つた、「蓬萊山には千年ふる、萬歳千秋かさなれり、松の枝には鶴巢くひ、巖の上には龜遊ぶ」のたぐひである。

黄金(こがね)の中山に、鶴と龜とは物がたり、仙人わらはの密(みそ)かに立ち聞けば、殿は受領(ずりやう)に成り給ふ、

構想が殊に面白い。「殿は受領に成り給ふ」の句は、當時受領といふものが如何に尊とばれたかがわかる。

富をたたへたものに、

此の殿によき筆柄(づか)のあるものを、てこゝの富をかきよせる、筆の軸のあるものを、

筆の軸は、五節の郢曲の白薄樣にも、「巴かいたる筆の軸」の句がある。なほ富については、「二月(きさらぎ)の初午に富くばる」の句もある。

情事を詠んだものは、固より斯かる歌謠のならひとてその數が尠くない。中にも秀逸と稱すべきは、

われをたのめて來(こ)ぬ男、角三つ生ひたる鬼になれ、さて人に疎まれよ、霜雪霰ふる、水田の鳥となれ、さて足つめたかれ、池の浮草となりねかし、とゆりかうゆりゆられありけ、

「角三つ生ひたる鬼になれ」と詛ひ、「水田の鳥」「足つめたかれ」もをかしいでは無いか。

わぬしは情(なさけ)なや、わらはがあらじとも棲(す)まじともいはゞこそ憎からめ、てゝや母のさけ給ふ中なれば、斬るともきざむとも世にもあらじ、

「斬るともきざむとも」は、後世の戯曲の詞などが思ひ出される。

美女(びんでう)うちみれば、一本葛(ひともとかづら)なりなばやとぞ思ふ、もとより末までよられば、斬るともきざむとも、離れがたきは我が宿世、

前の歌は女ので、これは男が答へたものともおもはれる。

鏡曇りては、我が身こそやつれける、我が身やつれては、男退(の)け引く、

あはれな歌である。

滑稽洒落なるものには、

鴉はみるよに色黒し、鷺は年は經れども猶白し、鴨の首をば短しとてつぐものか、鶴の足をば長しとてきるものか、

「鴨の首」「鶴の足」は荘子に出て居るのであるが、今日では戯曲阿古屋の冒頭の句がまづ思ひ浮べられる。諷刺的の妙味が籠つて居る。

羽(はね)なき鳥のやうかるは、炭取かいとりかいもどり、石などり、虎杖(いたどり)垣をに生ふてふ扱葜(さるとり)や、弓

とり筆とり、小弓の矢とりとか、

調子の面白い一例である。「弓とり筆とり」は、當時の流行語であつたと思はれる。彼の「澁柿」の中なる「頼朝佐々木に被下狀」の中にも、「すべて筆とりも、まして弓取も、むかひたる目ばかりかゝりて、」云々とある。

節のやうかるは、木の節萱の節、山葵のたての節、峯には山伏、谷には鹿の子臥、翁の美女婿り得ぬ獨臥、

この「やうかるは」といふのは、當時の流行語と思はれて、他にも「法師ばくちのやうかるは」、「山のやうかるは」、「小鳥のやうかるは」、「なかうど女のやうかるは」などがある。

舞へ／＼蝸牛、舞はぬものならば、馬の子や牛の子に、蹴させてむ、踏み割らせてん、まことに美くしく舞うたらば、花の園まで遊ばせん、

當時の童謠であらう。蹴の古言「くゑ」が此の頃まで口語の中に殘つて居たこともわかる。

居よ／＼蜻蛉よ、片脚をまゐらんさて居たれ、はたらかで、蘆の篠のさきに馬の尾をより合せて、かいつけて、わらはべ冠者原に、繰らせて遊ばせむ、

蝸牛の歌の對の歌ともいふべき、無邪氣な童謠である。

いざれ獨樂つぶり、鳥羽の城南寺の祭見に、我はまからじ恐ろしや、こりはてぬ、造道や四塚に、
あせる上馬の多かるに、

獨樂の遊びの歌であらう。祭見の事は、山槐記永暦元年の條に「今日城南寺祭也、上皇御幸、競馬七番」とあり、造道は兵範記保元三年の條に見えてゐ、徒然草にも出てゐる。

御厩の隅なるかひ猿は、きづな離れてさぞ遊ぶ、木に登り、常磐の山なる楢柴は、風の吹くにぞ、ちうとろゆるぎてうらがへる、

後世の放下僧の歌のたぐひである。

あそびをせんとや生れけむ、たはぶれせんとや生れけん、遊ぶ子供の聲聞けば、我身さへこそゆるがるれ、

感情いひざまの素朴なのが面白い。

女の盛りなるは、十四五六歳、二十三四とか、三十四五にしなりぬれば、紅葉の下葉にことならず、

仁智要録なる採桑老の詠に、三十云々四十云々と重ねた類であるが、「紅葉の下葉」と詩化してとちめたのが巧である。

吹田の御湯の次第は、一官二丁三安樂寺、四には四王寺五さぶらひ、六せんふ七九八丈九傔丈、十には國分の武藏寺、夜は過去の諸衆生、

は、後世の唄に屢々繰かへす數字を重ねた式である。

頭に遊ぶは頭しらみ、頂のくぼをぞ極めて食ふ、櫛の歯より天降る、麻小笥の蓋にて命終る、

まことに古今その偶を求めがたい奇拔な歌である。「櫛の歯より天降る」の一句殊に妙である。因に云、笥の蓋といふ詞は、大嘗會田歌にも、「麻種らを笥の蓋にいれて」云々の句がある。

優雅なものには、

筑紫の文字の關、關の關守老いにけり、びん白し、何とてすゑたる關の關屋の關守なれば、年のゆくをばとどめざるらむ、

和歌によく見る趣向ながら、如何にも謠物として古みを帶びて居る。「びん白し」と一句を入れ、「關」をわざと多く重ねたのも謠物らしい。

おもひはみちのくに、戀はするがに通ふなり、みそめざりせば中々に、そらに忘れてやみなまし、

後世の隆達節などの中に交へてもと思はれる作である。

海にをかしき歌枕、磯邊の松原きんを彈き、しらめつつ、沖の波は磯に來て、鼓うてば、みさご濱千鳥、舞ひこだれて遊ぶなり、

「松の琴」「波の鼓」も、いひざまが巧である。「傾(こだ)れ」は宇治拾遺物語にも出てをる語。

明石の浦の波、浦や馴れたりけるや、浦の波かな、此の波はうち寄せて、風は吹かねども、や、さざら浪ぞ立つ、

古事談及び撰集抄に引いた書寫上人の條に、「風は吹かねどもさざら浪立つ」といふ今樣をうたつた事が出て居る。これは、それを歌ひかへたのであらう。

春の始の歌まくら、霞うぐひす歸る雁、ねの日青柳梅櫻、三千歳になる桃の花、

松の木かげに立よりて、岩もる水をむすぶ間に、扇の風も忘られて、夏なき年とぞ思ひぬる、

法文歌の歌體の今樣なるは別として、かの慈鎭和尙の四季の今樣のごとき今樣歌は、前に擧げた寂念の「池の涼しき汀には」と、これらとで、極めて少數である。

瀧は多かれど、嬉しやとぞおもふ、鳴(なる)瀧の水、日は照るとも、たへてとふたへ、やれことつとう、

鳴瀧は山城宇多河の上流、「やれことつとう」は拍子で、俊量卿記の五節間郢曲事の歌の終にも、

いづれも添へてある。「瀧の水」といふ句は當時の流行で、長門本平家物語に、「嬉しや鳴るは瀧の水」とあり、盛衰記の今樣にも「瀧の水」の句があり、口傳集第十にも「瀧の水」をうたふことが見えて居る。

枕草紙の何々ものといふやうな、ものはづくしがある。即ち、何々するものはと數へたてるのが一種をなして居る。（雜藝の中の「物樣」が、或はこれではなからうか。）

よく／＼めでたく舞ふものは、神巫（かうなぎ）小楢葉、車の筒（どう）とかや、八千隈侏儒舞（ひきまひ）、手傀儡子（てくぐつ）、花の園には蝶ことり、

をかしく舞ふものは、神巫（かうなき）小楢葉、車の筒（どう）とかや、平等院なる水ぐるま、はやせば舞ひ出づる、いぼうじり、かたつぶり、

平等院に水車があつたと見える。後ならば、淀の川瀬の水車と云ふ所である。

すぐれて早きもの、鷂（はいたか）隼手なる鷹、瀧の水、山より落ちくる柴車、三所五所に申すこと、

今日ならば、自動車飛行機などいふ所であらう。結末の句は當時の信仰のさまが知られる。

をかしくかがまるものは唯、海老よ竦（くひち）よ、女牛（め）の角とかや、昔かぶりの巾子（こじ）とかや、翁の杖ついたる腰とかや。

輕妙である。

心すごきもの、夜道船(ふな)みち旅の空、旅の宿、こぐらき山寺の經の聲、思ふや仲らひの飽かで退(の)く、

結末がよい。

心のすむものは、かすみ花園夜半の月、秋の野邊、上下もわかぬは戀の道、岩間をもりくる瀧のみづ、

「上下もわかぬは」の句は少しゆくりないが、かの戯曲奥州安達原なる句が思はれて面白い。

なほ「見るに心のすむものは」といふのもある。吉野樂書には、承安四年後白河院の今樣の御會に、「きくに心のすむものは、荻の葉そよぐ秋のくれ」云々の今樣を謠つたことが見えて居る。

婆娑にゆゝしく憎きもの、法師のあせる上馬に乘りて、風吹けば口あきて、頭しろかる翁どもの、若妻(め)好み、姑の尼君の物妬み、

好個の諷刺詩である。

すぐなるものは唯、連枷(からさを)や篦(の)竹、假字(かんな)のし文字、今年はえたる梅楚(うめすはえ)幡桙(はたほこ)刺鳥竹(さいさりだけ)とかや、

觀察がおもしろい。連枷篦竹、し文字の配合が妙である。他に「風に靡くもの」といふのもある。

又「……の好むもの」といふ類では、前に引いた「遊女の好むもの」の外に、

武者の好むもの、紺よ紅山吹濃き蘇芳、茜ほやの摺、よき弓やなぐひ、馬鞍太刀腰刀、鎧冑に脇だて籠手具して、

なほ「ひじりの好むもの」、「すごき山伏の好むもの」といふのもある。

當時の風俗世相の一端が伺はれるものには、

武者を好まば小屋並び、狩を好まば綾藺笠、まくりあげて、梓のま弓を肩にかけ、軍あそびをよ軍神、

保元平治の軍などを見馴れて、かゝる歌も出來たのであらう。「こやならび」は他にも「け正狩場のこやならび」の句がある。「あや藺笠」は當時の流行と見えて、彼の寂蓮の書いたと傳ふる田歌の中に、「螺鈿のつまずりあやゐ笠」、美濃田歌の中にも、「あやゐ笠はやな」云々の句がある。軍神は、集中に「關よりひむがしの軍神、鹿島かんどり諏訪の宮」「關より西なる軍神」云々の歌もあり、また「大將軍こそおり給へ」「祇園天神大將軍」等の句もある。

鷲の住む山には、なべての鳥は住む物か、同じき源氏と申せども、八幡太郎はおそろしや、

「八幡太郎」といふ名は、今日では勿來關の花蔭を聯想せしめるが、當時の民間では、後の鎭西八

郎や加藤清正の如く、いかに強い恐ろしい名であつたかがわかる。

彼處に立てるは何人ぞ、稻荷の下の宮の大夫み息子か、眞實の太郎やな、俄に曉の兵仕につい
さされて、殘りの衆生を平安に守れとて、

「俄に曉の兵仕」に召されての句が、物騷がしかつた時代を思はせる。馬を詠じたものに、

年頃撫で飼ふ龍の駒、馬場の末にぞれんずなる……

上馬の多かる御舘かな、武者の舘とぞおぼえたる……

又「さぶらひ藤五君」云々の歌もある。「讃岐の松山へ」は保元亂後の崇德上皇の御上を諷したものと思はれる。紀記の童謠的の歌が猶他にもある。

嵯峨野の興宴は、野口打出で岩崎に、禁野の鷹飼敦友が、野鳥合せしこそ見まほしき、

當時の風俗が思はれる歌である。これは、承保三年十月のことで、寶物集、嵯峨野物語等に、野の行幸のことが委しく出てゐる。

婿の冠者の君、何色の何ずりか、好うだう着まほしき、麹塵山吹とめずりに花村濃、みな柏や、
輪鼓輪違へ笹結び、纐纈まへだりの寄生の鹿子ゆひ、

當時の服飾の好みがわかる。

筑紫なんなるや、唐土のかね、白ろといふかねもあんなるは、ありと聞く、それを合せて造りたる、あこやの玉壺やうかりな、

美しい工藝品を謠つたのである。

清太が造りし御園生に、にが瓜甘瓜なれるかな、あこた瓜、千々に枝させ生瓢、物な宣びそ恵具茄子、

山城茄子は老いにけり、採らで久しく成りにけり、あこかみたり、さりとてそれをば捨つべきか、おいたれ〳〵種採らむ、

聖の好むもの、比良の山をこそ尋ぬなれ、弟子やりて、松茸平茸滑薄、さては池に宿る蓮の這根、芹蓴菜、牛蒡河骨打蕨、土筆、

これらはいづれも、瓜とか茄子とかの野菜を詩材に用ゐてある。

催馬樂に、「大芹は國の禁物」云々と博奕を謠つて居るが、此の中にも數章ある。

わが子は二十になりぬらん、博打してこそありくなれ、國々の博徒に、さすがに子なれば、憎か無し、負かい給ふな、王子の住吉西の宮、

不孝な子ほど一層可愛いい親の情があらはれてゐる。

おうなの子供の有様は、冠者は博打の打ち負けや、勝つ世なし、禪師はまだきに夜行好むめり、
ひめが心のしどけなければ、いとわびし、

冠者と僧と女と、三人の子いづれも思ふやうならぬを歎じた母心がいとほしい。

拘尸那城のうしろより、十の菩薩ぞ出でたまふ、ばくちの願を滿てんとて、一六三とぞ現じたる。

一六三と現ずる菩薩は面白い。一六三の數を合すれば、即ち十になるのである。

法師博打の樣かるは、地藏よかせん二郎寺主とか、尾張や伊勢のみくつ新發意、無下にわろきはけいそく房、

法師が博奕せし當時の樣も思はれる。てら錢の語にも、因みがあるであらう。

くすり(はの誤)のみ牧の土器作り、土器は作れど娘の顏ぞよき、あな美くしやな、あれを三車の四車のあい行、輦にうちのせて、受領の北の方といはせばや、

好人事詩である。前なる、「殿は受領に成り給ふ」の句と同じく、受領の北の方が如何に下民の羨望の的であつたかがわかる。且つ枕草子に、「童べの國府殿へ參りて」といふ俚謠の一句が引いてあるが、國府殿とか受領とかいふ詞は、屢〻俚謠の材料に成つたものらしい。

きくにおかしき讀經は、とうかく高砂の明泉房、江口のふちにたのやけの君、淀には大君次郎君、

讀經口傳明鏡集に「此御時(後白河)一天下皆以法花經爲旨、不翫之輩更人而非人」とある。以て當時道俗に「讀經之音曲」の盛であつたことがわかる。

池のすめばこそ、空なる月影も宿るらめ、沖よりこなみの立ち來てうてばこそ、岸もうはなり打たんとて崩るらめ、

小浪に前妻をよそへたので、所謂後妻うちの風習を諷つたもの。體源抄所載の風俗の中にも、「こなりめは來にけるものを」云々の歌がある。

ひじりをたてじはや、袈裟をかけじはや、數珠をもたじはや、年の若きをり戯れせん、

當時の僧侶に對しての好諷刺詩である。

京より下りしとけのほる、島江に屋たてて住みしかど、そも知らず、うちすてていかに祭れば百大夫、驗なくて花の都へ歸すらむ、

遊女の好むもの、雜藝鼓小端舟、簦かざし艫取女、男の愛祈る百大夫、

百大夫は、大江匡房の作なる遊女記に、「殊事百大夫道祖神之一名也」云々とあつて、遊女が祭つ

たものである。四六頁に引いた今鏡の文の續きに、「百大夫と世にはつけて、かげぼしなどのごとく朝夕馴れ仕うまつる……伊賀大夫、六條大夫などいふ、すぐれたる人どもあり」とあるのは、百大夫と渾名をつけたのである。次の歌の中なる雜藝の文字も注意すべく、また軆取といふ句は、賴政集の遊女を詠じた歌の中にある。

當時の地理を知る一端ともなるべきには、

いづれか貴船へ參る道、鴨川みのさと御菩薩池、みどろ坂、幡板しの坂や、一二の橋、山川さらさら岩枕、

貴船詣の道筋を述べたので、かかる類には、「いづれか法輪へ參る道」、「根本中堂へまゐる道」、「いづれか葛川へまゐる道」、「いづれか淸水へ參る道」などがある。淸水のは殊に長い道行風で、「南をうち見れば」の句は、謠曲の湯谷が思はれる。

近江にをかしき歌枕、老曾とどろき蒲生野布施の池、あきの橋、伊香具野、余吳の湖のしかのうちに、新羅が建てたりし持佛堂のかねの柱、

これよりひむがしは何とかや、關山關寺大津の三井のおろし、いまおろし、石田殿、粟津石山國分や、瀨多の橋、千の松原竹生島、

二首續いた近江名所の歌で、近江八景の先縱を爲すもの。「石田殿」は今鏡藤波の上に見えて、泰憲の館で、當時第一とも稱すべき建築である。

　これより北には越の國、夏冬とんなき雪ぞふる、駿河の國なる富士の高嶺にこそ、夜晝となく煙たて、

當時富士の噴火して居たことがわかる。「とん」は「とも」である。なほ「土佐の船路は恐ろしや」といふのもあり、「備後(びご)のともの島」を謠つたのもある。

以上は、主として內容の方面から觀たのであるが、飜つて形式や修辭の方面から、注意すべき二三の點を擧げると、先づ二節三節と節を分けたものがある。神樂に本末があり、催馬樂にも段があるが、それらは簡短であるに、これは複雜して居る。

　春の燒野に菜を摘めば、岩屋に聖こそおはすなれ、ただ一人野邊にてたび〱あふよりは、な、いざたまへ聖こそ、あやしのやうなりとも、妾(わらは)らが柴の菴(いほり)へ、

柴の菴(いほり)に聖おはす、天魔はさま〲になやませど、明星やうやく出づる程、遂には從ひ奉る、

第一は魔女が聖を誘ふ所、第二は聖が魔障に打勝つたを歌つたもの。

熊野へ參るには、紀路と伊勢路の、どれ近し、どれ遠し、廣大慈悲の道なれば、紀路も伊勢路

も遠からず、
熊野へ参るには、なにか苦しき修業者よ、安松ひめ松五葉松、千里の濱、
熊野へ参らむと思へども、徒歩より参れば道遠し、すぐれて山きびし、馬にて参れば苦行なら
ず、天より参らむ、はね賜べ若王子、
熊野の權現は、名草の濱にこそおり給へ、若の浦にしましませば、年はゆけども若王子、
花の都をふりすてて、くれぐれ參るはおぼろけか、かつは權現御覽ぜよ、青蓮の眼をあざやか
に、

熊野詣を五節に述べたもので、當時の修行信仰のさまなどもわかる。第三と第五が殊に面白い。
第四は口傳集第十永曆元年熊野御幸の條に載つて居る。それには「名草の濱にぞおり給ふ」とあ
る。第三のは、體源抄に、白河院の御時の歌に、「海道下れば波高し、山道とおもへばすぐれて山
きびし」云々とある類歌である。

また連作と稱すべきものがある。
この頃都にはやるもの肩當腰當えぼうしとどめ……
この頃都にはやるものわうたいかみ〳〵えせかづら……

清太がつくりしかりかまを……

清太がつくりしみそのふに……

のごときがそれである。

また唱和の體と稱すべきがある。五五頁に掲げた「わぬしは情なや」は、女の心もちで、次の「美女うち見れば」は男が和へたもの、「きるともきざむとも」の句が二章にともにあるは、其の故であらう。

句法の上からいふと、大體は七と五で、長句短句がいささかまじつて居る。其の續けざまは七五が多いが、中に、前にも一言したが、催馬樂と同じく同音句の連續で詞の變つて居るものがある。例へば、

我等が修行に出でし時、珠洲のみさきを、かいさはり、打めぐり、ふりすてて、ひとり越路の旅に出でて、足うちせしこそあはれなりしか、

冬は山伏修行せし、いほりとたのめし木葉も、紅葉して、散りはてて、空さびし、褥(にく)と思ひし苔にも、初霜雪ふりつみて、岩間に流れこし水も、こほりしにけり、

共に修行を詠んだ歌であるが、「かいさはり」云々「もみぢして」云々と、五音の句を連續せしめた

同じ形である。

君が愛せしあやゐ笠、落ちにけり、〳〵、賀茂川に、川中に、それを求むと尋ぬとせし程に、明けにけり、明けにけり、さら〳〵きいけの秋の夜は、

これも同音句の連續であるが、やや催馬樂風に近い。「あやゐ笠」はここにも出てゐる。

雨はふる、いねとは宣(のた)ふ、笠は無し、簑とても、持(も)たらぬに、ゆゆしかりける、里の人かな、宿かさず、

八句の中に、五音の句が五句まである。

月影ゆかしくは、南おもてに池をほれ、さてぞ見る、きんの琴の音聞きたくは、北の岡の上に松を植ゑよ、

前に擧げた「なぞのうみ」と同じ體で、今樣の中に五言の一句が挿んである。着想は、大鏡の「瓜を請はば器物を設けよ」の諺と同じく、美しい中に寓意のありさうな歌である。

用語の方面から見ると、古語の殘つてゐるものに、當時の俚言が交つて居る。(注意すべき詞に圏點を附して置く。)

うろの此の身をすてうてて、むろの身にこそならむずれ、阿彌陀佛の誓あれば、彌陀に近づき

ぬるぞかし、

はかなき此の世を過ぐすとて、海山かせぐとせし程に、よろづの佛に疎まれて、後生わが身を

いかにせん、

おうなが子どもは唯二人、一人の女ごは、二位中將殿の、くりやざうしに召ししかば、たてまてき、弟の男ご（をのこ）は、宇佐の大ぐしが、早舟ふなごに乞ひしかば、またいてき、神も佛も御覽ぜよ、何をたたり給ふ若宮の御前ぞ、

いざたべ隣殿、大津の西の浦へざこすきに、此の江に海老なし、あの江へいませ、海老まじりの雜魚（ざこ）やあると、

本書の主な部分をなす今樣體、及び雜體の歌の大體は、以上の如くである。

終りに、六句體と短歌體に就いて一言する。兩者に屬するものは、戀愛や神事を謠つたものが多い。

六句體は、紀記萬葉にもあり、佛足石の歌で殊に知られて居るが、ここにはそれが謠物化されて、巧に用ゐられて居る點が注意される。

吾が戀は、一昨日見えず、昨日こず、今日音づれなくは、明日の徒然、いかにせむ、

東より、昨日來たれば、妻も持たず、此の着たる、紺の狩襖に、むすめ交へ賜べ、

水馴木の、みなれそなれて、別れなば、戀しからむずらむものをや、むつれならひて、

ふく風に、消息をだに、つてばやと、思へども、よしなき野邊に、落ちもこそすれ、

「東より」は、當時の風俗史の資料としても面白い歌である。「戀しからむずらむものをや」は、二句に謠つたのであらうか。「吹く風に」は、古今集の東歌に、「甲斐がねをねこし山こし吹く風を人にもがもやことづてやらむ」とあるによつて作つたもので、「よしなき野邊に落ちもこそすれ」の句が輕妙である。

我は思ひ、人は退けひく、是やこの、浪たかや、荒磯の、鮑の貝の、片思なる、

おぼつかな、鳥だに鳴かぬ、奥山に、人こそ音すなれ、あな尊と、修業者の、とほるなりけり、

共に七句であるが、六句の變體と見るべきであらう。

高砂の、高かるべきは、高からで、などひらの山、高々と、高く見ゆらむ、

ねたる人、うち驚ろかす、鼓かな、いかにうつ手の、たゆからむ、いとほしや、

「高砂の」は、短歌の中間に「高々々と」の一句を混へたもの、「寢たる人」は佛足石體の變體。

山伏の、腰につけたる、ほら貝の、丁とおち、ていとわれ、碎けて物を、思ふ頃かな、
賤のをが、しの折かけて、ほす衣、いかにほせばか、干ざらむ、干ざらむ、七日ひざらむ、
七句ではあるが、前と同じく中間に二句を加へたもの。「山伏の」は、源重之の歌の下句を、巧に應用してゐる。

日暮れなば、岡の屋にこそ、ふしみなめ、明けて渡らん、櫃川や、櫃川、櫃川の橋、
これも七句ではあるが、短歌を謠物として、櫃川を繰返したのである。「臥見なめ」に伏見をかけ、岡屋伏見櫃川等、附近の地名が詠み込んである。

短歌體の中には、全く五句の短歌の形式を取りながら、其の中に巧に謠物の性質をとつて居るものがある。例へば、

結ぶには、なにはのものか、結ばれぬ、風の吹くには、何か靡かぬ、
戀しとよ、君戀しとよ、ゆかしとよ、逢はばや見ばや、見ばや見えばや、
山をさが、腰にさいたる、つづらふち、思はむ人の、腰にささせむ、
冬くとも、柞の紅葉、なちりそよ、散りそよな散りそ、色かへでみむ、
夏草の、しげみにはむは、駒かとよ、しかとこそ見め、秋の野ならば、

終の一首は俳諧歌である。

卷の最後にある神社歌は、二三首の變體があるのみで、凡てやすらかな短歌である。ここに石清水の二首を擧げる。

山鳩は、いづくかとぐら、石清水、やはたの宮の、若松の枝、

石清水、ふかき誓の、流には、いくせの人か、わたされぬらむ、

今回吾人が紹介するを得たのは單に卷二の零本にとどまるのであるが、猶その從來僅に斷片のみ傳はつて居た法文歌や、神歌がどんなものであるかといふことは、以上を以て盡し得たと思ふ。要するに本書が、神樂催馬樂(殊に催馬樂)及び和讃の系統を受けて、その謠物として一層發達したものを多く含んでゐることは、之を斷定して憚らないのである。

三

由來、歌と謠物とは相並んで、我が國の韻文の二大系統をなして居る。其の淵源は勿論一つに出でたので、記紀時代には、歌と謠物とは隔たりが無かつたが、稍時代を經過して後、此の二つの流が全く相別れるに至つた。其の著しい現象となつたのは、奈良朝頃である。卽ち多くの專門

歌人や、教養ある人々によつて作られた歌の集たる萬葉集の中には、他に、少數ながら純然たる謠物と、謠物の性質を帶びた東歌等があつて、別種の趣を呈してゐることは、この事實を明らかに語つて居るのである。この謠物の系統をうけて、先づ神樂催馬樂風俗等が生じ、それに傍系の和讃が加はつて、更に今樣歌法文歌をはじめ雜藝が行はれ、その後宴曲や小唄が生じ、もろ〳〵の歌曲俚謠となつて現代にいたつたのである。

然るに、謠物の歴史を調べて見ると、神樂催馬樂以後、宴曲小唄に至る間の謠物史上、雜藝が盛んに行はれて、雜藝時代と稱し得る時代のあつた事は、諸書によつて證據だてられるが、その當時の作物の傳はつて居るものが極めて少い事は遺憾の至であつた。然るにこの梁塵秘抄は、その缺陷を充たす貴重な作物の一部を含んでゐるのである。卽ち從來十分見る事を得なかつた平安朝中葉以後から末期へかけての謠物の一部は、實に此の書によつて始めて伺ひ知られたのである。

しかして吾人が上段に述べたごとく、本書に含むところの謠物のうち、催馬樂の系統をうけたものが、その思想に於いても、また修辭に於いても、神樂催馬樂よりは複雜になり、その文學的價値に於いても勝つてゐることは明らかである。殊に法文歌の中には、佛教的思想を謠つて、よく詩化してあつて、歌謠として見て面白いものがある。由來我が國の和歌は、宗教思想に乏しい

といふ事を、その一特質、もしくは缺點としてゐた。此の書のうちに含まれた幾篇の作は、此の意味から考へても、特に注意するに價する。

四

今度出版した此の書の原寫本は、前にも一言したごとく新しい寫本であるから、その原本が必ず他になければならぬ。かつ處々に他本と校合した異同が小字で記し添へてある。之によつて見れば、他にも類本が無ければならぬ。何處かに埋もれて居はせぬかと、各文庫を始め諸家に乞うて、種々苦心して捜索したが、遺憾ながら發見するを得なかつた。然るに山田以文の文化四年六月に校合した梁塵秘鈔口傳集卷十を見るを得たに、その表紙に、大秘不許外見とあつて、中に、以文嘗於五辻三位入道殿亭見梁塵秘鈔口傳集、皆卷子本而凡二十卷、其書躰凡鎌倉時代、而古雅可貴、皆不記年月書寫人姓名、又有絲管抄全部云、而此書未見之可惜矣、とあるのを發見した。此の卷二の一卷を以てさへ珍とすべき本書のことであるから、更にその全部二十卷を見ることが出來たならば、まことに國文學史上に一大事實を寄與するに足りると思つて、大に喜んで、五辻家を訪ひ捜索を乞うた。子爵も自分の志を諒として熱心に捜されたが、遺憾にも見出されなかつた。併し已に斯かる手掛は之を得たことであるから、又何時かは發見し得る時があらうと、期し

かつ望んで居る。幸ひに其の時に際したらば、改めて世に紹介したいと思ひつつ此の筆を擱く。

（明治四十五年七月稿。昭和七年一月補訂）

梁塵秘抄 巻第二

法文哥　二百廿首

佛哥廿四首　花嚴經一首　阿含經二首

方等經二首　般若經三首　無量義經一首

普賢經一首　法花經廿八品百十五首　懺法哥一首

涅槃哥三首　極樂哥六首　僧哥十首

雜法文五十首

四句神哥　百七十首

此目錄にては數合はざれど本文には二百廿首あり

本文には般若經四首あり

本文には百十四首あり

本文には五十一首あり

四句神哥を雜法文の次に續けたれど今行を改む但本文には二百四首あり

二句神哥　百十八首

此一行本文の中にあるによりて補ふ但實數百廿二首あり

法文歌二百廿首四句神歌二百四首二句神歌百廿二首のうち二首の重出を省けば總數五百四十四首なり

佛哥廿四首

○釋迦の正覺成ることは。此度初めと思ひしに。五百塵點刧よりも。彼方に佛と見え給ふ。

○釋迦牟尼佛は薩埵王子。彌勒文殊は十二の子。淨飯王は最初の王。摩耶は昔の夫人なり。

○釋迦の御法の中にして。五戒三歸を持たしめ。一度南無といふ人は。花の園にて道成りぬ。

○佛は樣々にいませども。眞は一佛なりとかや。藥師も彌陀も釋迦彌勒も。さながら大日とこそ聞け。

○佛は常にいませども。現ならぬぞあはれなる。人の音

「佛歌廿四首」とある前に「法文哥二百廿首」とありしを脱したるか或は省きたるか

點(高)(常)原「轉」梁塵秘抄卷一の斷簡には「佛になり給ふ」とあり

「十」は「一」の誤か金光明經捨身品によれば薩埵は第三子、兩兄が今日の彌勒文殊たり

「淨飯王は」原「淨飯王ゑ」

「かや」原「にや」

せぬ曉に。ほのかに夢に見え給ふ。

○佛は何處より出で給ふ。中天竺よりぞ出で給ふ。矩奢揭羅補羅城王舍城。姞栗陀羅矩咜に鷲峰山。

○彌陀の御顏は秋の月。青蓮の眼は夏の池。四十のはくきは冬の雪。三十二相春の花。

○阿彌陀佛の誓願ぞ。返す〴〵も頼もしき。一度御名を稱ふれば。佛になるとぞ說い給ふ。

○彌陀の誓ぞ頼もしき。十惡五逆の人なれど。一度御名を稱ふれば。來迎引接疑はず。

○藥師の十二の大願は。衆病悉除ぞ頼もしき。一經其耳はさて置きつ。皆令滿足すぐれたり。

「佛は」の上に朱にて「早」とあり

「いでたまふ」原「いでてたまふ」

「くさからふらじやう」(山)(常)原「こさよりふら上」

「きりたらくたじゆぶせん」(山)(常)原「きりからこさにはゆふせん」

「はくき」は「齒ぐき歟「はしき」ともよまる「齒敷」か「齒白き」か(田)

「悉」原「患」

この歌古今著聞集に出づ

○像法轉じては。藥師の誓ぞ賴もしき。一度御名を聞く人は。萬の病を無しとぞいふ。

○藥師醫王の淨土をば。瑠璃の淨土と名づけたり。十二の舟を重ね得て。我等衆生を渡い給へ。

○瑠璃の淨土は潔し。月の光はさやかにて。像法轉ずる末の世に。普く照らせば底もなし。

○普賢薩埵は朝日なり。釋迦は夜晝身を照らし。昔の契しありければ。達多は佛に成りにけり。

○文殊はそも〳〵何人ぞ。三世の佛の母といます。十方如來諸法の師。皆これ文殊の力なり。

○觀音大悲は舟筏。補陀落海にぞ浮べたる。善根もとむ

像法の歌口傳集に入れり但「よろづの病を」の「を」無し

「病を」の「を」は衍か或は「やまひも」か

「きく人は」の傍に小字にて「となふれば」とあり

「淨土」原「上と」

「得て」は「來て」か(野)

「諸法の師」は「初發心」か(常)

る人しあらば。乘せて渡さむ極樂へ。

○觀音光を和らげて。六の道をぞ塞げたる。三界刧數わうつる人。遣らじと思へる意にて。

○萬の佛の願よりも。千手の誓ぞ賴もしき。枯れたる草木も忽ちに。花咲き實なると說い給ふ。

○每日恒沙の定に入り。三途の扉を押し開き。猛火の炎を搔き分けて。地藏のとこそ訪ふ給へ。

○南天竺の鐵塔を。龍樹や大士の開かずば。眞の御法を如何にして。末の世までぞ弘めまし。

○龍樹菩薩はあはれなり。南天竺の鐵塔を。扉を開きて秘密教を。金剛薩埵に受け給ふ。

「わうつる」「わたる」歟(山)「墮つる」にて六道に墮つる義か(高)「わくる」か(田)

古今著聞集源平盛衰記體源抄等に出づ著聞には「れがひより」盛衰記には「木草」「みなるさこそ聞け」體源抄には「說きたれば」とあり

「恒沙」原「劫沙」「地藏のと」は「地獄の門」の誤ならむ(山)「地藏薩埵」か(野)「地藏かと」か(田)「や」は助辭

「ぞ」は「も」歟原本「に」とよまる

「龍樹」の横に「南天竺上」とあり「鐵」原「鐡」

○眉の間の白毫は。五つの須彌をぞあつめたる。眼の間の青蓮は。四大海をぞ湛へたる。

○眉の間の白毫の。一つの相を想ふつべし。須彌の量を尋ぬれば。縦廣八万由旬なり。

○眞言教のめでたさは。ほうさうくでむ隔なし。君をも民をも押しなべて。大日如來と説い給ふ。

花嚴經一首

○花嚴經は春の花。七所八會の苑ごとに。法界唯心色深く。三草二木法ぞ説く。

「しみ」原「しな」(常)「しゆみ」か(田)

「眞言教の」を原書に前の歌に續けたれど別首なるをもて別行に改む

「ほうさうくてん」は「法藏口傳」か「蓬窓宮殿」か(常)「法相口傳」か(高)

阿含經二首

○阿含經の鹿の聲。鹿野苑にぞ聞ゆなる。諦緣乘の萩の葉に。へんしん無漏の露ぞ置く。

○一夏の間を勤めつゝ。晝夜に信心怠らず。狗倫比丘をぞ最初には。諦理を悟りて道成りし。

方等經二首

○大集方等は秋の山。四教の紅葉はいろ〱に。彈訶法會は濃く薄く。隨類ごとにぞ染めてける。

○須彌の峯をば誰か見し。法門聖教に說くぞかし。阿修

「にぞ」（常）（山）原「こそ」「さぞ」か（田）「乘」原「上」「へんしん」は「變身」か（常）「遍眞」か（野）「信心」は「身心」か（常）「なぞ」の「な」の傍に原本小字にて「無之」とあり「なぞ」の「を」なき方よし（常）

「彈訶の法會」か

「法門」（高、常）原「法文」「聖」原「正」「修」原「縱」

羅王をば見たるかは。智者の語るを聞くぞかし。

般若經四首

○般若十六善神は。十六會をこそ守るなれ。固より無漏の法門は。中道にこそ通ふなれ。

○大品般若は春の水。罪障氷の解けぬれば。萬法空寂の浪立ちて。眞如の岸にぞ寄せかくる。

○般若畢竟空の理は。かくのごとくぞ思ふべき。正法四十餘年に。一乘妙法說い給ふ。

○般若の御法を尋ねて。常在東へ尋ね行き。妙香城に到りてぞ。畢竟空をば悟りてし。

「般若經四首」目錄には「三首」とあり
「善」原「禪」

「門」原「文」

「かくのごとくぞ」は「覺悟の德ぞ」か(常)

「在」の傍に「啼」とあり「常啼」か(田)
「城」原「上」

無量義經一首

○無量義經に莟む花。靈鷲の峰にぞ開けたる。三十二相は木の實にて。四十二にこそなりにけれ。

普賢經一首

○積れる罪は夜の霜。慈悲の光にたゝへずば。行者の心をしづめつゝ。實相眞如を思ふべし。

法華經廿八品謌百十五首

序品五首　第一卷

「む」原「ん」

「たぐへず」か（田）

○空より花降り地は動き。佛の光は世を照らし。彌勒文殊は問ひ答へ。法花を説くこそ豫ねて知る。

○鷲の御山の法の日は。曼陀羅曼珠の華降りて。栴檀沈水滿ち匂ひ。六種に大地ぞ動きける。

○法花經弘めし初には。無數の衆生其の中に。本瑞所々に雲晴れて。曼陀羅曼珠の花ぞ降る。

○釋迦の法華經説く初。白毫光は月の如。曼陀羅曼珠の華降りて。大地も六種に動きけり。

○彌勒菩薩はあはれなり。天人大會の前にして。昔の佛の有樣を。文殊に問ひつゝ説い給ふ。

「本瑞」(高)「現瑞空に」(野)

「ひかり」原「ひより」

方便品九首

○平等大會の地の上に。童子の戯れ遊びをも。漸く佛の種として。菩提大衆ぞ生ひにける。

○釋迦の御法は多かれど。十界十如ぞすぐれたる。紫磨や金の姿には。我等は劣らぬ身なりけり。

○十界十如は法算木。法界唯心覺りなば。一文一偈を聞く人の。佛に成らぬは一人無し。

○釋迦の御法は品々に。一實眞如の理をぞ説く。經には聞法歡喜讃。聞く人蓮の身こそなる。

○我等が宿世のめでたさは。釋迦牟尼佛の正法に。此の

「會」原「惠」(小)

「衆」は「樹」の誤ならむ

「紫磨や」の「や」は助辭

「紫磨黄金の姿にも」(野)(田)

「法算木」(山、常)原「法華き」

「文」原「門」

續世繼かりがねの巻に「釋迦の御法は品々に」さいふ同じ歌を一夜に百返り數へて云々さあり

世に生れて人となり。一乘妙法聞くぞかし。

○法華は何れも尊きに。此の品聞くこそあはれなれ。尊けれ。童子の戯れ遊まで。佛に成るとぞ説い給ふ。

○古童子の戯れに。砂子を塔と爲しけるも。佛に成ると説く經を。皆人持ちて縁結べ。

○法華は佛の眞如なり。萬法無二の旨を述べ。一乘妙法聞く人の。佛に成らぬは無かりけり。

○法華經八巻が其の中に。方便品こそ頼まるれ。若有聞法者。无一不成佛と説いたれば。

譬喩品六首　第二巻

「説い」原「説ひ」

○四大聲聞こしらへて。三界火宅を敎へ出だし。白牛の車を差し寄せて。直至道場定まりぬ。

○幼き子供はいとけなし。三の車を乞ふなれば。長者は我が子の愛しさに。白牛の車ぞ與ふなる。

○幼き子供を誘るゝ。三の車をかまへつゝ。門の外にし出でぬれば。一つ車に乘り給ふ。

○門の外なる三つ車。二つは乘らむと思ほえず。大白牛車に手を掛けて。直至道を訪ひ行かむ。

○上根舍利弗先覺り。菩提樹果二人出でゝ。空を陰に隱れつゝ。八相佛に成り給ふ。

○長者の門なる三つ車。羊鹿のは目もたゝず。牛の車に

「こふなれば」は「こうたれば」歟（常）

「乘らむ」（山）原「のこん」

「道を」は「道場」か（野）（田）

「樹果」（高）原「樹杲」

「かごなる」原「いさなる」「たゝす」は「立てす」歟

心掛け。三界火宅を疾く出でむ。

信解品二首

○長者は我が子の愛しさに。瓔珞衣を脱ぎ捨てゝ。異しき姿に成りてこそ。漸く近づき給ひしか。

○窮子の譬ぞあはれなる。親を離れて五十年。萬の國に誘はれて。草の庵に留まれば。

藥草喩品四首　第三卷

○釋迦の御法は唯一つ。一味の雨にぞ似たりける。三草二木は品々に。花咲き實なるぞあはれなる。

○大空かき曇り。一味の雨を降らさばや。妙法蓮華を植ゑ擴げ。佛に成らむてふ種とらん。

○法華經聞くこそあはれなれ。佛も我等も同じくて。平等大惠摩尼公。末の枝こそ說い給ふ。

○我等は薄地の凡夫なり。善根つとむる道知らず。一味の雨に潤ひて。などか佛に成らざらん。

授記品四首

○大目蓮華はあはれなり。多くの佛に參り合ひて。供養して最後の身なせば。淨土の蓮にぞ上るべき。

○釋迦の御弟子は多かれど。勝れて授記に預かるは。迦

「ならむ」の傍に「ならう」とあり「てふ」原「てう」「さらん」は「させん」か（常）

「大惠」は「大會」か（小）「公」は「うり」即ち優利又は「へう」即ち寶か（田）或は「摩尼の玉」か「薄地」（山）原「白地」「凡夫」原「梵夫」

「蓮華」は「蓮等」（山）「して」原「しん」「最後の身」（山）原「さいそのしん」

葉須菩提や迦旃延。目蓮よ。これらは後世の佛なり。

○四大聲聞いかばかり。喜び身よりも餘るらむ。我等は後世の佛ぞと。確に聞きつる今日なれば。

○四大聲聞次々に。數多の佛に逢ひ〳〵て。八十隨相備へてぞ。淨土の蓮に上るべき。

化城喩品三首

○一乘妙法說く聞けば。五濁我等も捨てずして。結緣久しく說きのべて。佛の道にぞ入り給ふ。

○我等が疲れし所にて。安んる心し無かりせば。寶の所に近くとも。道中にてぞ歸らまし。

「かせん」原「こせん」

口傳集にあり「後世」を「來世」とせり

「隨相」は「種好」か（野）

「五濁」原「五渇」「五濁の」の「の」を脫せるか

「安んる」は「安むる」

○大通智勝の王子ども。各々淨土に生るれど。第十六の釋迦のみぞ。娑婆に佛に成り給ふ。

五百弟子品四首　第四卷

○最初の時には富樓那比丘。よそには菩薩身を隱し。外には聲聞形なり。されども皆これ佛なり。

○一乘實相珠清し。衣の裏にぞ繫けてける。醉の後にぞ覺りぬる。昔の親の嬉しさに。

○釋迦は第十六王子。塵點刧數の彼方より。衣の裏に珠つゝみ。磨けば佛に成り給ふ。

○親しき友の家に行き。酒に醉ひ伏し臥せるほど。衣の

「よそ」は「うち」か（常）

「に」は「よ」又は「を」か

「點」（高）原「轉」

裏に繫く珠を。知らぬ人こそあはれなれ。

人記品四首

○釋迦の御弟子は多かれど。佛の從弟は疎からず。親しきことは誰よりも。阿難尊者ぞおはしける。

○阿難尊者はあはれなり。慈悲の室を住處にて忍辱衣を身に着つゝ。諸法空を御座として。人に教へて知らしめき。

○阿難尊者。如來の親しき弟子なり。疎からず。迦毘羅に住して年久し。大願深きによりてなり。

○二千聲聞の佛を讃むる譬には。晝は甘露の注ぐを見。

「しらしめき」(常)原「しらしめよ」

「尊者」の次に「は」脫せるならむ或は「阿難尊者は、うさからず如來の親しき弟子なり」か(常)

「かひら」原「かひち」

夜は燈火照るが如。

法師品七首

○寂寞音せぬ山寺に。法華經誦して僧居たり。普賢頭を撫で給ひ。釋迦は常に身を護る。

○忍辱衣を身に着れば。戒香涼しく身に匂ひ。弘誓瓔珞懸けつれば。五智の光ぞ輝ける。

○慈悲の御室に住みながら。忍辱衣を身に懸けて。忍辱衣は色深く。慈悲の室には風吹かず。諸法空を御座として。人には敎持たしむ。

○二乘高原陸地には。佛性蓮花も咲かざりき。泥水堀り

「弘誓の瓔珞」か
榮花物語玉の臺の巻の句なり

「二乘」は「二乘の」か「陸地」原「六地」(常)

得て後よりぞ。妙法蓮華は開けたる。

○靜かに音せぬ道場に。佛に花香奉り。心をしづめて暫くも。讀めばぞ佛は見え給ふ。

○法華經八卷は一部なり。廿八品いづれをも。須臾の間も聞く人の。佛に成らぬは無かりけり。

○法華は諸法に勝れたり。人の音せぬ所にて。讀誦つもればおのづから。普賢薩埵は見え給ふ。

寶塔品五首

○靈山界會の大空に寶塔扉を押し聞き。二人の佛を一度に。喜び拜み奉る。

○寶塔出でし時。遙に瑠璃の地と成して。瑪瑙の扉を押し開き。分身佛ぞ集まりし。

○寶塔出でし時。須彌も鐵圍も投げ捨てゝ。遙に瑠璃の地と成して。分身佛ぞ集まれる。

○十方佛神集まりて。寶塔扉を押し開き。如來滅後の末の世に。法華を說き置き給ひしぞ。

○法花經暫しも持つ人。十方諸佛喜びて。持戒頭陀に異ならず。佛に成る事疾しとかや。

提婆品十首

○釋迦の御法を受けずして。背くと人には見せしかど。

「てちゐ」原「てちぬ」

「佛神」は「分身」か或は「諸佛」か（常）

「第五卷」脫か

千歳のつとめを今日聞けば。達多は佛の師なりける。

○達多五逆の惡人と。名には負へども眞には。釋迦の法華經習ひける。阿私仙人これぞかし。

○氷をたゝきて水掬び。霜を拂ひて薪木とり。千歳の春秋を過ぐしてぞ。一乘妙法聞き初めし。

○娑竭羅王の女だに。生れて八歳といひし時。一乘妙法聞き初めて。佛の道には近づきし。

○達多は佛の仇なれど。佛はそれをも知らずして。慈悲の眼を開きつゝ。法の道にぞ入れ給ふ。

○阿私仙の洞の中。千歳の春秋仕へてぞ。逢ふこと聞くこと持つこと。難き法をば我は聞く。

「仙」原「仏」

「とり」は「こり」かとおもへど今樣歌鈔にも「とり」とあり

○女人五つの障(さはり)あり。無(む)垢(く)の淨土は踈けれど。蓮花し濁に開くれば。龍女も佛(ほとけ)に成りにけり。

○おほよす女人一(ひと)度(たび)も。この品誦する聲聞けば。蓮(はちす)に上(のほ)るちうやまで。女人永く離(はな)れなむ。

○昔の仙こそあはれなれ。法華を弘めずなりにせば。人をも我が身も今までに。聲だに聞かず成りなまし。

○常の心の蓮(はちす)には。三身佛性おはします。垢つき穢(きたな)き身なれども。佛(ほとけ)に成るとぞ説い給ふ。

勸持品二首

○我が身はゆめにおこらねど。無上道(だう)をぞ惜しむべき。

「淨土」原「うへと」とあり「淨土」を「上と」と作し更に「うへと」とよみしなり

「おほよす」は「おほよそ」の誤か

「ちうや」は「中有」歟(高)「中夜」なるべし

「説い」原「とひ」

我不愛身命但惜無上道を譯せるもの

命は譬の如くなり。如來付囑は過たじ。

◯法華を行ふ人は皆。忍辱鎧を身に着つゝ。露の命を愛せずて。蓮の上にのぼるべし。

安樂行品三首

◯輪王頭に光あり。久しく隱して人知らず。法花經一度も聞く人は。頭の珠をぞ手に得たる。

◯法華經讀誦する人は。天諸童子具足せり。遊び行くに恐なし。獅子や王の如くなり。

◯妙法つこむるしるしには。昔まだ見ぬ夢ぞ見る。それより生死の眠覺め。覺後の月をぞ翫ぶ。

なれば「我身は命は惜しまれど」歟(常)もこのまゝにてよかるべし

輪王(山)(常)原「わうわう」

「天諸」は「諸天」か(常)「や」は助辭

「覺後」(山)

涌出品二首

○釋迦の御法のそのかみは。樣々見知らぬ人ぞある。地より涌きつる菩薩達。皆これ金の色なりき。

○法華經此度弘めむこ。佛に申せご許されず。地より出でたる菩薩達。其の數六萬恒沙なり。

壽量品三首　第六卷

○法華經八卷は一部なり。廿八品其の中に。あの讀まれ給ふ說かれ給ふ。壽量品ばかり。あはれに尊きものは無し。

○佛は香山淨土にて。淨土も變へず身もかへず。始も遠く終無し。されども皆これ法花なり。

○娑羅林に立つ烟。上るこ見しは空目なり。釋迦は常にまし〳〵て。靈鷲山にて法ぞ說く。

分別功德品三首

○佛に華香奉り。堂塔建つるも尊しや。これに勝れてめでたきは。法華經持てる人ぞかし。

○法花經持たん人は皆。起きても臥しても此の品を。常に說き讀み怠らで。塔を立てつゝ拜むべし。

○釋迦の說法說く場に。幡蓋風に飜へし。多摩羅跋香充

「香山」(山)「淨土」原「上さ」

此歌によりて娑羅林さなづけしにはあらじか

「ひろがへし」は「ひろがへり」歟

ち滿ちて。喜見城より華ぞ降る。

隨喜功德品四首

○法華經說かるゝ所にて。語り傳ふる聞く人の。功德の量を尋ぬれば。五十隨喜ぞ量なき。

○須臾の間も聞く人は。陀羅尼菩薩を友として。一つ蓮に入りてこそ。衆生敎化弘むなれ。

○難行つとむる人よりも。五十隨喜ぞ勝れたる。さらなり講座の場にして。隨喜功德ぞ量なき。

○海岸國の莊嚴園。毘盧遮那莊嚴藏。大樓閣の中にして。大悲法門說い給ふ。

「城」原「上」

これは華嚴經の下に屬せしむべきもの誤りてこゝに置けるならむ「門」原「文」

法師功德品三首

◎三身佛性玉(たま)はあれど。生死の塵にぞ穢(けが)れたる。六根清淨得て後ぞ。仄(ほのか)に光は照らしける。

◎釋迦の御(み)法(のり)を聞きしより。身は澄(す)みきよき鏡にて。心さとり知ることは。昔の佛(ほとけ)に異(ことな)らず。

◎妙法蓮華經。書(か)き讀み持(たも)てる人は皆。五種法師と名づけつゝ。終(つい)には六根きよしとか。

不輕品四首　第七卷

◎不輕大士のかまへには。逃(のが)るゝ人こそ無かりけれ。誹(そし)

「後ぞ」は「後に」ともよまる

「きよき」原「よき」「こゝろさとり」は「こゝろにさとり」歟(常)

「きよし」原「きかし」

「かまへ」上にも「三の車なかまへつゝ」さあり「お前」か(田)

る縁をも縁として。終には佛に爲し給ふ。
○不輕大士ぞあはれなる。我深敬汝等と唱へつつ。打ち罵り惡しき人も皆、救ひて羅漢となしければ。
○釋迦牟尼佛のつきゆきし。けしとおほくは法華經の。力にてこそ有漏の身の。佛道漸く近しとか。
○佛性眞如は月清し。煩惱雲こそ隔てたる。佛性遙かにたゝみてぞ。禮拜久しく行ひし。

神力品二首

○法華のまします所には。諸佛神力拜みつゝ。皆これ佛の菩提樹。轉法輪の所なり。

「敬汝」原「輕如」

「つきゆきし」は「月逝きし」歟(志)「次行きし」か「けしと」不明

「たゝみ」は「おがみ」歟「たさみ」か(田)「たのみ」「ながめ」或は「只見てぞ」か(藤)

○釋迦の誓ぞ頼もしき。吾等が滅後に法華經を。常に持たむ人は皆。佛に成ること難からず。

囑累品五首

○一乘付囑の儀式こそ。あはれに尊きものはあれ。釋迦牟尼佛は座より下り。菩薩の頂撫で給ふ。

○讓りし菩薩の頂を返す〴〵ぞ搔い撫でし。得難き御法の末の世の。後めたなく覺ゆれば。

○數多の菩薩の頂を釋迦の右の手ぶさして。三度搔い撫で給ひしは。一乘弘めむ爲なりき。

○吾等ぞ思へば頼もしき。きけむ經を聞きし故。三昧總

「きけむ」は「こきけむ」歟

持を得てこそは。佛に多くは仕へしか。

◎如來付囑はいと重し。敎の如も弘むれば。佛の恩をそむきつゝ。大力はかううつしてき。

藥王品四首

◎身を變へ二度生れ來て。佛の滅後に參り合ひ。兩つの臂を燃してぞ。多くの國をば照らしてし。

◎法を求めししるしには。臂を燃して仕へつゝ。我が身の髓腦碎きてぞ。菩薩の位得たりける。

◎女の殊に持たむは。藥王品に若くは無し。如說修行年經れば。往生極樂疑はず。

汝等若能如是則爲已報諸佛之恩の譯なれば「佛の恩をそむくいつゝ」「大力ばかりをつくしてき」、(常)「大力は功うつしてき」ならむ(山)

○娑婆に不思議の藥あり。法華經なりこそ說い給ふ。不老不死の藥王(やくわう)は。聞く人あまねく賜(たま)るなり。

妙音品二首

○我が身一つはさかひつゝ。十方界には形(かたち)分け。衆生普(あまね)く導きて。淨光園(ゑん)には歸りにし。

○妙音菩薩の誓こそ。返すぐ〱もあはれなれ。娑婆界」の衆生ゆへ。三十四身(しん)に身を分けつ。

観音品四首　第八巻

観音誓(ちかひ)し廣ければ。普き門(かど)より出で給ひ。三十三身に

「さかひ」は「ちかひ」か「界ひ」か(田)妙音品の原文によるに「釋迦居つゝ」の意又は「娑婆居つゝ」の誤か(藤)

「身に」原「オてに」

四首とあれど三首なり

現じてぞ。十九の品にぞ法は説く。

○觀音深く頼むべし。弘誓の海に船浮べ。沈める衆生引き乘せて。菩提の岸まで漕ぎ渡る。

○普き門の嬉しきは。教ふる人だに無けれども。觀音大悲に導かれ。入らぬ者こそ無かりけれ。

陀羅尼品五首

○ゆめ〳〵いかにも譏るなよ。一乘法華の受持者をば。藥王勇施多聞持國十羅刹の。陀羅尼を説いてぞ護るなる。

○法華經持てる人ばかり。羨ましきものはあらじ。藥王

五首とあれど四首なり

勇施多聞持國十羅刹に。夜晝護れ奉る。

○持經法師ははらゝ門。惱ます人だにたとひあり。頭割れなん七分に。これを聞く人信ずべし。

○法華經持てる人誹る。それを誹れる報には。頭七つに割れ裂けて。わむ樹の枝に異ならず。

妙莊嚴王品四首

○釋迦の御法は浮木なり。參り會ふ我等は龜なれや。今は當來彌勒の。三會の曉疑はず。

○昔の大王妙莊嚴。古へ行ひせし故に。淨藏淨眼もろともに。一佛乘こそ聞き給ふ。

經に阿黎樹とあり

「たうらい」原「うらい」

○聞くに羨しきものは。妙莊嚴の二人（ふたり）の子。淨藏淨眼親（おや）を導きて。菩提の道に入れければ。

○戲（たはぶ）れ遊びの中（うち）にしも。先（さき）らに學（まね）びん人をして。未來の罪を盡すまで。法華に緣をば結ばせん。

普賢品三首

○草の庵（いほり）の靜けきに。持經法師の前にこそ。生々世々にも逢ひがたき。普賢薩埵（さた）は見え給へ。

○行住座臥に此の經を。讀む人あらば隙も無く。普賢はるかに尋ね來て。緣をば結び給ひけり。

○法華經娑婆に弘むるは。普賢薩埵（さた）の力なり。讀む人其

の文忘るれば。共に誦して覺るらん。

懺法哥一首

○一心敬禮聲澄みて。十方淨土に隔なし。第二第三數ごとに。六根罪障罪滅す。

涅槃哥三首

○拘尸那城には西北方。跋提河の西の岸。娑羅や雙樹の間には。純陀が供養を受け給ふ。

○釋迦牟尼佛の滅期には。迦葉尊者も逢はざりき。歩を運びて來しかども。十六羅漢にも後れにき。

「滅」原「懺」大原勝林院藏聲明口訣に「一心敬禮聲すみて十方世界にへだてなし第二第三たび每に六情根の罪きえぬ」とあり（筑）

「や」助辭

「滅期」（高）原「滅後」「滅度」（野）

「にも」の「に」衍か

○二月十五日朝より。是等の法文說き置きて。漸く中夜に至るほど。頭は北にぞ臥し給ふ。

極樂哥六首

○極樂淨土は一所。勤なければ程遠し。我等が心の愚にて。近きを遠しと思ふなり。

○極樂淨土の東門は。難波の海にぞ對へたる。轉法輪所の西門に。念佛する人まいれとて。

○極樂淨土のめでたさは。一つも徒なる事ぞ無き。吹く風立つ浪鳥も皆。妙なる法をぞ唱ふなる。

○極樂淨土の宮殿は。瑠璃の瓦を青く葺き。眞珠の垂木

「ほど遠し」の傍に「はろかなり」さあり

難波の海（山）「うみ」原「う」「むかへ」はむかはせの意か或は「むかひ」歟

「珠」原「殊」

を作り並め。瑪瑙の扉を押し開き。

○十方佛土の中には。西方をこそは望むなれ。九品蓮臺の間には。下品なりとも足んぬべし。

○淨土は數多あんなれど。彌陀の淨土ぞ勝れたる。九品なんなれば。下品下にてもありぬべし。

僧哥十首

○迦葉尊者の裳の裾は。文殊の袂に打ち羽ぶき。大通王の佩ける太刀。大悲の膝にぞ解き懸けし。

○迦葉尊者の石の室。祇園精舍の鐘の聲。醍醐の山には佛法僧。鶏足山には法の聲。

和漢朗詠集佛事の部にあり榮花物語續世繼等にも出づ

「山には」の傍に「山なる」とあり

○迦葉尊者の禪定は。鷄足山の雲の上。春の霞し龍華會に。付囑の衣を傳ふなり。

○迦葉尊者あはれなり。付囑の衣を頂きて。鷄足山に籠りゐて。龍花の曉待ち給ふ。

○迦葉尊者のふる道に竹の林ぞ生いにける。功德願の園見れば。昔の庵ぞあはれなる。

○迦葉尊者の打ちし鐘。聞えぬ所ぞ無かりける。憍梵波提一人こそ。定に入りては聞かざりし。

○迦葉尊者の石の室。入るにつけてぞ恥かしき。緣執盡きざる身にしあれば。袂に花こそ留るなれ。

○大峯聖を船に乗せ。粉河の聖を舳に立てゝ。正きう聖

龍華會(山)(常)原「わう花ゑ」

「尊者は」か

「龍」原「然」

「ふろ」は「經ろ」か(山)

「正きう」は「聖寳」か(高)「書さの」歟さらば「書寫の」さ解すべし(源)

にこち取らせて。や。乘せて渡さん。常住佛性や極樂へ。

○大峯行ふ聖こそ。あはれに尊きものはあれ。法華經誦する聲はして。確の正躰まだ見えず。

○山寺行ふ聖こそ。あはれに尊きものはあれ。行道引聲阿彌陀經。曉懺法釋迦牟尼佛。

雜法文哥五十首

○娑羅や林樹の樹の下に。歸る人には見えしかど。靈鷲山の山の端に。月はのごけく照らすめり。

○いちひくや縒れる眞葛。繰れごも繰れごも盡きもせず。やさうの池なる花蓮。拘尸那城にぞ開けたる。

「こち」は「梶」か「や」の傍に「無之」とあり

「引聲」（野）（源）原「いんぜへ」

「きや」原「きやう」

五十首とあれど五十一首あり

「や」は助辭
「林樹」は「双樹」歟（高）

佛の入滅が假の想なるをよめるなれど初句わきがたし
「いちひくや」は「一百」歟（高）「幾百」歟

○傅氏が窟の嵐には。殷の夢見て後ぞよき。嚴陵瀨の池の水。今こそ汲むには濁るらめ。

○釋迦の月は隱れにき。慈氏の朝日はまだ遙なり。其のほど長夜のくらきをば。法華經のみこそ照らい給へ。

○釋迦の說法聽きにとて。東方淨妙國土より。普賢文殊は師子象に乘り。娑婆の穢土にぞ出で給ふ。

○大唐朝廷の近からば。五臺御山におはします。釋迦牟尼佛の母といます。文殊の御許へも參りなまし。

○香山大樹緊那羅が。瑠璃の琴には摩訶迦葉や。三會の袂從ひて。草木も四方にぞ靡きける。

○法華經八卷は網なれや。無量義經を泛子として。觀音

朗詠集丞相の詩による（山）「けんれうらい」原「けんこらい」「くむには」原「くむらは」

梁塵秘抄卷一斷簡には「まだはるか」とあり

「てらい」原「照らへ」

「ちかからば」原「ちからば」

「きん」原「さん」

今樣歌抄所載のこの歌には「香山大樹緊那羅が瑠璃の琴には摩珂迦葉三衣の袂にしたがひて……」とあり

「無量義經」は「無

勢至を網子とし。救ひ給へ罪人を。

○法花の御法ぞ頼もしき。生死の海は深けれど。諸經くりいむ譬にて。終に我等も浮びなん。

○蓮の花をば板と踏み。たなしき莖をば杖と衝いて。是等に遊ばむ人は皆。靈山界會の友とせん。

○蓮華陸地に生ひずとは。暫く彈訶の言葉なり。泥水堀り得て後よりぞ。妙法蓮華は開けたる。

○摩梨山に生ふと云う。牛頭や栴檀得てしがな。手に採り身に觸れ香をかげば。精進の罪障解けぬべし。

○摩梨山のこねにこそ。かうふてゐる蒔き置きし。そうきやの種に生いにけり。やうれう香とぞ匂ふなる。

「量壽經」か(常)「綱子」(山)(鈴)

「いむ」は「よむ」歟「居む」か(藤)

「たなしき」は「むなしき」か(山)「おなじき」か(田)

「陸」原「六」

「牛頭」原「五づ」とあり「香餉」か(和)「牛頭」にて赤栴檀の名(高)「精進」は「生身」か又は「生死」か「これ」は「木根」か「峰」か「かうふてゐる」は「劫布羅」歟龍腦の梵語(高)「羯布羅」

○忉利は尊き所なり。善法堂には未申。圓生樹より丑寅に。中には喜見の城立り。

○忉利のみやこは。歡喜の御名をぞしようなふなる。五臺山には文殊こそ。六時に華をば散ずなれ．

○忉利の都の鶯は。塒定めてさぞ遊ぶ。淨土の植木と成りぬれば。花咲き實なるぞあはれなる。

○太子の御幸には。犍陟駒に乘り給ひ。車匿舍人に口取らせ。檀特山にぞ入り給ふ。

○龍女は佛に成りにけり。などか我等も成らざらん。五障の雲こそ厚くとも。如來月輪隱されじ。

○太子の身投げし夕暮に。衣は掛けてき竹の葉に。王子

か（筑）

「そうきや」は「僧伽」歟

「やうれうかう」は「龍腦香」歟（高）

「生」原「城」

「城」原「上」

「唱なふなる」を音讀して誤りしにて「唱ふ」なるべし「稱なふなる」歟（高）

「しやのく」の傍に「さのく」とあり

聲明集に出づ「如來月輪隱されぬものこそ有けれ」とあり

「太子の」傍に「無比哥」と小字にて記せり

の宮を出でしより。沓は有れども主も無し。

○生死の大海邊無し。佛性眞如岸遠し。妙法蓮花は船筏。來世の衆生渡すべし。

○有漏の此の身を捨て棄てゝ。無漏の身にこそ成らむずれ。阿彌陀佛の誓あれば。彌陀に近づきぬるぞかし。

○其のほど東西十里なり。南北七百由旬ない。水竹花樹は悉く。莊嚴淨土に異ならず。

○天台宗の畏さは。般若や華嚴摩訶止觀。玄義や釋籤倶舍ずんぞ。法華經八巻が其の論義。

○毗盧の身土のいやしきを。凡下の一念超えずさか。阿鼻のえしやうの卑しきも。聖の心に任せたり。

此歌體源抄に出でて「黙のみ山をいでしより」とあり又一本に「主は無し」とあり

「ない」は「なり」歟

「觀」原「歡」

「ずんぞ」は「頌なご」歟「頌疏」なるべし

「いやしきを」は「たふときも」歟

「えしやう」は原本依正をあつ「穢生」歟(高)

○もとこれ祇陀は太子の地。須達黃金を地に敷きて。佛の御爲に買ひ取りて。始めて精舍となしゝなり。

○師子や王のよそのひは。轉法輪をぞ歡とする。たうやはたうのすとして。身を分け佛土に近かりき。

○淨飯王帚を持ち。耆闍崛山にはそうざ居りとかやな。五臺山の深きより。一乘と成つて出で給ふ。

○摩耶の腹より生れ出て。寶の蓮足を承け。十方七度步みつゝ。四句の偈をぞ說い給ふ。

○摩揭陀國の王の子に。おはせし須達拏太子こそ。檀特山の中山に。六年行い給ひしか。

○鷲のおこなふ深山より。聖德太子ぞ出で給ふ。鹿が苑

「精舍」原「正座」「なしゝ」の傍に「なりし」とあり「よそのひ」は「よそほひ」歟(和)「よろこび」歟(野)「よつのわ」にて四の輪か(田)「十や廿の數」歟(高)「塔や寶塔の主として」にて多寶佛涌出塔のことか(筑)「塔や御堂の主」か(志)「そうざ」は「聖者」か

「子に」原「この」傍書「こに」とあり

なる窟より。四果の聖ぞ出で給ふ。

○毘舎離城に住せりし。淨名居士の御室には。三萬二千の床立てゝ。それにぞや。十方の佛は居給ひし。

○狂言綺語の誤は。佛を讃むるを種として。麁き言葉も如何なるも。第一義とかにぞ歸るなる。

○慈悲の眼は鮮かに。蓮の如くぞ開けたる。智惠の光はよそ〳〵に。朝日の如あきらかに。

○白道猷が古き室。王子晋が故の跡。一々に廻りて見給ふに。昔の夢に異ならず。

○梵釋四王諸天衆。頭を傾け候ひき。草木も靡きて悉く喜び拜み奉る。

「いはや」傍に「みやま」とあり
「四果」原「四杲」
「居たまひし」傍に「座せりしか」とあり
「あやまち」傍に「たはふれ」
「たれ」傍に「えむ」あり
「第一義」(山)(筑)原「大智き」
今様歌鈔所載には「狂言綺語のたはふれゝ佛をほむる種として…第一義…」とあり
「よそ〳〵に」は「より〳〵に」か「よる〳〵に」か(田)
原「はくだういうこ」とあり
惠心の作と傳ふる天台大師和讃中に出づ

○たんちりをんの月の影。さやかに照らせば隈も無し。佛性眞如の清ければ。いよ〱光ぞ輝ける。

○夜ふけて長夜に至るほど。洲鶴眠りて春の水。娑婆の故き里に同じ。塞鴻鳴きては秋の風。閻浮の昔の日に似たり。

○寂滅道場音無くて。伽耶山に月隱れ。中夜の靜かなりしにぞ始めて正覺成り給ふ。

○崑崙山には石も無し。玉してこそは鳥は打て。玉に馴れたる鳥なれば。驚く氣色ぞ更に無き。

○崑崙山の麓には。五色の波こそ立ち騒げ。華蓮や世界の鐘の聲。十方佛土に聞ゆなり。

「たんちりをん」は特を持と誤れるにて「たんごくせん」歟(常)「たらたらかせん」にて「彈多羅迦山」か(山)

「洲鶴ねぶりて」以下極樂六時讃(中夜讃)にあり(志)(筑)

「似たり」の傍に「切句」とあり

「こんろん」原「こんろく」

「たちさはげ」の右に「朱然也」ありその右に朱「ツネニタテトモ」ありその右に「疏也」あり

○烏瑟緻の元結は。髪筋毎にぞ光るなる。王女が妙なる。聲引は。聞けども〳〵飽く期なし。

○佛も昔は人なりき。我等も終には佛なり。三身佛性具せる身と。知らざりけるこそあはれなれ。

○須彌の峰には堂建てり。名をばせんふ〻彌陀の堂。蓮華や后の一の願。其の日の講師は釋迦佛。

○三會の曉待つ人は。所を占めてぞおはします。鷄足山には摩訶迦葉や。高野の山には大師とか。

○我等は何して老いぬらん。思へばいとこそあはれなれ。今は西方極樂の。彌陀の誓を念ずべし。

○我等が心に隙も無く。彌陀の淨土を願ふかな。輪廻の

「華蓮」は「華厳」ならむ「十方佛土に」の右に朱「妙法トコソハトモ」あり

平家物語源平盛衰記に出づ

せんふゝは善法か西域記にあり(筑)「せんふく」ともよまろ「瞻部」か「千幅」か(田)「一の」の右に朱「イチコカトモ」とあり「一期が」か(田)

「さか」の右に「サハストモ」あり「オハストモ」ならむ

「何して」は「何しに」か(常)(田)「おい」原「たい」

寶物集十訓抄拾遺古徳傳等に出づ

罪こそ重くとも。最後に必迎へ給へ。

○彌陀の誓ぞ頼もしき。十惡五逆の人なれど。一度御名を唱ふれば。來迎引接疑はず。

○曉靜かに寢覺して。思へば淚ぞおさへあへぬ。果敢なく此の世を過しても。何時かは淨土へ參るべき。

○峯に起き臥す鹿だにも。佛に成ることいと易し。己れが上毛を整へ。筆に結ひ。一乘妙法書いたんなる功德に。

○果敢なき此の世を過すとて。海山かせぐとせし程に。萬の佛に踈まれて。後生我が身を如何にせん。

○萬を心と知りぬれば。阿鼻の炎も心から。極樂淨土の

「彌陀の誓ぞ」の一首佛歌の中に出づ二頁參照

「世」原「上」「すぐしても」は「すぐしては」の誤か（常）「みれにおきふす」の右に朱「アキノヤマカルトモ」あり「カル」は「ナル」ならむ

「いかに」の「に」の傍に「か」あり「萬を心」（常）原「よろづをうろ」さもよまろ

池水も。心澄みては隔（へだて）無（な）し。

原本以上にて甲の巻終り以下を乙の巻とせり

四句神歌百七十首

神分三十六首

○神の家の小公達は。八幡の若宮。熊野の若王子。子守御前。比叡には山王十禪師。賀茂には片岡。貴船の大明神。

○東の山王恐ろしや。二宮客人の行事の高の御子。十禪師山長。ゆつるきの三宮。峰には八王子ぞ恐ろしき。

○佛法弘むとて。天台麓に跡を垂れ。座します。光を和らげて塵となし。東の宮とぞ齋はれ座します。

○神の御前の現ずるは。さう九上山長行事の高の御子。牛の御子。王城ひたかいたうめる鬢頬結の。一童やい

四句の神歌といふ詞續世繼にあり

「小公達」(山)原「こきうたち」

「ゆつるき」は「ゆするぎ」にて「石動」か

「上」は「よ」歟

ちゐのさり。八幡に松童聖眞。こゝには荒夷。

○是より南に高き山。娑羅の林こそ高き山。高き峯。日前國懸中の宮。伊太祁曾鳴神こや切三所。

○王城東は近江。天台山王峯の御前。五所の御前は聖眞子。衆生願をいちこうに。

○闕より東の軍神。鹿島香取諏訪の宮。また比良の明神。あはのすたいのくちや小□熱田に八劒。伊勢には多度の宮。

○闕より西なる軍神。一品中山安藝なる嚴島。備中なる吉備津宮。播磨に廣峯惣三所。淡路の岩屋には住吉西の宮。

「いちゐのさり」は「一位の閼梨」歟(高)「の」の傍に原本「ヒ」とあり「いちゐさり」なるべし

「いたきそ」(和)(山)原「いなきそ」

「きり」は「きい」にて紀伊ならむ(山)

「いちこう」は「一童」か(田)「一統」か

「明神」の「神」の右に「王」あり

小□の右朱「野・ミヒテ」あり

安房の洲瀧の口や小鷹明神(野)

「ちうさん」は吉備津彦社と同神なる美作の中山神社ならん

「きびつ」原「たびつ」

○なん〳〵の宮には泉出でて。雑井の御前は潤うらん。濁るらむ。中のこさいその竹の節は。一夜に五尺ぞ生い上る。

○何れか貴船へ参る道。賀茂川みのさこ御菩薩池。御菩薩坂。幡板しの坂や一二の橋。山河さら〳〵岩枕。

○貴船の内外座は。山尾よ川尾よ奥深須比加津良。白石白髯白専女。くろをの御前はあはれ内外座や。

○近江の湖は湖ならず。天台薬師の池ぞかし。何ぞの湖。常楽我浄の風吹けば。七寶蓮華の波ぞ立つ。

○近江の湖に立つ波は。花は咲けども實も生らず。枝さささず。や。比叡の御山の西うらにこそ。や。水飲ありこ聞

「なん〳〵の」は「なんぐ」(南宮)歟「こさいそ」は「子最初」歟「小宰相」歟(高)「御在所」歟(野)「竹のよ」は「竹の子」か

幡板(山)

「深尾」「川尾」「奥深」「須比加津良」(山)「おくふか」原「にくふか」

「浄」原「上」

水飲は地名(山)

け。

○祇園精舎の後には。よも〳〵知られぬ杉立てり。昔より。山の根なれば生いたるか杉。神の驗と見せんとて。

○熊野へ參るには。紀路と伊勢路のどれ近し。どれ遠し。廣大慈悲の道なれば。紀路も伊勢路も遠からず。

○熊野へ參るには。何か苦しき修行者よ。安松姫松五葉松。千里の濱。

○熊野へ參らむと思へども。徒步より參れば道遠し。すぐれて山嚴し。馬にて參れば苦行ならず。空より參らむ羽賜べ若王子。

○熊野の權現は。名草の濱にこそ降り給へ。若の浦にし

「しるしを」歟（野）

「近し」原「ちし」「遠し」原「とを」の下一字欠く又「とれとを」の傍に「以下無之」とあり

安松は和泉の地名（山）

體源抄に「海道下れば浪高し山道と思へばすぐれて山きびし」云々とあり此類なり

口傳集にあり「名草の濱にぞおり給ふ」とあり

ましませば。年はゆけども若王子。

○花の都をふり捨てゝ。くれ〲参るはおぼろけか。かつは權現御覽ぜよ。青蓮の眼を鮮かに。

○八幡へ参らんと思へども。賀茂河かつら河いと早し。あな早しな。淀の渡に船浮けて。迎へ給へ大菩薩。

○南宮の本山は。信濃の國とぞ承はる。さぞ申す。美濃の國には中の宮。伊賀の國には稚き兒の宮。

○金の御岳は一天下。金剛藏王釋迦彌勒。稻荷も八幡も木島も。人の参らぬ時ぞ無き。

○金の御岳は四十九ゐの地なり。嫗は百日千日は見しかど。え知り給はず。俄に佛法僧達の二人おはしまし

「賀茂河」以下原本「かもがはかつらかは」とあり「かは」の傍に「くカ」とあり

「早しな」原「はやくな」

「御岳」原「みたて」

「四十九ゐ」は「四十九院」か「四十九位」か(藤)

ふたりの下の右に原小字にて「みたり」とあり

て。行ひ現はかし奉る。

○金の御岳にある巫女の。打つ鼓。打上げ打下し面白や。われ等も參らばや。ていとんとうとも響き鳴れ〳〵。打つ鼓。いかに打てばか此の音のたえせざるらむ。

○神のめでたく現ずるは。金剛藏王はく王大菩薩西の宮。祇園天神大將軍。日吉山王賀茂上下。

○大梵天王は中の間にこそおはしませ。正法婆利女の御前は。西の間にこそおはしませ。

○清水の冷き二宮に。六年苦行の山籠り。數珠の潰るも惜しからず。童子の戯れ如何なるもそれ如何に。

○大しやうたつといふ河原には。大將軍こそ下り給へ。

「たえせ」原「たはせ」

「婆利女」（山）原「より女」「御前は」原本傍に「おまへには」とあり

○誂ひ廻り諸共に。下り遊ふ給へ大将軍。

○一品聖靈吉備津宮。新宮本宮内の宮。隼人崎くたやみなみの神客人。うしとらみさきは恐しや。

○内には神おはす。中をば菩薩おまへたち。はなこしまのあたぬし。七寶蓮華はをしつるぎ。

○巖神三所は今貴船。參れば願ぞ滿て給ふ。歸りて住處をうち見れば。無數の寶ぞ豐なる。

○住吉四所の御前には。顏好き女體ぞおはします。男は誰ぞと尋ぬれば。松が崎なる好男。

○天の御門より。一童阿兒こそ出で給へ。衆生願をば。一童阿兒こそ滿て給へ。

「みなみ」は「南」歟「うしとら」は「牛虎」か（藤）「丑寅」か「みさき」は「御前」か「み崎」か

「おまへたち」は「御前達」か　又は「内」は「宇治」にて「菩薩御前橋小嶋の縣主」か

玉勝間所載の肥後國の神樂歌に「……顏よき女體おはしますをつさは誰ぞと問ひたれば松のうら葉のさみ男」といへるあり（藤）

「出で」原「いで、」

○本體觀世音。常在補陀落の山。爲度や衆生。生々示現大明神。

○濱の南宮は。如意や寶珠の玉を持ち。須彌の峯をばらいとして。海路の海にぞ遊ふ給ふ。

佛哥十二首

○釋迦の御法は天竺に。玄奘三藏ひろむとも。深沙大王わたさずば。此の世に佛法無からまし。

○釋迦の説法終りなば。摩訶や迦葉の大阿羅漢。雞足山より慈尊の。出で給はう世に參りあはむ。

○釋迦牟尼佛の童名は。悉達太子と申けり。父をば淨飯

「爲度」「示現」(山)

「濱の南宮」(山)原「しまのなんく」「らい」は「かい」歟(山)(田)「海路の海原」(山)

「ひろむ」は「もさむ」の誤ならむ(常)

「雞足山」原「けいもくさん」

「悉」原「七」

王と云ひ。母これ善覺長者の女摩耶夫人。
○文殊は誰か迎へ來し。奝然聖こそは迎へしか。迎へしかや。從者には于闐國王や。らう正らう人善財童子の佛陀波利。さて十六羅漢諸天衆。
○文殊の次をば何とかや。追々童子が子なりけり。眉間白毫照らすには。十二の菩薩ぞ出で給ふ。
○觀音勢至の遣水は。阿耨多羅こぞ流れ出づる流れたる。ゆくわうたいしの前の池の波はや。唵嚩曰羅こぞ立ち渡る。
○我が身は罪業重くして。終には泥犁へ入りなんず。入りぬべし。佉羅陀山なる地藏こそ。毎日の曉に。必ず來

「いひ」の右下に朱「キ」あり「これ」原「され」
「奝然」(山)原「朝念」
「從者」「于闐國王」(山)「國の王か」(田)
「うてんこくわう」原「うてんこくるわう」
「らう正らう人」は「採桑老人」か(常)「大聖老人」か(山)
「善財」原「善哉」
「佛陀波利」(山)原「佛たまり」「ま」の傍に「はトアリ」
「ゆくわうたいし」は「藥王大士」か(常)「育王太子」か(高)

りて訪ふ給へ。

○不動明王おそろしや。怒れる姿に。劍を持ち。索を提げ。後に火焔燃え上るこそかやな。前には惡魔寄せじこて降魔の相。

○釋迦の住所は何處〱ぞ。法華經の六局の自我偈にや說かれたる。文ぞかし。常在靈鷲山に並びたる。及餘諸住處は其處ぞかし。

○極樂淨土の東門に。機織る蟲こそ桁に住め。西方淨土の燈火に。念佛の衣ぞ急ぎ織る。

○妙見大悲者は。北の北にぞおはします。衆生願を滿てむこて。空には星こぞ見え給ふ。

「恐れる姿に」（山）「れ」原「な」「に」原「こ」

「降魔の相」（山）「がま」（原）「かよ」

「局」原「号」卽ち卷「自」原「目」「在」原「往」並びたる（山）「及餘諸住處」（和）（山）

「衆生」は「衆生の」歟（常）

經哥八首

○法華經八(や)卷(まき)は一部なり。擴(ひろ)げて見たればあな尊(たふと)。文字毎(ごと)に。序品第一より。受學無學作(さ)禮(らい)而(に)去(こ)に至るまで。讀む人聞く者皆佛(ほとけ)。

○鷲のおこなふ法華經は。鹿(かせぎ)が苑(その)なる草の枕。くさ枕。や。白鷺(はくろ)が池なる般若經。鶴の林の長き祈なりけり。

○法華經たもてばおのづから。戒(かい)香(かう)涼しく身に匂ひ。經には是名持戒行。頭(づ)陀(だ)者(さ)と說いたれば。佛(ほとけ)の道には障(さわり)あらじ。

○妙法習ふとて。肩わ袈裟掛(か)け年經にき。峯に上(のぼ)りて木

「もじごとに」の傍に原「本無之」とあり

「くさまくら」(山)原「くさまくら」
「白鷺が池」(山)
「はくろ」原「はくら」

「習ふ」原「ならう」
「肩わ」は「肩に」歟

も樵りき。谷の水汲み。澤なる菜も摘みき。

○龍女が佛になる事は。文殊の拵こそ聞け。さぞ申す。娑竭羅王の宮を出でゝ。變成男子として終には成佛道。

○文殊の海に入りしには。娑竭羅王波をやめ。龍女が南へ行きしかば。無垢や世界にも月澄めり。

○娑婆に須臾も宿れるは。一乘聞くこそあはれなれ。嬉しけれ。や。人身再び受け難し。法華經に今一度。いかでか參りあはむ。

僧哥十三首

「娑竭」原「娑伽」

○大師の住所は何處々々ぞ。傳敎慈覺は比叡の山。横河の御廟とか。智證大師は三井寺にな。弘法大師は高野の御山にまだおはします。

○天台大師は能化の主。眉は八字に生い分れ。法の使に世に出でゝ。殆佛に近かりき。

○聖の住所は何處々々ぞ。箕面よ勝尾よ播磨なる。書寫の山。出雲の鰐淵や日の御前。南は熊野の奈智とかや。

○聖の住所は何處々々ぞ。大峯葛城石の槌。箕面よ勝尾よ播磨の書寫の山。南は熊野の奈智新宮。

○大峯通るには佛法修行する僧居たり。唯一人。若や子守は首を摩で給ひ。八大童子は身を護る。

「な」の傍に原「無此字」とあり

天台大師和讃の句を用ゐしもの「相分れ」「佛の使と」とあり

「箕面よ勝尾よ」(山)(豐)

「石の槌」原「いさのつち」

「若」は若一王子の略ならむ「子守」「首」(山)「かうへ」原「のうへ」

○我等が修行に出でし時。珠洲の岬をかいさはり。うち廻り。ふり捨てゝ。一人越路の旅に出でゝ。足うちせしこそあはれなりしか。

○我等が修行せし様は。忍辱袈裟をば肩に掛け。又笈を負ひ。衣は何時となくしほたれて。四國のへちをぞ常に踏む。

○春の焼野に菜を摘めば。岩屋に聖こそおはすなれ。唯一人野邊にて度々逢ふよりは。な。いざたまへ聖こそ。卑しの様なりとも。妾等が柴の庵へ。

○柴の庵に聖おはす。天魔は様々に惱ませど。明星漸く出づるほど。終には從ひ奉る。

「珠洲の岬」は能登（山）（豐）「かいさはり」は「かいさぐり」か珠洲は琢數に通はせたりと覺ゆれば（源）「かいまはり」か（田）「あしうち」は「あしうら」（足占）歟

「へち」は「へろ」卽ち遍路なるべし「邊地」歟「つち」（土）歟といふ說あり

「ふむ」原「ふん」

「な」の傍に原本「無此字」とあり

天台大師和讚の句を用ゐしもの

○峯の花折る小大德。顏貌よければ袈裟よし。まして高座に上りては。法の聲こそ尊とけれ。

○冬は山伏修行せし。庵とたのめし木の葉も。紅葉して。散り果てゝ。空さびし。褥と思ひし苔にも。初霜雪降り積みて。岩間に流れ來し水も。氷しにけり。

○聖の好むもの。木の節鹿角鹿の皮。蓑笠錫杖木欒子。火打笥窟の苔の衣。

靈驗所哥六首

○いづれか法輪へ参る道。内野通の西の京。それ過ぎて。や。常盤林の彼方なる。あい〳〵行流れ來る大井河。

「つらだち」(山)原「つちたち」

高座(山)「ては」原傍に朱にて「キテ」とあり

「褥」は毛席の義(山)

「木の節」「鹿角」(山)「わさづの」原「わたつの」

内野(山)「あい〳〵」は「愛敬」歟(山)「愛々敬」歟「あひ〳〵」か(田)

○嵯峨野の興宴は。やまたうかつらまう〳〵車田二條河原。龜山法輪や。大井河。ふち〳〵かせに神さび松の尾の。最初の二月の。初午に富配る。

○嵯峨野の興宴は。鵜舟筏士流れ紅葉。山陰ひびかす箏の琴。淨土の遊に異ならず。

○四方の靈驗所は。伊豆の走井。信濃の戸隱。駿河の富士の山。伯耆の大山。丹後の成合とか。土佐の室生と。讃岐の志度の道場こそ聞け。

○筑紫の靈驗所は。大山四王寺清水の寺。武藏清瀧豐前國の企救の御堂な。竈門の本山彥の山。

○根本中堂へ參る道。賀茂河は河ひみつし。觀音院の下

「興宴」(山)「やまたう」は「山餉う」か(田)「かつら」は「桂」歟「まう〳〵」は「舞ひ舞ひ」の音便か「ふち〳〵かせ」は「淵吹く風」か又は「愛々敬」の類にて「淵々風に」歟

「きさらぎ」の傍に「無之」とあり

「ひびかす」(山)原「ひたかす」

「しやうのこと」は「箏の聲」か(志)

「さこそ」原「こてそ」

「四王子」(和)(山)「しみづのてら」(山)原「しのみつてら」「武藏」は筑前筑紫郡に武藏寺あり

「ひみつし」は「干水し」か(田)「ひろし」か

松。ならぬ柿の樹人やごり。禪師坂。滑石水飲四郎坂。雲母谷。太田袈裟の池。あこやの聖が立てたりし。千本の卒堵婆。

○觀音驗を見する寺。清水石山長谷の御山。粉河近江なる彦根山。ま近く見ゆるは六角堂。

○いづれか清水へ参る道。京□たりに五條まで石橋よ。東の橋詰四棟六波羅堂。愛宕寺大佛。深井とか。それをうち過ぎて八坂寺。一段上りて見下せば。主典大夫が二王堂。塔の本天降り末社。南をうち見れば。手水棚手水とか。御前に参りて恭敬禮拜して見下せば。此の瀧は。様かる瀧の。興がる瀧の水。

滑石水飲（山）

雲母谷（和）（山）原「きらくたに」

「京□たりに」は「京極くだりに」歟（野）

「大佛」は雲居寺の大佛なり（和）

「やさか」原「やさち」

「恭敬」原「苦行」

「やうかる」原「やうかな」

○淡路はあな尊と。北には播磨の書寫をまもらへて。西には文殊より南え南海普陀落の山に向ひたり。東は難波の天王寺に。舍利まだおはします。

雜八十六首

○萬刧年經る龜山の下は泉の深ければ。苔生す岩屋に松生ひて。梢に鶴こそ遊ぶなれ。

○萬刧龜の背中をば。沖の波こそ洗ふらめ。いかなる塵の積り居て。蓬萊山と高からん。

○海には萬刧龜遊ぶ。蓬萊方丈瀛洲。此の三の山をぞ戴ける。巖に練ずる龜の齢をば。讓る〱君に皆讓る。

「南え」は「南は」歟(田)「ふたらくの」の「の」の傍に原「無此字」とあり「舍利」(山)(豐)

小字にて雜の傍に「無之」次に「祝七首云々」あり

「ふす」は「むす」なしか謡へるならむ「松」原「よつ」

「れんす」は後にも「馬場の末にぞれんすなる」とあり

○海には萬刧龜遊ぶ。蓬萊山をや戴ける。仙人童を鶴に載せて。太子を迎へて遊ばゝや。

○黃金の中山に。鶴と龜とは物語。仙人童の密に立ち聞けば。殿は受領になり給ふ。

○須彌を遙に照らす月。蓮の池にぞ宿るめる。ほうくわう渚に寄る龜は。刧を經てこそ遊ぶなれ。

○御前の遣水に。めうさちこむほうなる砂子あり。眞砂あり。砂子の眞砂のはん天の巖と成らむ世まで。君はおはしませ。

○山の調は櫻人。海の調は波の音。また島廻るよな。巫女が集ひは中の宮。嚴粧遣戶は此處ぞかし。

「ほうくわう」は「放光」か

「めうさち」は「妙絕」か(野)「こむほう」は「紺るり」か「いさごあり」原「いさごあめ」「はん天」は「半天」か

「山のしらめは」の歌の前に小字「本此所ニ雜八十首云々」あり「嚴粧遣戶」(三)

○鈴はさや振る藤太巫。目より上にぞ鈴は振る。ゆらゆらと振り上げて。目より下にて鈴振れば。懈怠なりとて。忌々し神腹立ち給ふ。

○近江におかしき歌枕。老曾轟蒲生野布施の池安吉の橋。や。伊香具野余呉の湖のしかのうちに。新羅が建てたりし持佛堂の金の柱。

○これより東は何とかや。關山關寺大津の三井のおろし。いまおろし。石田殿。粟津石山國分や瀬田の橋。千の松原竹生島。

○武者を好まば小屋並び。狩を好まば綾藺笠。まくりあげて。梓の眞弓を肩に掛け。軍遊をよ軍神。

「湖の」の「の」は衍か
「しかのうち」は「滋賀の浦」か

「いま」の「ま」の傍に原「うろ」とあり
「いま」は「山」か
（野）

「小屋並び」下にも「狩場のこやならび」とあり
「かさ」原「のさ」
「をよ」は「せよ」か
（野）

○筑紫の門司の關。關の關守老いにけり。鬢白し。何とて据ゑたる關の關屋の關守なれば。年の行くをば留めざるらん。

○筑紫なんなるや。唐土の金白ろといふ金もあんなるは。有りと聞く。それを合せて造りたる。阿古屋の玉壺樣かりな。

○よく〳〵めでたく舞うものは。神巫小楢葉車の筒とかや。八千隈侏儒舞。手傀儡子。花の園には蝶小鳥。

○をかしく舞ふものは。神巫小楢葉車の筒とかや。平等院なる水車。囃せば舞い出づる蟷螂。蝸牛。

○心の澄むものは。秋は山田の菴ごとに。鹿驚かすてふ

「をば」のはの右に「も」あり

「かや」原「にや」「ひきまひ」は「蟷舞」か(志)「てくぐつ」(山)

新猿樂記に「蟷螂舞」とあるものなるべし(志)

引板の聲。衣しで打つ槌の音。

○心の澄むものは。霞花園夜半の月。秋の野邊。上下も分かぬは戀の道。岩間を漏り來る瀧の水。

○常に戀するは。空には織女流星。野邊には山鳥秋は鹿。流のきう達冬は鴛鴦。

○思は陸奥に。戀は駿河に通ふなり。見初めざりせばなかなかに。そらに忘れてやみなまし。

○百日百夜は獨寢こ。人の夜妻はいなじせうにほしからず。宵より夜半まではよけれども。曉鷄啼けば床寂し。

○天魔が八幡に申す言。頭の髮こそ前世の報にて生い

「しか」原「しに」

「きうたち」は「君たち」を音便にいへるか

「まし」原「よし」

「夜夫」(野)「否實正に」か「なじせう」ぞ」か(田)「這ひ何故爲うに」か(藤)「せうに」原「せうかり」ともよまる

「生い」原「おへ」ともよまる

ざらめ。其は生いずとん。衣笠長幣なども奉らん。咒師のまついぬとたゝひせよ。しない給へ。

○け正獵場の小屋並び。暫は立てたれ閨の外に。懲しめよ宵の程。昨夜も昨夜も夜離しき。け過は來たりとん。〳〵。目に見せそ。

○我をたのめて來ぬ男。角三つ生いたる鬼に成れ。さて人に踈まれよ。霜雪霰ふる水田の鳥となれ。さて足冷たかれ。池の萍と成りねかし。と搖りかふ搖り搖られ歩け。

○冠者は妻設けに來んけるは。かまへて二夜は寝にけるは。三夜といふ夜の夜半ばかりの曉に。袴とりして

「とん」の「ん」は「も」の草假字をしか寫ししか或はしか誤ひしままにしるせるか下にも所所にあり「け正」は「嚴粧」より出づ(山)「小屋並び」(山)「け過」は「懈怠」か「今朝」か「悔過」か(志)「撿見」か(源)「めに」は「めな」ならむ

「人に」原「人よ」

「きんけるは」は誤物なればしかいへるならむ「かまへて」(原)「かまつて」「夜の」の傍に

かけよけるは。

○吾主は情なや。妾があらじとも棲まじとも言はゞこそ憎からめ。父や母の離け給ふ仲なれば。斬るとも刻むとも世にもあらじ。

○美女うち見れば。一本葛なりなばやとぞ思ふ。本より末まで縒らればや。斬るとも刻むとも。離れがたきは我が宿世。

○君が愛せし綾藺笠。落ちにけり〳〵賀茂川に。川中に。それを求むと尋ぬとせし程に。明けにけり〳〵。さら〳〵きいけの秋の夜は。

○すぐれて高き山。須彌山着闍崛山鐵圍山五臺山。須達

「無之」とあり「よなかばかりの」の句に附せられたるならむ「かけよ」は「にげに」ならむ

「あらじとも」「すまじと」の傍に原「もらじと」とあり

「いはゞ」は「いはた」ともよまる

かづらの傍に「へも」とあり「とも」ならむ

「きざむとも」原「きさむこと」とよまる

「かはなかに」の傍に「無之」とあり

「きいけ」は「さやけ」を訛りて「さいけ」といひしか(田)

「高き山」原「たかきさん」

拏太子の六年行ふ檀特山。こせんこくせん鷲峯山。

○すぐれて高き山。大唐唐には五臺山。靈鷲山。日本國には白山天台山。音にのみ聞く蓬萊山こそ高き山。

○頭に遊ぶは文の鳥。沖の波をこそ數に書け。數こすれや。濱の眞砂は數知らずや。せはすの願は滿ちぬらむ。

○小磯の濱にこそ。紫檀赤木は寄らずして。流れ來で。古竹の竹のみ吹かれ來て。たんなりりやの波ぞ立つ。

○土佐の船路は恐ろしや。室津が沖なら天はしませかいはは。たて崎やさきのうちくら□御厨の最御崎。金剛淨土のつれなごろ。

○備後の鞆の島。其の島島にて島にあらず。島ならず。螺

「須達拏」(高)
「こく」或は「かく」か
「大唐唐」(山)
「國」の下に「無之」とあり

「せはす」は「はちす」(蓮)か
「流れこで」の傍に「無之」あり
「紫檀」「赤木」「古竹」(山)
古竹に此方來をかぬ「りりや」は「たりや」の誤(高)
「りりや」のやの傍に「ら」あり
「沖なら」は「沖なる」か(和)「沖ならでは嶋根が岩は立て崎や崎の浦々や」歟「嶋勢が岩は立て佐喜や崎の浦々や」か(田)
「つれなごろ」は「つなごころ」か

無し栄螺無し石華も無し。海士の刈り干す若布無し。

○明石のうちの浪。浦やなれたりけるや。浦の波かな。此の波は打ち寄せて。風は吹かねども。や。小波ぞ立つ。

○年頃撫で飼ふわうの駒。馬場の末にぞ練ずなる。ずはよしり出でて。若宮三所は乗り給ひ。慈悲の袖をぞ垂れ給ふ。

○上馬の多かる御館かな。武者の館こそ覺えたる。咒師の小咒師のかたをこり。巫は博多の男巫。

○御廐の隅なる飼猿は。絆離れてさぞ遊ぶ。木に昇り。常磐の山なる楢柴は。風の吹くにぞ。ちうところ搖ぎて裏がへる。

(野)「漣餘波」か(志)

「うちの浪」は「浦の浪」ならむ「なれ」は「馴れ」か「晴れ」か

「わう」は「りう」にて龍の駒ならむ原書に「り」と「わ」と紛らはしきかきざま所々にあり

「よしり」は「はしり」ならむ「三所」は「上所」ともよまろ

「かたをこり」は「片踊」か「肩踊」か「刀取」か(志)

博多は河内安宿郡の博多ならむ(志)

○頭は白き翁ども。佛事を勤めよせんたんは。頭白かる鶴だにも。澤には千歳年經なり。

○鵜飼はいとをしや。万刧年經る龜殺し。又鵜の首を結ひ。現世は斯くてもありぬべし。後生わが身を如何にせん。

○嵯峨野の興宴は。野口打ち出でて。岩崎に。禁野の鷹飼敦友が。野鳥合せしこそ見まほしき。

○羽なき鳥の樣かるは。炭取かいとりかいもどり。石投取。虎杖垣生に生うてふ抜蔂や。弓取筆取小弓の矢取とか。

○聟の冠者の君。何色の何摺か。好うだう着ま欲しき。麹

「せんたん」は「千歳」か(田)

「たかかひ」原「たたかひ」

「かいとり」は「楫取」か「綸取」か或は「搔取」にて「かいもとり」は「搔練」か「貝藻取」か(野)

「このうたう」は好み給ふなり(山)

塵山吹とめ摺に。花村濃。みな柏や。輪鼓輪違へ。ささ結び。纐纈前垂の寄生の鹿子結ひ。

○遊びをせんとや生れけむ。戯れせんとや生れけん。遊ぶ子供の聲聞けば。我が身さへこそ搖がるれ。

○御前に參りては。色も變らで歸れとや。峯に起き伏す鹿だにも。夏毛冬毛は變るなり。

○甲斐の國より罷り出でゝ。信濃の御坂をくれ〴〵と。はる〴〵と。鷄の子にしもあらねども。產毛も變らでかへれとや。

○王子の御前の笹草は。駒は喰めども猶茂し。主は來ねども夜殿には。床の間ぞなき若ければ。

「花村濃」の下に原「切句」とあり「みな柏」は「三つ柏」か(田)
「輪鼓輪違」(山)
「りうこ」原「わうこ」
「わちがへ」原わの字不明

「はめ」の右に「くへ」あり

○嫗が子供は唯二人。一人の女子は。二位中將殿の厨雜仕に召しゝかば。奉てき。弟の男子は。宇佐の大宮司が。早船舟子に乞ひしかば。奉いてき。神も佛も御覽ぜよ。何を祟り給ふ若宮の御前ぞ。

○我が子は十餘に成りぬらん。神巫してこそ歩くなれ。田子の浦に汐ふむこ。如何に海士人集ふらん。まさしこて。問いみ問はずみ嬲るらん。いとをしや。

○我が子は二十に成りぬらん。博打してこそ歩くなれ。國々の博徒に。さすがに子なれば憎かなし。負い給ふな王子の住吉西の宮。

○嫗の子供の有樣は。冠者は博打の打負けや。勝つ世無

「汐ふむ」は「汐くむ」か（和）「汐じむ」か
「まさし」は「正し」（志）
「ばくたうに」は「ばくたうよ」か
「王子」原わうち「我氏」（野）

し。禪師はまだきに夜行好むめり。姫が心のしどけなければいと佗し。

○拘尸那城の後より。十の菩薩ぞ出で給ふ。博打の願を滿てんとて。一六三こそ現じたる。

○此の頃都に流行るもの。肩當腰當烏帽子止め。襟のたつかた錆烏帽子。布うちの下の袴。四幅の指貫。

○此の頃都に流行るもの。わうたいかみ〱ゑせかつら。しほゆきあふみめ女冠者。長刀持たぬ尼ぞ無き。

○清太が造りしかりにもを。何しに研ぎけむやさけん造りけむ。すみたうなんなるに。逢坂奈良坂不破の關栗駒山にて草もえ刈らぬに。

「布うち」は「布打」か「布裏」か「わうたい」は「龍體」か「かみ〱」は「神々」「ゑせかつら」は「似非鬘」「似非神樂」「あふみめ」は「近江女」か「しほゆき」は「しほやき」「あふみめ」は「鐙女」か(野)「かりかも」の誤字にて苅鎌を謡物の調子にてしかいへるか或は「かりかま」か「やさ」は「やき」(燒)か原本「や」さ

○清太が造りし御園生に。苦瓜甘瓜の生れるかな。紅南瓜。千々に枝させ生瓢。ものな宣給びそ醶茄子。

○山城茄子は老ひにけり。採らで久しく成りにけり。あこかみたり。さりとて其れをば捨つべきか。措いたれ〳〵種採らむ。

○風に靡く物。松の梢の高き枝。竹の梢とか。海に帆掛けて走る船。空には浮雲。野邊には花薄。

○すぐれて早き物。鷂隼手なる鷹。瀧の水。山よりおち來る柴車。三所五所に申す言。

○京より下りしとけのほる。島江に屋建てゝ住みしかど。其も知らず。打ち捨てゝ。いかに祭れば百大夫。驗な

「さ」の間一字分あきたるやうにも見ゆ

「吾兒が三人」(高)「吾兒が見たり」(田)「吾兒嚙みたり」か

「措いたれ」(山)

「とけのほる」は「解上る」か(志)「としのはる」か(豐)「でこのばう」(木偶師)か(野)

くて。花の都へ歸すらん。

○くすはの御牧の土器作り。土器は作れど娘の顔ぞ好き。あな美しやな。あれを三車の四車の。あい行輦に打ち乘せて。受領の北の方といはせばや。

○尼は斯くこそ候へど。大安寺の一万法師も伯父ぞかし。甥もあり。東大寺にも修學して。子も持たり。雨氣の候へば。物も着で參りけり。

○池の澄めばこそ。空なる月影も宿るらめ。沖よりこなみの立ち來て打てばこそ。岸も後妻打たんとて崩るらめ。

○月影ゆかしくは。南面に池を掘れ。さてぞ見る。琴のこ

「くすは」(原)「くすり」「土器」(藤)「久須和美末岐乃度岐津久利」(寺門高僧記卷四所載童謠和讃)「楠葉の御牧に作るなる河内鍋」(堤中納言物語)(藤)

「あい行」は「愛敬」か

「三つ車の四つ車のあひ(間)行く」(野)

「あまけ」は「雨氣」に「尼病」を兼ねたるか

こなみは小波に前妻を兼ぬ

この音聞きたくば。北の岡の上に松を植ゑよ。

○遊女の好む物。雑藝鼓小端舟。簦翳艫取女。男の愛祈る百大夫。

○唐土唐なるこうの竹。よし節二節切り込めて。萬のれうらん巻き籠めて。一宮にぞ奉る。

○節のやうかるは。木の節萱の節山葵のたての節。峰には山伏。谷には鹿の子臥。翁の美女まり得ぬ獨臥。

○吹田の御湯の次第は。一官二丁三安樂寺。四には四王寺五さぶらひ。六せんふ七九八丈九傔丈。十には國分の武藏寺。夜は過去の諸衆生。

○娑婆にゆゝしく憎きもの。法師のあせる上馬に乗り

「おほがさかざし」は大笠をさしかくる男。「さもさりめ」は船の艫取の女。賴政集に、さもさりも小舟も見えずたはれめが聲ばかりこそ霧に隱れれ、とあり。「愛祈る」(山)「間祈る」か(野)「唐土唐」「よし」は「よい」(山)「よし」は「よき」か(志)「れうらん」は「れうらに」(綾羅に)ならむ(山)(志)「峰には」原「みれこは」「吹田の御湯」(山)「二丁」は「二寺」か「さぶらひ」は府の官人の侍か「傔丈」(山)「九門丈」(野)「娑婆にゆゝしきもの」以下前につ

て風吹けば口開きて。頭白かる翁ども若女好み。姑の尼君の物妬み。

○西山通りに來る樵夫。を背を並べてさぞ渡る。桂川。後なる樵夫はしん樵夫な。波に折られてしり杖捨てゝかいもとるめり。

○鴉は見る世に色黑し。鷺は年は經れども猶白し。鴨の首をば短しとて繼ぐものか。鶴の足をば長しとて切るものか。

○小鳥の樣かるは。四十雀。鶸鳥燕。三十二相足らうたる啄木。鴛鴨魚狗鳰鳥川に遊ぶ。

○西の京ゆけば。雀はぐろめ筒鳥や。さこそ聞け色好み

づけたれど別の歌なれば別行さす

「しん」は「新」か「おられ」は「ゆられ」か(野)「しり杖」は「鹿杖」か「尻杖」か

「はぐろめ」は「齒黑」か或は「つばくろめ」か

の多かる世なれば。人は饗むとも麿だに饗まずば。

○公達朱雀はぎの市。大原静原長谷岩倉八瀬の人。集まりて。きやみすゝみやめす。盥槽しなまし也。法師にきねかへ給べ京の人。

○淡路の門渡る特牛こそ。角を并べて渡るなれ。後なる牝牛の産む特牛。背斑小女牛は今ぞ行く。

○可笑しく屈まるものは唯。海老よ弥よ女牛の角とかや。昔冠の巾子とかや。翁の杖突いたる腰とかや。

○茨こきの下にこそ鼬が笛吹き猿奏で。かい奏で。蚱蜢めて拍子つく。たて蟋蟀は鉦鼓の〳〵よき上手。

○彼處に立てるは何人ぞ。稲荷の下の宮の大夫御息子

「はぎ」は「萩」か
「なか」の「か」の右に「か歟り歟」あり
「きやみすすみやめす」は「木や召す炭や召す」「しなまし也」は「買はましや」か
「きれ」は杵に巫女を兼ねたるか
「こさい」原「こさは」「めうし」原「めこし」「うむ」原「こむ」

「笛」原「ふに人」
「うはらこき」は「茨垣」(野)
「めて」は「右手」か「賞で」か(田)
「たて」は「さて」か「立」か(野)

か。眞實の太郎なや。俄に曉の兵士につい指されて。殘りの衆生達を平安に護れとて。

○女の盛なるは。十四五六歳廿三四とか。三十四五にし成りぬれば。紅葉の下葉に異ならず。

○海老漉舍人は何處へぞ、小魚漉舍人許行くぞかし。此の江に海老無し下りられよ。あのえひきこうの散らぬ間に。

○いざ給べ隣殿。大津の西の浦へ雜魚漉に。此の江に海老なし彼の江へいませ。海老まじりの雜魚やあると。

○見るに心の澄むものは。社毀れて禰宜も無く。祝無き。野中の堂の又破れたる。子生まぬ式部の老の果。

「なや」は「やな」か

「すい」は「すき」の音便にて海老小魚などをすく意

「海老漉舍人」は新猿樂記に「さゐすきとねり」は綺語抄にあり(山)

「えひきこうの」は「江にさゐの」か「きこそ」ともよまる

「あの海老ざこうお」(雜魚)か(野)「江にざこう(雜魚)の」か(田)

「子生まぬ」原「こそまぬ」

○男をしせぬ人。賀茂女伊豫女上總女はししあかてるゆめなえのすしの人。室町邊りのあこほご。

○樵夫は恐ろしや。荒らけき姿にこまを持ち。斧を提げ。後にしはきまい上るこかやな。前には山守寄せじこて杖を提げ。

○海におかしき歌枕。磯邊の松原琴を彈き。調めつゝ。沖の波は磯に來て鼓打てば。雎鳩濱千鳥舞い頽れて遊ぶなり。

○こゆりさんの渚には。金の眞砂ぞ搖られ來る。旃檀香樹の林には。付囑の種こそ流れけれ。

○隣の大子が祀る神は。頭の縮け髮。增髮額髮。指の先な

「しせぬ」は「殺せぬ」か「男怖ぢせぬ」か（野）「ゆめなえ」は「ゆめなみ」さもよまる「すし」は「兕師」か「すみのえのきしの人」か「あこほご」人名か「あら」のあの傍に「か」さあり「こま」は「鎌」ならむ「しはき」は「柴木」か（田）

「濱千鳥」（山）「雎鳩は待ち取り」か

香樹（和）（山）

「ますがみ」は「鬘」か

る摑神。足の裏なる歩神。

○さゝらが牛は憎きもの。きしいぬ神巫をひわかはねこその物願ひ。うゑさゑんたる。ともすれば物咎め。犬しとか。御許の物問ひに走る後手や。

○瀧は多かれど嬉しやとぞ思ふ。鳴る瀧の水。日は照るとも。たへてとふたへ。やれことつとう。

○鷲の本白を。くわうたいくわうの篦に矧ぎて。宮の御前を押し開き。ふとう射させんとぞ思ふ。

○侍藤五君。めしゝ弓矯はなどとはぬ。弓矯も篦矯も持ちながら。讃岐の松山へ入りにしは。

○大唐朝廷はゆゝしもり。黄金の眞砂は數知らず。閨に

「さゝら」は「さがら」の誤「相良が牛」なり（和）「きしいぬ」雉子犬（野）「うゑさゑ」は「右衞左衞」か（田）「や」の右に「よ」あり

「鳴るは」の「は」脫字か

「たへてとふたへ」は「絶えずとうとう」か「とふ」の「ふ」の傍に「う切句」とあり

「やれことつとう」は拍子の詞「やれことつとう」は「やれことんとう」か　やれことんとう　鎌倉末の作なれど破來頓等綺卷あり（源）

「くわうたいくわう」は皇太后か「皇太じぐの」（神宮）か

「ふとう」は「不道」か（志）「太う」か（藤）

「とはぬ」は「飛ばぬ」「持たぬ」又は「負はぬ」か

は黄金の蝶遊ぶ。まてこく巖と懸けはして。

○舞ゑ〳〵蝸牛。舞はぬものならば。馬の子や牛の子に蹴させてん。踏み破らせてん。眞に美くしく舞うたらば。華の園まで遊ばせん。

○鏡曇りては。我が身こそ窶れける。我が身やつれては。男退け引く。

○頭に遊ぶは頭虱。項の窪をぞきめて食ふ。櫛の齒より天降る。麻小笥の蓋にて命終る。

○大宮權現は。思へば教主の釋迦ぞかし。一度も此の地を踏む人は。靈山界會の友とせん。

○佛法及文殊とか。多門摩訶羅天。山王及傳教大師。慈覺

「ゆゝしもり」は原不明「ゆたかなり」か「ゆゝしかり」か(田)
「岩程架けはして」か(田)

やつれ(山)(豐)

日吉山王利生記に叡山陰陽堂の僧都慶増の作として「大宮權現は思へば教主釋迦ぞかし一たび此地をふむ人は靈山界會の友となる」とあり
「佛法及」(山)「及」

還如來。

○熊野の權現は。名草の濱にぞ下り給ふ。海士の小舟に乘り給ひ。慈悲の袖をぞ垂れ給ふ。

○鈴はさや振る藤太巫。目より上にぞ鈴は振る。ゆらゆらと振り上げて。目より下にて鈴振れば。懈怠なりとて神腹立給ふ。

○これより北には越の國。夏冬とん無き雪ぞ降る。駿河の國なる富士の高峯にこそ。夜晝とも無く烟立て。

○南宮の御前に朝日さし。兒の御前に夕日さし。松原如來の御前には。官まさりの重波ぞ立つ。

○大宮靈鷲山。東の麓は菩提樹下とか。兩所三所は釋迦

原「よ」「山王及」「還加來」(山)「ぐゑん」にて現か

重出六九頁參照

「はらだたまふ」は「はらだちたまふ」の脫か又はうたひくせか

「これより」の傍に「無此歌」とあり

南宮兒宮松原宮は廣田社にあり(山)

「とか」の傍に「無之」とあり

藥師。さては王子は觀世音。

○吉田野に神祭る。天魔は八幡に葉椀さし。葉手とり。加茂の御手洗に精進して。空には風こそさいさか程はこれ。

○いづれか葛川へ參る道。仙洞七曲崩坂。大石あつか杉の原。さうちうのおまつを行くを玉川の水。

○歸命頂禮大權現。今日より我等を捨てずして。生々世々に擁護して。阿耨菩提なし給へ。

○我等がすみかは花の園。生れは切利天。父をばくはんこくのわうや金包太子なり。我等がすみかは華の上。

○毗沙利國の觀音は。今は烏瑟も見えじかし。入りぬら

「さては」の傍に「きやくは」とあり「王子よ」か(田)

「葛川」は近江滋賀郡「崩坂」(山)「おほいし」の「ほ」の傍に「無之」とあり

「おまつ」は御前の誤か「ゆくを」は「ゆくは」か

「切」は「忉」(野)

「維曼國の王や金包太子」か(筑)

ん。聖徳太子の九輪は。光も變らで今ひをつあり。

○般若經をば船こして。法華經八巻を帆に上げて。軸をば檣に。やゝ夜叉不動尊にこち取らせ。迎へ給へや罪人を。

○正法世に住し。廿中劫かや。仙人舎利かや。建てたりし寶塔世に久し。

○聖の好むもの。比良の山をこそ尋ぬなれ。弟子遣りて。松茸平茸滑薄。さては池に宿る蓮の這根。芹蕁菜。牛蒡河骨打蕨土筆。

○聖を立てじはや。袈裟を掛けじはや。數珠を持たじはや。年の若き折戯れせん。

「今ひをつあり」は「いる日落つめり」か「今に立つめり」か

「やゝ」の「や」一字衍か

「こち」は「梶」の誤か

滑薄は蕈の一種（山）

「這根、根芹」の脱か「芹根、ぬなは」か

「けさ」原「けさき」「立てじ」は「樹てじ」（山）

○凄き山伏の好むもの。はあちきないてたかやまかくも。山葵濾米水雫。澤には根芹こか。
○驗佛の尊きは。東の立山。美濃なる谷汲の彦根寺。志賀長谷石山清水。都に間近き六角堂。
○心すごきもの。夜道船道旅の空。旅の宿。こぐらき山寺の經の聲。思ふや仲らひの飽かで退く。
○山の様かるは。天山守山しふく山。なからねご鈴鹿山。播磨の明石の此方なる。鹽垂山こそやうかる山なれ。
○讃岐の松山に。松の一本歪みたる。捩りさの捩りさに。そねうたるかこや。直島のさばかんの松をだにも直さざるらん。

「かくも」は「かゝも」さもよまろ「こしよれ」は「かしよれ」(粿米)か

「の」の上に「あふみ」の三字脱にて「近江の彦根寺」ならむ(山)「谷汲か」か(田)

「こぐらき」(木闇き)(田)「こゞしき」(山)

「なかられご」は「鳴られご」の衍か

「そねう」は「それみ」の音便か「礒馴れ」の音便か「かさや」は「なごや」の誤か「さばかん」は「さばかり」の音便(山)

○春の初の歌枕。霞鶯歸る雁か。子の日青柳梅櫻。三千年に生る桃の花。

○松の木蔭に立ち寄りて。岩もる水を掬ぶ間に。扇の風も忘られて。夏なき年とぞ思ひぬる。

○池の涼しき汀には。夏の影こそ無かりけれ。木高き松を吹く風の。聲も秋とぞ聞えぬる。

○直なるものは唯。連枷や。篦竹假名のし文字。今年生えたる梅楚。幡桙刺鳥竹とかや。

○武者の好むもの。紺よ紅。山吹濃き蘇芳。茜寄生の摺。良き弓胡簶馬鞍太刀腰刀。鎧冑に脇立籠手具して。

○法師博打のやうかるは。地藏よかせん二郎寺主とか。

「雁か」は「がれ」か「雁や」か

「ちろ」の傍に原「ひの」とあり

拾遺集及朗詠松かけに岩井の水をむすびあげて夏なき年と思ひけるかな（山）

朗詠集納凉の詩句（山）

原書「こさえ」とよまるれど「こさし」の誤ならむ
「さいさりだけ」は鳥たさす竹ならむ

「紺よ紅」（和）

「寺主」あるひは「寺師」

尾張や伊勢のみくつしもち。無下に惡きはけいそく房。

○居よ〳〵。蜻蛉よ。片脚をまいらんさて居たれ。働かで。簾篠の先に馬の尾縒り合せて。搔附けて。童冠者原に繰らせて遊ばせん。

○いざれ獨樂。鳥羽の城南寺の祭見に。我は罷らじ恐ろしや。懲り果てぬ。作道や四塚に。あせる上馬の多かるに。

○鵜飼は悔しかる。何しに急いで漁りけむ。萬刧年經る龜ころしけむ。現世は斯くてもありぬべし。後世我が身を如何にせんずらむ。

「みくつ」みゝつさもよまる
「もち」の「も」の傍に「ほ」とありさては「しぼち」卽ち新發意なり
「蜻蛉よ」「片脚」(山)「かたし」は「片端」か(田)

「祭見」(和)原「まつかみ」

「くやしかる」は「くやしやな」か
「ろしけむ」は「せし(殺)けむ」か「ころしけむ」か
「ずらむ」の傍に「無之」とあり

○粟津の興宴は。東大津の西浦へ。海老まじりの雜魚賣りに。大津の西の浦は惡し。上り大路ぞ何も良き。

○まさとを江口へ來んけるは。ありし昔を思ひ出でゝ。例の藤次が癖なれば。てこくせむとや生れけむ。

○聞くにおかしき經讀は。とうかく高砂の明泉房。江口のふちにたのやけの君。淀には大君次郎君。

○鷲の住む深山には。なべての鳥は住むものか。同じき源氏と申せども。八幡太郎は恐ろしや。

○媒人女のやうかるは。こちよふてらよまつさへふたこのみや人。すしの人。光めでたき玉川は。夜々照らす月さかや。

「例の」(和)(志)「てこく」は「てごう」(戯)か(志)

「み」及「には」の「は」の傍に「無之」とあり「なべて」原「なつて」

「宮人呪師の人」か「すしの人」は前出

二句神哥百十八首

○幣束は散るかと見れば住吉の。松などの木間より漏らん月をば。や。如何せんずる。

○ちはやぶる神神にましますものならば。あはれと思しめせ。神も昔は人ぞかし。

○神垣や御室の山の榊葉は。神の御前に茂り合ひにけり。

○月も月立つ月ごとに若きかな。つくづく老いをする我が身何なるらむ。

○月は船星は白波雲は海。いかに漕ぐらん桂男は唯一

口傳集に出づ

古今集大歌所に出でて初句「神垣の」古今六帖には「神垣や」とあり

「男は」の「は」の傍に「無之」とあり

人して。

○春の野に小屋かいたるやうにてつい立てる鉤蕨忍びて立てれ下司に採らるな。

○垣越に見れども飽かぬ撫子を根ながら葉ながら風の吹きもこせかし。

○東や香山の山に生る〳〵花橘を八房ふさねて手に採ると夢に見つ。

○冬來とも柞の紅葉な散りそよ散りそよな散りそ色變へで見ん。

○吹く風に消息をだにつけばやと思へどもよしなき野邊に落ちもこそすれ。

「かいたる」は「掛たる」か「さらるな」原「さしるな」とあり「さ」の右に「お」あり

後撰集に「垣越にちりくる花な見るよりは根ごめに風の吹きもこさなむ」新撰朗詠集に、「垣ごしに見れどもあかぬ櫻花根ごめに風の吹きもこさなむ」とあり

「葉ながら」(山)(豐)原「はながち」

「かうせん」の「ん」の傍に無之とあり

○戀ひしくは疾う〳〵おはせ我が宿は。大和なる三輪の山もと杉立てる門。

○なみも聞けこひそも語れ松も見よ。我を我といふ方の風吹いたらば。いづれの浦へも靡きなむ。

○須磨の浦に引き干いたる網の一目にも。見てしかばこそ戀しかりけれ。

○我が戀は一昨日見えず昨日來ず。今日音づれ無くば明日の徒然如何にせん。

○戀ひ〳〵て邂逅に逢ひて寐たる夜の夢は如何見る。さし〳〵きしとたくこそ見れ。

○擇食魚に牡蠣もがな。たゞ一つ。牡蠣もかき。長門の入

古今に「我いほは三輪の山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉立てる門」とあり

「こひそ」は「小磯」か

「かりけれ」の「りけ」の傍に「ろら」とあり

「たく」は抱くか

「かき」は「かな」の誤か牡蠣を重ねたるか

海の其の浦なるや。岩のそばに附きたる牡蠣こそや。讀む文書く手も八十種好紫磨金色足らうたる。男子は生め。

○伊勢の海に朝な夕なに海士の居て採りあぐなる鰒の貝の片思なる。

○我は思ひ人は退け引く是や此の。波高や荒磯の鰒の貝の片思なる。

○東屋の妻とも終にならざりける物故に。何とてむねを合せ初めけむ。

○水馴木の水馴れ磯馴れて別れなば。戀しからんずらむものをやむつれ馴ひて。

「よむ文」は前の歌につゞけ書きかつ意もつゞけど二句神歌なるをもて「讀む文」以下と二首ならむ或は「其の浦なるや」までが一首にて以下が一首ならむか

「しま」原「しき」

「たらうたる」原「たちうたる」

萬葉集十一に「伊勢の海士の朝な夕なにかづくとふ鰒の貝の片思にして」とあり新勅撰集には「かつくてふ」として入れり

「むれ」は「胸」に「棟」を兼ぬ

源氏物語葵に「みなれ〳〵てえしも常にかゝらずば戀しからじや」同松風に「みなれそな

○高砂の高かるべきは高からで。など比良の山高々と高く見ゆらん。

○雨は降る往ねとは宣(のた)ふ。笠は無し。簑とても持(も)たらぬ身に。ゆゝしかりける里の人かな。宿貸さず。

○山伏の腰につけたる法螺貝の。丁と落ち。ていと割(わ)れ。砕けて物を思ふ頃かな。

○賤の男(を)が篠(しの)折(を)り掛けて干す衣(ころも)。いかに干せばか。乾(ひ)ざらん乾(ひ)ざらむ七日乾(ひ)ざらむ。

○おぼつかな鳥だに鳴かぬ奥山に。人こそ音すなれ。あな尊と修行者の通るなりけり。

○寐たる人打ち驚かす鼓かな。いかに打つ手の懈(たゆ)かる

れて別るゝ程は」此の引歌に出所未詳の歌「みなれ木のみなれそなれてはなれなば戀しからんや戀しからじや」（細流抄）これと同源の歌なり（藤）

「み」（身）の傍に「無之」とあり

「てい」の傍に朱にて「トウ」とあり

新古今集貫之の歌に「河社しのにをりはへほす衣いかにほせばか七日干さらむ」とあり

鼓（山）（豐）原「つくみ」

らん。いとをしや。
○近江とて勢多とて來たれば在りも在らず。由もなき
栗太の。淀とて來たれば山崎の橋へ來んけるは。
○東より昨日來たれば妻も持たず。此の着たる紺の狩
襖に女換へ給べ。
○須磨の關和田の岬を搔い舞うたる車船。牛窓かけて
潮や引くらん。
○淀河の底の深きに鮎の子の。鵜と云ふ鳥に背中食は
れて。きり〳〵めくいとをしや。
○日暮れなば岡の屋にこそ伏し見なめ。明けて渡らん。
櫃河や。櫃河。櫃河の橋。

「勢多」(山)原「をた」

「車船」原「くるよふれ」名寄に「車船和田のみさきをかいめぐり牛窓かけて汐やひくらむ」とあり

「きり」原「きか」

新勅撰集俊成の歌に「都いでて伏見を越ゆる明方はまづ打渡す櫃河の橋」とあり岡屋伏

○御前より打ち上げ打ち下し越す波は。官まさりの重波ぞ立つ。

○此の殿に好き筆柄のあるものを。てこゝの富をかき寄せる。筆の軸のあるものを。

○我が君を何に擬へむ浦に住む。龜山の。岩角きに生ひたる松に擬へむ。

○立つものは海に立つ波群雀。播磨の赤穗が作れる腰刀。一夜すゝをのあだ名こか。

○いざ寐なむ夜も明方になりにけり。鐘も打つ。宵より寐たるだにも飽かぬ心を。や。如何にせむ。

○いかで麿。播磨の守の童して。飾磨に染むる褐の衣着

見共に附近の地名にて伏見に臥見を兼れたり

「てこゝ」は古語のてこなに同じく年少者を親しみいふ語（山）

「いはかどき」の「き」衍か

「すゝをた」は「すくせ」（宿世）の誤ならむ（山）

「まろ」の傍に「われ」さあり

む。

○山長(をさ)が腰に差(さ)いたるつゞらふち。思はむ人の腰に差させむ。

○結ぶには何はの物か結ばれぬ。風の吹くには何か靡かぬ。

○戀しとよ君戀しとよゆかしとよ。逢はばや見ばや見ばや見えばや。

○月も日も如何にうれしと思(おぼ)すらむ。流るゝ星の位まされば。

○盃と鵜の喰(く)ふ魚(いを)と女子(ご)は。はうなきものぞいざ二人寐ん。

詞花集好忠の歌に「播磨なる飾磨に染むるあながちに人を戀しと思ふ頃かな」とあり「つゞらふち」は「葛鞭」か或は「葛太刀」か

「はうなき」は「端なき」か(志)法なきか「用なき」か(田)

○夏草の繁みに食(は)むは駒かとよ。しかとこそ見め秋の野ならば。

○大江山生野の道の遠ければ。まだふみも見ず天の橋立。

○老の波磯額(ひたひ)にぞ寄りにける。あはれ戀しき若の浦かな。

○さ夜ふけて鬼にんしこそ歩(あり)くなれ。南無や歸依佛南(な)無(も)や歸依法。

○法華經の薪(たきぎ)の上(うへ)に降る雪は。麻(ま)訶(か)曼(まん)陀(だ)羅(ら)の花とこそ見れ。

○南無阿彌陀佛(ほとけ)の御手に懸くる糸の。終(をは)り亂れぬ心と

「しかと」は鹿とに確とを兼ぬ

金葉集に入る小式部内侍の歌

「鬼にんし」は「鬼人遁」か(志)

新古今集釋敎部に法圓上人の歌として載せたり

もがな。

○阿彌陀佛と申さぬ人は淵の石。劫は經れども浮ぶ世ぞ無き。

神社哥六十九首

石清水五首

○山鳩は何處か鳥栖石清水。八幡の宮の若松の枝。

○此處にしもわきて出でけむ石清水。神の心を汲みて知らばや。

○石清水深きちかひの流には。幾瀬の人か渡されぬらむ。

「うかぶよそなき」の次に「此次にいなりなろみつむれがらすさいふ歌あり奥在之次にすみよしの南客殿同在奥此二首外御本に不被書云々 凡二句神歌百之内五十二首在之神社歌等内に稲荷一首住吉一首入之」とあり

後拾遺集に出づ増基法師の歌結句「くみも知らばや」とあり

○石清水ながれの水をはる〴〵と。長閑なる世にすむぞうれしき。
○石清水ながれの末ぞ頼まるゝ。心もゆかぬ水屑と思へば。
○若宮のおはせん夜には貴御前。錦を延へて床と踏ません。

賀茂七首

○ちはやぶる賀茂の社の姫小松。万代までに色は變らじ。
○ちはやぶる賀茂の川邊の藤波は。かけて忘るゝ時の

水屑に身を兼ぬ

古今集に出づ敏行の歌四句「萬代ふとも」とあり元永本古今集には二句「かもの祭の」四句「萬代までに」とあり

間ぞ無き。

○斯くてのみ止むべきものかちはやぶる賀茂の社の万代を經む。

○人も皆桂挿頭してちはやぶる賀茂の御生にあふひなりけり。

○御生ひき引き連れてこそちはやぶる賀茂の川波立ち渡りけれ。

○神山の麓をこむる御手洗の岩打つ波や萬代の數。

○ちはやぶる賀茂の社の木綿手繦一日も君をかけぬ日ぞ無き。

拾遺集に出づ兵衛の歌結句「時のなきかな」とあり

後撰集に出づ三條右大臣の歌結句「萬代を見む」とあり

新後拾遺集に出づ匡房の歌結句「萬代の數」とあり「かず」原「かみ」

古今集に出づ結句「かけぬ日は無し」とあり

松尾二首

○ちはやぶる松の尾山の蔭見れば。今日ぞ千年(とせ)の始なりける。

○萬代を松の尾山の蔭茂み。君をぞ祈る常磐堅磐(かきは)と。

平野二首

○生ひ繁れ平野の山の綾杉よ。濃き紫に違(たが)はるべくも。

○ちはやぶる平野の松の色替へず。常磐に護る君が御代かな。

後拾遺集に出づ兼澄の歌

新古今集に出づ康資王母の歌

拾遺集に出づ元輔の歌二句「平野の原の」結句「立ち重ぬべく」とあり

稲荷十首

○稲荷には禰宜も祝も神主も無きやらん。社壊れて神さびにけり。

○稲荷をば三つの社と聞きしかど。今は五つの社なりけり。

○稲荷なる三むれ鴉あはれなり。晝はむつれて夜は一人寐。

○稲荷山社の數を人問はゞ。つれなき人をみつと答へよ。

○春霞立ちまじりつゝ稲荷山。越ゆる思ひの人知れぬ

「みつむれ」は「三群」か或は「三棟」か

拾遺集に出づ定文の歌結句「みつさ答へむ」とあり

貫之集に出づ

かな。

○稲荷山みつの玉垣打ち敲(たゝ)き。我が願言(ねぎごと)ぞ神も答へよ。

後拾遺集に出づ四句「我れねぎごとを」とあり

○稲荷山行き交(か)ふ人は君が代を。一つ心に祈りやはせぬ。

○瀧の水かへりてすまば稲荷山。七日のぼれる驗(しるし)と思はむ。

拾遺集に出づ

○我といへば稲荷の神もつらきかな。人の爲とは思はざりしを。

拾遺集に出づ長能の歌結句「祈らざりしを」とあり「おも」の下「は」を脱す

○君が代は千代もすみなん稲荷山。祈る驗(しるし)の有らん限りは。

春日十首

○春日山雲居遙(はるか)に遠けれど。徒歩(かち)よりぞ行く君を思へば。

○珍しき今日の春日(かすが)の八少女(やをとめ)を。神もうれしと忍ばざらめや。

○今日祭る三笠の山の神まさば。天(あめ)の下には君ぞ榮えん。

○春日山神に祈れる言の葉は。待つほども無く頼もしきかな。

○二葉より頼もしきかな春日野の。こだかき松の種と

萬葉集に「山科のこはたの山を馬はあれどかちよりわが來る汝を思ひ兼て」拾遺集に「山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞくる君を思へば」拾遺集に出づ忠房の歌

後拾遺集に出づ範永の歌三句「神ませば」とあり

拾遺集に出づ能宣の歌三句「春日山」結句「種ぞと思へば」とあり

思へば。

○天の下長閑けかれこや榊葉を。三笠の山に挿し始めけむ。

○君が世はかぎりもあらじ三笠山。峯に朝日のささむ限りは。

○君が代は萬代までにさしてけり。三笠の山の神の心に。

○君が代は豫ねてぞ著き春日山。二葉の松の神さぶるまで。

○天の下久しき御代の驗には。三笠の山の榊をぞさす。

千載集に出づ清輔の歌

金葉集に出づ匡房の歌二句「曇りもあらじ」とあり

「神さぶる」原「うみさぶる」

新勅撰集に出づ行家の歌

大原野三首

○大原や小鹽(をしほ)の山も今日こそは。神代の事も思ひ知るらめ。

○大原や小鹽の山の小松原。早木高(こだか)かれ千代のかげ見む。

○千年こそ君が御代をば契るなる。小鹽の山の峯の姫松。

住吉十首

○住吉の松さへかはるものならば。何か昔のしるしな

古今集に出づ業平の歌結句「思ひ出づらめ」とあり元永本には「神代の事を思ひ知るらめ」とあり

後撰集に出づ貫之の歌

後拾遺集に出づ重如の歌

らまし。

○音にのみ聞き渡りつる住吉の松をまう／＼今日見つるかな。

○住吉の神はあはれと思ふらむ空しき船をさして來つれば。

○住吉の松のこずゑに神さびて綠に見ゆる朱の玉垣。

○沖つ風吹きにけらしな住吉の松の下枝を洗ふ白波。

○住吉の御前の岸の光れるは海士の釣して歸るなりけり。

○住吉は南客殿中遣戸。おもひ繫金はづし氣ぞ無き。

○幾返り波の白木綿かけつらむ神さびにける住吉の

拾遺集に出づ四句「松の千年を」とあり「まう／＼」は「迴う／＼」か

後拾遺集に出づ後三條院御製結句「さして來たれば」とあり

後拾遺集に出づ蓮仲法師の歌二句「松の下枝に」とあり

後拾遺集に出づ經信の歌

枕草子に「渡つみの沖にこがるゝものみれば海士のつりしてかへるなりけり」

新後撰集に出づ俊成の歌四句「神さ

松。

○君が代は松吹く風の音高く。難波のこさん住吉の松。

○過ぎ來にし程をば捨てつ今年より。千代を數へむ住吉の松。

○住吉の一の鳥居に舞ふ巫女は。神は憑きがみ。きぬはかりぎぬ。しりけれも。

熊野二首

○紀の國や牟婁の郡におはします。熊野兩所は結ぶ速玉。

○熊野出でゝ切目の山の梛の葉し。萬の人のうはきな

びにけり」とあり

「こさん」は「こさも」なり

詞花集に出づ四句「千代はかぞへむ」とあり

「神は憑き紙衣は狩衣」か或は「髮はつき髮衣は借り衣」か

「はし」は「葉は」か「うはき」は「上着」か

りけり。

日吉二首

○願ぎかくる日吉の社の木綿手繦草のかき葉はとよ珍らしき。

○明らけき日吉の神も君が爲。山のかゐある萬代や經む。

吉田一首

○吉田野のきのねをわれかやまはやすとて。まう〱見つる神樂岡かな。

拾遺集に出づ僧都實因の歌結句「ことやめて聞け」とあり「とよ」は「とこ」か

後拾遺集に出づ實政の歌二句「日吉の御神」とあり

「巫女（きれにて「の」衍か）を吾かや舞は（や衍）すとて」か或は「ま」衍にて「囃すとて」か「まう〱」は舞う〱か廻う〱か

貴布禰一首

○思ふ事成る川上(かみ)に跡垂れて。貴船は人を渡りなりけり。

廣田一首

○廣田よりさだへ渡る船もがな。濱のみたけへ言(こと)づけもせむ。

伊津岐嶋一首

○安藝の國沼田(ねた)の郡に住む人は。嚴島(いつく)をば三島とや見

後拾遺集に出づ時房の歌結句「渡すなりけり」とあり

「さだへ」は一字脱か

る。

天露別一首

○清水に天露別のおはすれば。むべこそ神は天降るらめ。

木嶋一首

○太秦の藥師が許へ行く麿を。頼り止むる木の島の神。

○東には女は無きか男巫。さればや神の男には託く。

○夕暮に濱行く麿を海士かこて。魚乞ふ主。吾が釣もせぬ身を。

「あづまには」の前何々十一首とありしを脱したるか

萬葉集に「濱清み磯に吾をれば見む人は海士とか見らむ釣もせなくに」

○賀茂春日八幡日吉のはうの神。稲荷松の尾廣田住吉。

○神ならばゆらゝさらゝと降り給へ。如何なる神か物恥は爲る。

○此の巫子はやうかる巫子よ。汗衫に後をだにかゝいで。忌々しう着きうたる此を見給へ。

○奥山にしばひくをとの聞ゆるは。天稚みこのみす音ぞよ〱。

○打ち立つる鉦の鼓の初聲は。まづ寶主受け納め給べ。

○近江なる千の松原千ながら。君に千とせを讓る〱
みな讓る。

○極樂は遙けき程と聞きしかど。つとめて到る處なり

とあり「ぬしあか」は或は「主か」の誤ならむ

「着き居たる」か

「しばひく」は「頻弾く」か「柴引く」か「をと」は「琴」か「みす音」は「めす音」か(田)「御簾音」か

「鉦の鼓」(山)原「正のつくみ」

「みな」原「かな」

拾遺集に出づ仙慶法師の作朗詠集及

けり。

○阿耨多羅三藐三菩提の佛達(たち)。我が斷(た)つ杣に冥加あらせ給へ。

○いつしかと君にと思ひし若菜をば法(のり)の爲にぞ今日は摘みつる。

此一帖不慮相傳秘本事也

正　韵（花押）

右一册以寂蓮手跡徹書記門弟正韵奥書判形有之本書寫畢

千載集には空也上人の作とせり

朗詠集及新古今集に出づ傳敎大師の作

拾遺集に出づ四句「法の道にぞ」とあり朗詠集には「法の爲にぞ」とあり

梁塵秘抄卷一同口傳集卷一斷簡解說

佐佐木信綱

上文の校正中も、なほ梁塵秘抄の完本の捜索を續けて居つた。然るに文學士大原重明氏を介して、神樂郢曲の家なる綾小路子爵家を訪うて捜索を乞うたところ、其の結果として、圖らずも梁塵秘抄卷一及び口傳集卷一の斷簡一卷が發見された。そは文書の裏に書いた袋とぢ三枚の斷片を卷子本に改めたもので、室町時代の筆寫と思はれる。もとより斷簡に過ぎないのであるが、果して梁塵秘抄の一部であるならば、言ふまでもなく貴重な一資料であるから、その信ずべきものか如何に就いて調べて見た。

まづ長歌の中に、

そよ、君が代は千世に一度ゐる塵の白雲かゝる山となるまで、

とある。こは、後拾遺集賀部大江嘉言の歌であるが、曾我物語なる母の勘當免されし事の條に、「五郎扇ひらき斯うこそ謠ひ舞うたりけれ。君が代は千世に一たびゐる塵の白雲かゝる山となるま

で。と、おしかへし〳〵三べんふみて舞うたりけり。」とあるを見ても、當時謠つたことが明らかである。此の歌のはじめにある「そよ」、次なる古柳の中にある「そよや」の句は拍子で、催馬樂の櫻人に、「十町つくれる見て歸りこんや、そよや明日歸りこんや、そよや、」大嘗會田歌に、「こてのいたきまでや、れい〳〵なよや」とある類である。なほこの長歌十首は、いづれも古い集に出て居る歌のみである。

古柳の中に、「さがり藤の花やな」の句があるが、こは口傳集第十に、「長歌よりはじめて、古柳さがり藤をうたふ。」、八雲御抄に、「さがり藤花は今樣の詞。歌には見ぐるし。」とあるに合ふ。

今樣の中なる

春の初めの歌枕、霞たなびく吉野山、……

は、巻二の「海におかしき歌枕」(八六頁參照)、「春の初の歌枕」(九三頁參照)の類歌である。

きくにおかしき和歌の集は……

和歌にすぐれてめでたきは……

の二章、いづれも平安朝中期までの歌集歌合歌人の名を擧げてあるは、此の歌の古い證とも見られる。歌人のうち、業平を省いたのは、調の上からであらう。道命を加へたのは、宇治拾遺物語

にあるごとく、和泉式部とのことがある故もあらう。

常に消えせぬ雪の島……

は、金葉集の連歌に、「あづま人の聲こそ北に聞ゆなれ」「陸奥國よりこしにやあるらむ」の類で、當時流行の言語の機智を弄んだもの。

ばくちの好むもの……

は、巻二の博奕の歌の類歌で、(七八頁九三頁參照)何々の好むものといへる類歌は巻二に多い。

口傳集第一に、神樂催馬樂風俗今樣のおこりを說いたのは、口傳集第十の初めに、「神樂催馬樂風俗今樣の事のおこりよりはじめて」とあるに全く符合する。

熒惑星の事を逃べて、「聖德太子の傳に見えたり」とあるは、聖德太子傳曆に合ひ、また郢曲相承次第の文詞にも合つて居る。

以上を以て、この斷簡の信ずべきものなる事は明らかであると思ふ。

しかしてこの斷簡からして、吾人は少くとも次の四つの事實を學び得る。

一、梁塵秘抄巻一の內容が明らかになつた事。

二、歌曲上、長歌とは短歌の謂であつた事。

三、古柳の原形の歌を得た事。

四、梁塵秘抄口傳集は、梁塵秘抄以外に十卷あつた事。

此の四點を明らめ得た事は、この斷簡の出現が、我が國の歌謠史上に寄與した主な功績である。

以下、順を追うて說明する。

卷一の目次の、長歌古柳今樣三體の中で、今樣の數の多いことは、當時の流行のさまを示して居る。しかして春十三首夏七首云々とあるは、今樣の小別で、合計二百六十五首になるのである。四季とあるのは拾玉集所載の四季の今樣の類、二季は春秋を一對にしたものであらう。

古謠上、長歌とはどんなものであるか、歌儛品目の編者も「一體の歌と見ゆれど其の體知りがたし」といつて居るが、その全く短歌の名である事がわかつたのである。何故に短歌を長歌といつたかは、蓋し古今集雜體の部に、長歌を短歌と誤り記した以來、それに倣つて、平安朝末期の學者間に、長歌短歌の論がおこつた。そは、奧儀抄に、「問云、三十一字の歌を長歌と名づけ、五七の歌を短歌と名づくる如何、答云、歌は本體は韻字を用ふべき也」云々とある條や、古來風體抄などを見ると、分明である。しかして謠物の方でも、當時の用例を襲うて、三十一字の短歌をさして長歌といつたのであつた。

古柳の名稱は諸書に見えるが、其の原歌がどんなものかわからなかつたのであつたが、ここにそれが明らかになつた。隨つて萬葉緯の編者が、「風俗内稱我門歌是乎」といふ說(この說を歌儛品目の編者も認めてゐる)は、自然に消滅する事となる。惜しむべきは「以下略之」とあつて、此の一首より傳はらぬ事である。(口傳集第十には「澤に鶴たかく」といふ古柳云々とある。)

今樣は、春十四首(十三首の寫誤であらう)と題してあつて、新年云々といふのと、次に原筆者が後に加へた春の歌一首とがあり、其の他の八首は雜に屬するもの。これらは、思ふに今樣全體の中からここかしこの十首を拔抄したものと思はれる。此の中で、門に松を立つるを謠つたものは、本朝無題詩の惟宗孝言の自註や、堀川百首千五百番歌合の歌などと共に、風俗史上注意すべきもの。尺迦の月は以下四首は、卷二に出てをる。如何にして卷二の中の歌がここに抄出してあるかは、何とも解決しがたく、完本の出現を俟つて明らかにするより外は無い。

次に、「梁塵秘抄と名づくる事」云々數行は、秘抄の跋文などの拔書か。はた口傳集の序の一節か、不明である。

口傳集卷一の初めの部分が出たのは殊に喜ばしいことである。梁塵秘抄と梁塵秘抄口傳集との關係は、從來不明で、右記や八雲御抄のは口傳集をさし、徒然草のは秘抄をさしたものと思はれ、

前に引いた伊庭時言の群書備考にも、口傳集に就いて卷數の點を疑つてあるが、此の斷簡によつて考へると、梁塵秘抄が多分十卷あり、梁塵秘抄口傳集はまさしく十卷あつたので、本朝書籍目錄の廿卷といふ卷數に符合すると思ふ。卽ち今度刊行したのが梁塵秘抄の卷二、群書類從所收のが梁塵秘抄口傳集の卷十で、猶十八卷不足である。其の中へ些かながら此の斷簡が現はれたのである。(この文詞が「今樣と申すことのおこり」といふ處で、切れて居ることは惜しむべきである。郢曲相承次第には、熒惑星の事があり、次に、「其後廢而山蔭中納言再興歌」之仍號「今樣」云々とあるが、この口傳集の今樣のおこりの文も、それと同じであらうか、否か、今一二行あつたらばと遺憾である。之を卷一のはじめとして、群書類從所收の卷十までの間の卷々は、今に於いては不明となすより外は仕方が無い。

兎に角五辻家の廿卷の完本も出でず、他からも出ないので、梁塵秘抄に對してこれ以上の事實を明らかにすることは、目下に於いては成し能はぬところである。自分は更にこれ以上の發見によつて、これ以上の事實の明らめられむ期を樂しみ待つてゐる。

綾小路家本斷簡

梁塵秘抄卷第一

長哥十首　古柳卅四ゝ　今様二百六十五ゝ

春十三首　夏七ゝ　秋十五ゝ　冬九ゝ

四季八ゝ　二季八ゝ　祝八ゝ　月九ゝ

戀十四ゝ　思十二ゝ　怨廿ゝ　別四ゝ

雜 上七十六首 下六十二ゝ

長哥十首

祝

そよ、君がよ（代）は千世に一たび（度）ゐ（居）るちり（塵）のしら（白）雲かゝる

後拾遺集に出づ大江嘉言の歌

山となるまで、

春

そよ、春たつといふばかりにやみよしのゝ山もかすみてけさはみゆらん、

そよ、我やどの梅のたちえやみえつらん思ひのほかに君がきませる、

夏

そよ、我やどの池の藤なみさきにけり山ほとゝぎすいつかきなかん、

拾遺集に出づ壬生忠岑の歌

拾遺集に出づ平兼盛の歌

古今集に出づ作者不詳の歌

秋

そよ、□(秋)□(來)ぬとめ(眼)にはさやかにみ(見)えねども風のを(音)とに
ぞおどろ(驚)かれぬる、

冬

そよ、ほの〴〵と有明の月の月か(影)げにもみ(紅)ぢ(葉)吹お(颪)ろす
山お(颪)ろしのか(風)ぜ、
そよ、神な(無)月ふ(降)りみふらずみさ(定)だめなき時雨ぞ冬のは(初)
じめなりける、

古今集に出づ藤原敏行の歌

和漢朗詠集及新古今集に出づ源信明の歌

後撰集に出づ作者不詳の歌

雜

そよ、つのくにのながらのはしもつくるなりいまは我身をなにゝたとへん、

そよ、大原やおぼろのしみづよにすまば又もあひみんおもがはりすな、

そよ、むすぶてのしづくにゝごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな、

古柳卅四首

春　五首

古今集に出づ伊勢の歌初句を「難波なる」とあり金玉集には「津の國の」とあり

和漢朗詠集には「世にすめば又も見に來む大原や朧の清水面がはりすな」とあり

古今集に出づ紀貫之の歌

そよや、こやなぎによな、さがり藤のはなやな、さきにを
ゑけれ、ゑりな、むつれたはぶれや、うちなびきよな、あを
やなぎのやや、いこぞめでたきや、なにな、そよな、

是以下略之

今様二百六十五首

春　十四首

新年はるくれば、かどに松こそたてりけれ、松はいはひ
のものなれば、きみがいのちぞながゝらん、

春の初の歌枕、霞たなびくよしの山、うぐひすさほひめ
をきなぐさ、花をみすてゝかへるかり、

十三首の寫誤ならむ

この一首は原本小字同筆にて書き入れたり

きくにおかしき和歌の集は、後撰古今拾遺抄、しんせん金玉朗詠集、六帖前後の十五番、

和哥にすぐれてめでたきは、人丸赤人をのゝこまち、みつね貫之みぶのたゞみね、遍昭道命和泉式部、

つねにきえせぬ雪のしまほたるこそきえせぬ火はこもせ、□こゞこいへごぬれぬこりかな、ひこころなれど千鳥さか、

ばくちのこのむもの、平さいかなさい四三さい、それをばたれ□うちえたる、文讃京さん月〳〵清次さか、

尺迦の月はかくれにき、慈しのあさひはまだはるか、そのほご長夜のくらきをば、法花經のみこそてらいたま

新撰は貫之の新撰和歌集六帖は古今六帖前後の十五番は前十五番歌合後十五番歌合

早さ肩にしろせるは早歌にうたへるしろしならむしさごは巫島

卷二の四〇頁參照

へ、

佛はさま〴〵にいませども、まことは一佛なりとかや、
藥師も彌陀も尺迦みろくも、さながら大日とこそきけ、
尺迦牟尼佛はさたわうじ、みろく文殊は十二の子、淨飯王はさいそのわう、まやはむかしの夫人なり、
尺迦の正覺なることは、このたびはじめとおもひしに、五百塵轉刧よりも。あなたにほとけになりたまふ、

梁塵秘抄と名づくる事、虞公韓娥といひけり。こゑよく妙にして、他人のこゑおよばざりけり。きく物めでかんじて、淚おさへぬばかり也。うたひけるこゑのひゞきに、

卷二の一頁參照

卷二の一頁參照

卷二の一頁參照

虞公の聲よくして梁上の塵を動かししこと七略及び劉向別錄に見ゆ

うつばりのちりたちて、三日ゐざりければ、うつばりのちりの秘抄とはいふなるべしと云々。

梁塵秘抄口傳集卷第一

いにしへより今にいたるまで、ならひつたへたるうたあり。これを神樂さいばらふぞくといふ。かぐらは、あまてるおほんかみの、あまのいはとをゝしひらかせたまひける代にはじまり、催馬樂は、おほくらのつかさのくにぐ〳〵のみつぎ物おさめける□のくちずさみにおこれり。これうちあることにはあらず。ときのまつりごとよくもあしくもあることをなん、ほめそしりける。さい

高野博士所藏の斷簡及び平松家舊藏にて今架藏せるこの斷簡の寫に不明の字「民」とあり

ばらは、おほやけわたくしのうるはしきあそびの□□びわのをふゑのねにつけて、わがくにのしらべともなせり。みなこれあめつちをうごかし、あらぶるかみをなごめ、國をゝさめ民をめぐむよたゝてとす。風俗は調樂のうちまいり、かもまうでなどにこれをもちゐらる。又臨時客にもふるくはうたひけり。ちかくはたえてうたはざるか。此外にならひつたへたるうたあり。今様といふ。神哥、物様、田哥にいたるまで、ならひおほくしてその部ひろし。

用明天王の御時、なんばの宿館に、はしのむらきといふものありき。聲たえなるうたの上手にてありける。よる

高野博士所藏の寫によるに不明の字「ことのれ」とあり「しらべ」の「べ」の傍に「め」とあり

「よたゝて」は「よたくて」ともよまる傍に「如本」としるせり

「物様」の「物」の字不明にて傍に「如本」とあり

「むらき」は「むらじ」の誤聖德太子傳曆に九年夏六月有人奏曰有土師連

家にてうたをうたひけるに、屋のうへにつけてうたふものあり。あやしみてうたひやめば、おともせず。又うたへば又つけてうたふに、おどろきていでゝみるに、にぐる物あり。おひてゆきてみければ、住吉のうらにはしりいでゝ、水に入てうせにけり。これは、けいこく星の此哥をめでゝ、化しておはしけるなん。聖德太子の轉にみえたり。いまやうと申事のおこり。(以下ナシ)

梁塵秘抄　終

八嶋唱歌絶世夜有人來相和爭歌音聲非常八嶋異之追尋到住吉濱天曉入海者太子侍側奏曰是熒惑星也天皇大驚問之云とあり

文學博士佐佐木信綱氏著書編纂書要目

歌學論叢	一冊	明治四十一年九月刊
日本歌選上古之卷	一冊	明治四十二年三月刊
日本歌學史	一冊	明治四十三年十月刊
萬葉集古寫本攷	一冊	明治四十四年四月刊
梁塵秘抄	一冊	大正元年八月刊
和歌史の研究	一冊	大正四年十二月刊
賀茂眞淵と本居宣長	一冊	大正六年四月刊
近世和歌史	一冊	大正十二年一月刊
新古今集選釋	一冊	大正十二年三月刊
増訂梁塵秘抄	一冊	大正十二年七月刊
百代草	一帖	大正十四年十二月刊
増訂萬葉集選釋	一冊	大正十五年三月刊
仙覺全集	一冊	大正十五年七月刊

秘府本萬葉集抄	一冊	大正十五年七月刊
萬葉漫筆	一冊	昭和二年七月刊
新訓萬葉集	二冊	昭和二年九月刊
萬葉學叢刊 中世篇	一冊	昭和三年二月刊
竹柏漫筆	一冊	昭和三年六月刊
仙覺律師奏狀	一軸	昭和四年五月刊
白文萬葉集	二冊	昭和五年二月刊
春日本萬葉集殘簡	一帖	昭和五年二月刊
古今集選釋	一冊	昭和五年四月刊
分類萬葉集	一冊	昭和五年九月刊
萬葉集選	一冊	昭和五年十二月刊
萬葉學論纂	一冊	昭和六年三月刊
校註金槐和歌集 改訂版	一冊	昭和六年五月刊
異本伊勢物語解説	一帖	昭昭七年二月刊
梁塵秘抄 改訂版	一冊	昭和七年五月刊

昭和七年六月一日印刷
昭和七年六月五日發行

梁塵秘抄

定價金壹圓八拾錢

不許複製

編者　東京市本郷區駒込西片町十番地　佐佐木信綱

發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　三樹退三

印刷者　東京市神田區雉子町三十四番地　綾部喜久二

印刷所　東京市神田區雉子町三十四番地　宮本印刷所

發行所　東京市神田區錦町一丁目　振替口座東京四九九一番　株式會社　明治書院

電話神田(25)一四一四番　二六九五番　二六九六番

文學博士 佐佐木信綱先生著

▲萬葉集選釋

四六判 全一册 定價金參圓貳拾錢 送本料拾六錢

萬葉集の代表作たる長短歌約六百首を抄出して之に平明剴切なる評釋を加へられたもので、附錄として「萬葉集研究書解題」を添へた萬葉研究者必備の好著である。

▲古今集選釋

四六判 全一册 定價金貳圓 送本料拾貳錢

古今集中より著名な和歌を選擇して、之に平明剴切なる評釋を加へられたもので、最も簡便に古今集の全豹を窺ふことが出來る。附錄に「古今集論」が添へてある。

▲新古今集選釋

四六判 全一册 定價金貳圓五拾錢 送本料拾貳錢

新古今集中より其の秀歌を選び、之に平明剴切なる評釋を加へられたもので、附錄させる「六家集選」は併せて西行俊成等當時の歌風を知るに便利である。

▲校註 金槐和歌集

四六判 全一册 定價金壹圓 送本料六錢

金槐集は鎌倉右大臣實朝の家集である。本書は著者によつて新に發見された定家所傳本によりて校訂し、親切な標註を加へ詳細なる實朝年譜及び類句索引を添へた。

▲萬葉集選

新菊判 全一册 定價金壹圓 送本料六錢

萬葉集の秀歌中より更に純正にして平易なるもの、思想上注意すべきものを選び、略註を施す。學校の教科用、家庭の讀物及び作歌の爲の好參考書である。

▲萬葉學論纂

新菊判 全一册 定價金參圓 送本料拾八錢

現代萬葉研究の各方面に於ける一流の權威者五十名家の代表的研究論文各一篇を選び、これを文獻學・文學・人文學・言語學・植物學の五篇に類別した貴重な論文集。

GANNAN-DO
巖南堂書店
TEL.(261)0.396
東京·神田神保町二ノ二

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

purchased from
a gift by

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02980 2402